警鐘作家伝記。堺市丈六出身

この時代に生まれ育った河内の日々

昭和十年代後半に生を受け、 南河内郡野田村丈六に育った筆者。

ている。 後世 \mathcal{O} 当時は幼児でしかなかった。 日々よりも遥かに感化されることの多い日々は今もって息づ けれど戦争のさ中だった。

人も暮しも、ぎりぎり。 思えば時も空間も著しく変容した。

その様変わりは多様的過ぎる。 が価値を持つ。 \ , も消え果る、 半世紀を経ると、 だが、 心温か その直前だ。 北野田駅から旧丈六まで歩いてみる。 ****\ 人も生まれ変わって懐かしき笑顔は皆この 人たちが動き回っていたればこそ、 先人の心意気を無にする勿れ。 誰かがその前の姿を描き留めねば、 極々 今日 \mathcal{O} 部を遺して、 世 河 内 \mathcal{O} の古里

当然だという風潮である。そんなこと、 は大したことではない、死んで名前も行為もすべて忘れ去られてしまって この世には英雄豪傑の物語ばかりが蔓延って、 あるもんか。 さながら常人の生きざま

える。 戦後の河内の里をこの世に遺したい。 平凡と思わ に暮らした人々の日々は立派なのだ。僕はそう思う。 筆者はテレ 大間違いな価値観を喧伝するなと叱りたい。 れ ビドラマが相も変わらず英雄主義であることに、 る人たちが平凡に暮らし、 けっ して高名を馳せずとも、 常人こそ立派なのだ。 その考え方で、 怒りさえ覚 戦中 立派

0 2 年8月 東京オリンピック パラリンピ ツ ク \mathcal{O}

その真っただ中でこれを書き上げ、

今は亡き先人に贈る。 昭和二八年 登美丘東小学校卒 濱野成秋

河 内は吾らが故郷なれば

河内は吾らが故郷なれば

目次

年譜 • 著	終章	第七章	第六章	第五章	第四章	第三章	第二章	第一章
作歴その他	後日談	かくして日本は生き抜いた	登美丘に在ること	アメリカン・マインド	壺中不見天	歴史に負けない郷里となれ	母は皆、生きていた	心眼のヒストリー
1 1 8	1 0 7	9	7 4	5 4	4 2	3 7	1 6	5

第 章 心眼のヒス

母方の血は山城に眠る

まぎれもなく、わが産土は河内である。 が、 母の胎内を流れる血は奈良

の高取城にその脈流を発する。

境地にあった。今でも尾根伝いに上らねば元の天守跡には至らない。 は妙なところで暮らしていたのである。 にある高取の城は江戸期には珍しい しえの奈良の都にあ 奈良は田舎ではない。 りて山に通う、 一三〇〇年前 か。 山城の一つで、当時から奇妙な幽玄 \mathcal{O} 武家万能の江戸期に、 日本の首都で ある。 母方の先祖 が、 Ш 間 に \mathcal{O}

け出た んで、 いが、 志を育てたが、僕の母もあろうことか、この より発想がこんなだから、 明治期に女権を標榜した平塚らいてうは、 かか 維新以降の下級武家のどん底生活には、 女権思想に目覚めた、 った思いだけは筆者に、まだ幼いうちから伝えていた。 母は出自 当時としては珍しい生き方をしていた。 の家柄をうんぬんするを潔しとは 伊藤野枝はじめ多く 山城が遺した役宅の ほとほといや気が差して脱 ーつ の心 に住 \mathcal{O} 同

底ぶり 少女期に ではなく、 は宝塚にも憧れた。 ただ頑迷な父の血を受けて反発、 つまり女傑ぶりも市川房江さん 僕はその血を受け継ぐ \mathcal{O}

から、 山城離脱 の顛末はさながら犬神家の __ 族のようでさえあっ

1 母の 幼児期、 った。 そこは半ば朽ちた屋敷で 子供心に気づいたときには、 高取城の城跡 古色蒼然たる屋敷で \mathcal{O} 一郭に在 った。 の仮住ま

後に家禄を亡失した典型的な貧乏士族の成れの果てとみればよい 家老職 の役宅に住むとは恵まれていたと思われるかも知れ ない が、 維新

から、 そうだが、 どん底ぐら 仕切られた座敷の ただただ貧しい没落氏族で、 りには、 しょに、 大正三年、 赤貧洗うがごとしの状態だったと聞く。 すでに五人の兄姉が 石井の家は似たり寄ったりの家禄を食んでいた六組の家族とい 近隣の空き地を耕して細々となりわ しの だだっ広い 別家族がいた。 一つに石井家は暮らし、襖一枚隔てた向こうでは同じく 古屋敷の片隅で生を受けたとき、 部屋住まいとでもいおうか、 いた。 台地 八人兄弟姉妹の六番目で、 の周辺には侍屋敷が軒をつら むろん家老の家柄ではなく、 いを立ててい この 間ごとに襖で 女の子 生まれた時 て 周

この人たちには、 明治維新は災難の出来事だった。

が、 伸び 凌げたのだろう。 P, 維新で家禄は召し上げられても、 伸びやれ 身分制度が撤廃されたから、 \mathcal{T} 1 た かもしれない。 門閥は親 家老の役宅にいて、 女権派の母にはこんな生活でも心は の仇と言ったの どうに は福沢諭吉だ か飢えを

煮炊きをし 廃墟そのも 歩そと ていたとい \mathcal{O} へ出ると石垣が で、 薪がないとそこから廃材を拾ってきて、 う。 ま、 あ り、 1 取 わば樋 り壊されたお城は遠望もままならな 口 葉の世界の、 囲炉裏にくべて 奈良版である。

光のえんすい

やというほど顔を出す。 有島武郎でも種田 山頭火でもそうだが、 家庭内の確執や出自の不遇が 1

歪み果てた己が人生がしばしば顔を出す。 酒造りの事業家に生まれた山頭火が家業の没落とともに心 そう、 家業の没落とともに。 の奥底にも

僕の場合もそうだった。

べ りの生死は宮廷歌人となった下田歌子とは対照的である。 維新直後の東京の下町で没落家族の稼ぎ手のなった樋 読み手の心の琴線をかきならず。 П 葉は、 葉の、 ぎりぎ そのぶ

ある。 忘れもしない とで、いくぶんか、わが身の切なさが軽減できると考えたのかもしれない。 母の出自に人一 倍興味を示したのも、 母の幼少期に スポ ツ トを当てるこ

一度、母を、母の故郷へ連れ出したい。

せいで、 嗜虐的な発想をする。 それで自分の血族の 故郷まで連れ出されたのである。 言い換えれば、僕の母は息子である私の 一端が解る。 文学をやる人間は 1 つも、 屈折感情の そん

着いた先には、 わずかな石垣と段差があるだけだ 0

瓦が 慰みのような演出で畑の土をかぶっていた。

屋敷の礎石すら残存しない家老屋敷の敷地。

その脇にしゃがんで、滔々と想い出を語る母の言葉に耳を欹てていると、

学校の先生にならは い心境が伝わ 0 てくる。 ったお家のことをどんなに羨ましく思 これも没落士族の 心境か。 った か、 少女ら

帰りの車のライトを見ながら思われた。

まるで光の円錐だ。

Ŕ ていることに思い当たる。 明るく光が当たる、 そ $\bar{\mathcal{O}}$ 他 何千何万と起ったはずの出来事は全部、 その認識された部分だけが 明確に理解できるけれど 消え失せてしまっ

頃か 高取町 周 か つきよ だ家老屋敷に寝起きする頃の ということ。そこで何事が起ったか、さすが母は言ってはくれなかったが。 に印象に残った。 られて、 ただ一 **(**) りがまだ取り壊された残骸が散乱しており、 母はそんな境遇にあって女性のハンデがあっても薬剤師の免状を取 桃 \mathcal{O} 山に土地を得て、 つ、 城跡で逢引をしたことがある、 御殿医だった 天理教の布教使の職を得て、 久米に引っ越す前、 日暮れのころ、 「石川医院」の薬房方に勤めることが出来たが、 教会を建て移り住んだという。 貧困ぶりはたいて ひそかに村の若い 城跡に上がって、 という打ち明け話だけ 族が結束して久米寺 とても気味悪い、 いのことで解決できず、 衆の 相手の姿を探したら、 まだ大正時代の 人から声を が、 からほどち 怖か みよう か ŋ 中 ま け

どちか もあって、 生活は改善されなか け 0 きょ 桃 く 1920年代のバブル景気の恩恵に浴しない日本は、 山に土地を得て、 天理教の った。 布教使の職を得て、 大正から昭和 教会を建て移り住 **∼** ∘ 関東大震災 族が結束 んだけれども、 の日本経済 て久米寺 彼 次第に軍 らの カン \mathcal{O} 瓦解 極貧 5

国調を帯びてくる。

に来た を抱えて、丈六に越して来たのである。 純粋な奈良県人だった母が父と見合い結婚して大阪の軍需工場の二階 \mathcal{O} が、 昭和十年。 その年既に兄が先妻の子として生まれてい た。

二上山の山賊

だったなりに、 河内の里に来るまでの、 人間 への思いは幼い頃から重く培われていた。 母の精神構造はどんなだっ た か。 父親が宗教家

「今日は山賊を入信させたぞ」

の話である。 母方の里、 久米の石井家の主、 元吉は言う。 今からちょうど百年前

る。 元吉は母の父親で、 ** \ つも難しい 顔をしているが、この日ばかりは晴ればれと明る 一家して天理教に入信すると決意した大元締めであ

われたのである。 聞けば、 奈良の久米から堺に出るとちゅう、二上山の山越えで山賊に襲 元吉はひるまず、 臆することもなく、

やる、 やろ。 らに改心して、入信したというのだ。 に腰かけさせて、 り 「かわいそうに、 いや…神さんが救ってくれはる…と天理の教えを説くと、追剥は涙なが ほれ、ここに握り飯がある。三つ…三つともやる、 せやから、 お前さんも追剥にまで身を堕とすにはきっと訳がある まあ、ここに座れ…」と、その追剥をさとし、 たっぷり身の上話を聞いてやり、 心を入れ替えてがんば わしの持ち金も 傍ら の石 λ

える。 行けるのに、 家族が が、 みな、 母は怒った。 わざわざ徒で行った甲斐があったなあ…と、 それを聞 かんかんに怒ったと母自身が言う。 1 て、 良か ったな、 お父ちゃん…電車で大阪まで みなして父を讃

何でや、 んか、 分のうち、 腹空かして…い とも山賊に 1 「何いうてんねん、お父ちゃん っつもお父ちゃんの握り飯、 お父ちゃん!」 お父ちゃん! ほ やったて? ったらかして、 つも、 ろくなもん、食べんと…せやのに、 それで立派や思うてなはるんか? あほ! 何でよその人ばっ !」と母。「うちら、米の飯、食べら 食べたい思うてる。 何でや! 見て見、 か り助けたってんね せやのに、 うちの子、 お父ちゃん、 恥ずかしない それ、三つ みんな、 れ ^ ん。

そない言うたってん、と母。

この 話は家老宅の跡地に旅したときも、 思い 出して言ってい

ど、 久米の家では信者獲得に走っとった、 お父ちゃ お父ちゃ のお父ちゃ んは維新で藩校ものうなったし、 んは、 高取藩の、 せやのに、 最後の学頭やちゅう話やったけ 学者で食うこともでけ その気持ちも解らず、

泣 いて、 母は自分の父が死んで葬式に駆けつけた時、 周りから支えられていた。 祭壇に向かって、 大泣きに

鳴ったんは

悪

か

った…

を出す。 に 垢だらけ つい そんな母も僕が てきた。 取られたらあかん! の戦争孤児の群れだ 弁当の時間、 小学1年生だったとき、 った。 あの紅い欄干のある場所に群が ほかのお母親は必死だった。 にぎりめ 長野遊園に遠足 しをくれくれ、 したとき、 と真っ黒 だのに、うち り来た \mathcal{O} い手 は、

の母は、 成生、 みんな上げなさい、 あ んたは食べ んでもよろし

と、握り飯を全部与えたのだった。

妹従兄、 たが、 何度もよみがえった。 まだ小学生になったば その後、 みんな、 あの葬式の当日の光景が、 長野遊園でのことは知らない。 が、 かりの僕はその姿を見て子供心に涙 あのとき、 喪服で参列していた叔父、 祭壇も、 参列者の座す姿まで、 が込み上げ 伯母、 従

も故郷 1 るのは 久米の家は教会付設の建物だが、 の廃家 心 の慰みである。 の歌の家同様にボ 口 ボ その居住権は石井家のままで、 口になっ てもいまだに原型を留めて 現 在 で

も我々は生きぬいた、 に葬儀の棺桶がここから運び出されて…お前、 寄せられるように、 めどなく流れ この前、 息子を連れて墓参りに行 て止められず、 立ち寄って、 生きぬいたんやで…」 息子に向か 家のがたがた硝子戸を開 ったとき、 つて、 この家の前まで来て、 これをどう見る? 「この暮らし… くなり、 毎年のよう 涙がと これで 吸 1

泣きながら言う父親に息子は唖然たるもの。

には、 記憶から離 貧生活そっくりだったと思って頂ければよい。 読者の 受験勉強の みなさまには、 れ得な 1 一項目にすぎないが、 人たちもいるの 石井家の維新後の生活は、 である。 その 脈 々たる苦難 明治維新な さながら樋 の日 んて、 Þ \Box は 1 葉 いまだ ま \mathcal{O} \mathcal{O} 子

たから、 てくださって、 教会を訪れた日 その夜は、 泊めてくれた。 の夜、 当時 会長さんは石井家とは高取時代から苦労を共に のままの客殿 夕方のお勤め、 \mathcal{O} いちばん 早朝の鐘や太鼓。 立派 な座敷に床をとっ それを聞

大人。 きなが と願ったことはな に息子と寝る。 結婚をした、 ら眠 会長さん い目を擦りながら起きる幼児だった私は今や老境で、 その教会の部屋で、 この夜ほど、 の奥様から心ずくしのお食事を頂いて、 枕もとに母の幽霊が出てくれればよい また客間として母と枕を並べて寝た座敷 母が父とお見合い その子も \mathcal{O}

はい る。 楽を踊り、 ないでくれと言ってば 登美丘町丈六の濱野家の母は嫁入り前、 小学校の参観日には欠かさず来る母は偉 つも級友たちの前に姿を見せる母が恥ずかしくて、 若い 父がそれを見初めて、 か りだった。 結婚した、 橿原神宮の か ったわけだけれども、 そして丈六に来たの 巫女さん 来ないでくれ、 もや 0 であ 来

父方の歴史

父方の場合もおどろおどろし

姉に、 深 発する ていた一族だけれども、 で、そこら辺 因幡城を攻め滅ぼし、そいつを居城にして岐阜と名付けた。この時代に頻 僕の 1 が、 ぼ 戦され 血縁は後に河内 それ で効を成したか、 んど暮らす運命だっ ŋ が遡 \mathcal{O} 田園山河を一手に って岐阜にまで至る。 の長曾根とは宿縁だと判明するので、 父定雄は後妻の息子で先妻との間に生まれた娘を 揖斐川の上流にて居を構えた。 た。 入れて豪農としてそ つまり、 岐阜という名は の 羽 振り 冬は豪雪地帯 河内には縁が を聞 信長が か せ

維新以後に誕生した農地法では、 嫡男が生まれると、 財産相続は みなそ

き伏せて、 したという。 の男子に継がれる。 後妻との間に出来た弟 腹違い の姉はそれを嫌が (私の父) を他家に養子に出すよう、 り、 大正二年、 彼女は父を説

愁嘆場を演じたと聞かされた。 泣いて離さず、それでも連れ出そうとする男と、 村はずれまで追いかけてきた実母は幼 い父の手を取っ 幼児の腕を引っ張り合う て、 定雄、 定雄と

定雄の父親にはしかし、さる目論見があった。

しておさまれば、この子にとっても大いに幸せと値踏みしたらし この定雄が百舌鳥八幡あたりの広大な田地をもつ濱野家の惣領息子と

だろう。 あ 開し拡大するさい、彦根の井伊さん宅が支店として事務所を提供してい 阜の所家と大阪河内の長曾根の濱野家は栄えると、末広がりを期待したの って、 濱野家は長曾根という地域を牛耳り、 父は成長して自分の出自を知り、大阪市内で軍需産業の事業を展 家紋 社用の、 の丸に橘も共通。 茶封筒の印刷からも言える。 所家はその支脈となれば、 長曾根は彦根の井伊家の城下にも **\ く久 岐

を捺せと言ってきた。 だと判明。 鉄南大阪線が工事をするさい、 と言うらし 政略とは、 地下 いが、それが濱野家では丈六の豪農ともつながり、 結婚だけではな 鉄企業が江戸中期まで遡及する家系図まで添えて、 日本では歴史が威張りかえる。 V) 中百舌鳥駅に当たる田地の持ち主は濱野家 養子養女…それを 页取 ったりやっ 戦後、 ハンコ たり」 地下

門閥は 親 \mathcal{O} 仇でもあり、 棚ぼ たの遺産でもある。

だが、棚からぼた餅で何億と転がり込んだか?

そうはいかん。ハンコだけ捺して、ちょん。

おり、 濱野家の菩提寺が明治大正昭和と、 お上に税金を払 ってい た。 その実績に濱野家は負けて…一 長年、 寺領として借りた形を執って 件落着。

宿命的な父母のお見合い

は大間違いやったと言う。 姿を見染めて恋心を燃え立たせ、 神宮に上が 父と母がまだ結婚する前、 Ď, 神楽殿で巫女の舞を、 父は若き母が白衣に朱染めの袴すがたで橿原 親に結婚してくれと迫ったのだが、 シャン、 シャン、 鈴を鳴ら あれ

て、 神社だから、 闘士のごとく罵ったのはこの頃だったが、橿原神宮は初代神武天皇を祀る うに騙されとっ 勝手に皇族関係かもと、 んなきつ 紀元二千六百年の大祭で日本中に轟く祭典をしたこともあ 1 たんやとか。 女とは知らん 女権論者に傾倒 か 1 0 い方に誤解していたらし たか ら始まり、 して薬剤師とな お 母 ちゃん 0 は平塚ら た母を革命 0 7

かなりが 心を決 つか 8 て求婚のため久米の実家に行ったら赤貧洗うがごとしで父は りしたが、 立ち合いに来た教会幹部が

立派な 郎党が住んでましたところ、 は由緒正 \mathcal{O} 「ここの天理教土佐分教会はね、 お計 のが建ちまして…石井さんは特によう尽くさはった…と、 5 1 L で…、 い奈良高取藩でおましてな、 この久米の桃 丹波市の教祖様のお告げがおましてな、 山貰 普通の家の出身とはちゃいますね 1 ましてな…教会も、 あ \mathcal{O} 山城の家老屋敷にわ ほれこのとおり 感服した しら ん。 特別 族 出

だ ように言うものだ 0 か…と気を取り直して結婚を決めたとか か 5 父も、 そうで 0 か、 御武家さんの出で…ご家老の

違い 母 第一、 は \mathcal{O} な 出自は高取町 1 母はその類で人間のランク付けをするのが大嫌いだった。 けれども、 には違いなく、 だからとい ってそんな程度で血統証明にもならな 幼少時には家老宅にて起居したことも

尉や関東軍 香蘭を使っ 甘粕大尉に殺された ってい それより母は、 た \mathcal{O} に、 の横暴ぶりに腹を立てていた。 て軍の宣伝映画を作ってまでして人心撹乱に加担 あ 伊藤野枝みたい \mathcal{O} 一件は許せないと言い、 関東大震災のどさくさ中に、 な女傑として、 後に満映 大杉栄と奔放な生活を送 思想犯とし の社長になって、 て捕縛され、 した甘粕大 李

か。 母の妹さん ちが強く、 金を与えてやりたか て讃えられる慈善家の実父の血を引くせい それ はなぜ軍需産業の は母の実家が説教師で極貧ゆえ、 折あらば、 の言葉が最も現実性がある。 ったの 大杉たちのように地下に潜った革命家たちに活動資 社長などをやる男か かも しれない けれども、 姉妹兄弟の 5 か、 \mathcal{O} 求婚を嫌が 社会正義を貫きたい 母にはやはり元吉翁と 犠牲にな らず 0 に受けた

頃、 鉱山を得て村 も使う鋼鉄 が 1 ところが家の経済は姑が握ってい るらしいと解って、 海軍と結び \mathcal{O} 搬入を一手に引き受けて大儲けし、 人全部を使 つき、 満鉄とも取引 さんざ苦労させられ損。 1 採 掘 して V たし、 して、 た 軍艦 夫は方々に二号さん、 \mathcal{O} 夫、 大砲製作や戦闘 加えて岐阜には つまり私の 三号さん 機操縦 7 父はその ガン

そんな父のダイナミックな活動を母は結構気に入っ て 7 て、 戦後になっ

かん。 ても は愛憎相半ばする、 λ のや…」 「お父ちゃ 嫁はんのそばで、 兄にも私にも言ってい んかて、 猛烈な男女関係だったのでは、 南京豆数えて食うとるような亭主になったらあ おっきな仕事やりはった、 たから、 結婚後の父母 と思う。 あんたもそうならなあ \mathcal{O} っつき方

第二章 母は皆、 生きていた

孟母織を断つ

のお陰で孔子に次ぐ賢者となった。 孟子の母は賢人としてとおり、その賢明さは実行に通じて、 孟子は母親

母は、 茶道でいうところの真のお辞儀をさせ、 ことでも判る。 が成長期にあって、常に自宅には英語や数学の先生が間借りし 百人一首をさせて兄と競わせるなど、 わが 先生に対して無礼があってはいけないと、 母親はさほどではないと思うが、 曜日と時間を決めて、 部屋代替わりに家庭教師をねだった していた。 教育マ 正座してロ マだったことは事実 僕には幼稚園 マ字を書かせたり、 のころから ていらした 僕

孟子の母はもっと凄い。

も引っ 母に会いに戻って来たら、 彼女も孟母三遷の譬えどおり、最高の学問を受けるに相応し 越したという人だが、 ちょうど織り上げんとしていた布を目の前でビ それほど愛情を賭けられた孟子も学問を厭 11 地 に散会

リビ 泣 IJ 破 1 て叱 ŋ お前 0 たという。 はこれと同じだ。 出来損な 1 \mathcal{O} 織物同然で終える気か

中 僕も、 宅で開いて、 11 \mathcal{O} った記憶がある。 て、卒業生名簿は今もちゃんと残されていて、墨の跡も麗々 お家から来た子が多か そん それは食べ物も十分ない毎日で石井家は家老宅の同居組何家族かと明 ス 大美野幼稚園に引っ な母だっ イズ…とやっ 今、 た ジェ 書家になって大活躍の小池喜代子さんと一緒に英語を習 か 5 ていた。 僕も、 ン 0 台風 張り込まれた前後 たけれども、 趣味 大美野幼稚園はあらかた大美野に \mathcal{O} 日も休まず、 人の 父 内山孝治、 \mathcal{O} か 血 彼女が 5, \mathcal{O} 濃 英語や和歌 政田良一、 1 こうちに 趣味 人間で耽溺 7) L 安本郁夫も て \mathcal{O} く芳し 講義 お住ま 瓦 \mathcal{O} 飛ぶ 型 \mathcal{O}

1 0 があ た頃の 1 ゃ 0 方が て、 昭和初期の大不況下、 全員が帰依したという。 たくましい生き延びる姿が見られたかも。 当時、 急激に勃興してきた天理教 家も財産も総て捧げて の集団入信だ か 5 \mathcal{O} 期からは想像もできない満たされた世界だったと思われる。

は、 地 族は、 明治 の土佐分教会に移り住んだ。 四散 \mathcal{O} したが、 おそらく決死の思いで高取の地を後に、 版籍奉還で山城として政務を執っ 家老の家に残って、 最後の最後まで城と運命を共に ていた高取藩に仕える者たち 橿原神宮に程近 い久米の した

就職は思うに任せない。 が約束され 大名や家老職の者たちには資産分けや爵位の授与なら 7) たけ れども、 まして高取藩の藩校勤めで出遅れた者たちは、 下級武士は警官になるか消防士に び に莫大な俸禄 なる 和 再

治、

大正と続

く混乱期を、

肩寄せ合って、

かろうじて生きて

1

た

母

 \mathcal{O}

魂洋才の気風 の下、 儒学など、 腐儒とまで呼ばれて疎んじられる。

算学など修めねば生きる道はいかように険しか ったか。

母には母の生き方を見つけるほか、なかった。

それが河内に後妻として嫁ぐ糸口だったのだろう。

北野田にも「星の流れに」があった

戦後 の混乱期、 南海電車難波駅前では進駐軍と一緒に歩くパンパンの

姿があった。

星の流れに 身を占って

どこをねぐらの 今日の宿

荒む心で いるのじゃないが

泣けて涙もかれ果てた

こんな おんなに 誰がした

敗戦後、 真っ先に目立ったのは焼け出された子らの浮浪児の群れと、

を失くし家を焼かれた娘たちの、 進駐軍の腕にぶらさがる姿だっ た。

体を売ってしか生きる道がない女性たちをパンパンと呼ぶのを、そのまま 小学生の僕らは、大人たちが浮浪児を不良の扱いをして寄せ付けず、 身

受けて、「パン パン!」と呼んで後ろ指をさした。どんなに彼らを傷つけた

か。 僕らには解らない。 が、 お母ちゃんは、 怒った。

「パンパン言うたったら、 あかんで! か わいそうやん

と 頬を打たれた。 なんでそんなに怒らはるんか、解らなかっ

って帰 丈六の家には親戚はもちろん、 った。 やぼろぼろのパ 来た人で話しながら泣か ッチや国防色の上着や、 見ず知らずの な い人は なんでもかんでも喜んで持 人まで次々と来て、 1 なか つた。 僕 \mathcal{O} セ

困りは は、 戚もい ている。 だ。その子とは60年ぶりに再会した。頭の毛が亡くなった老人だったが だれかて、 に風呂へ \mathcal{O} か 姉妹が戦後の大不況 泣きしはる…と、 「真魚ちゃん、あんたは幸せ者やったなあ…」と、しみじみ。「お母ちゃん、 ŋ 子 僕が東小学校から帰宅すると、よく来客があった。 幸せやな、 \mathcal{O} た。 子供が不良になって町の人に迷惑かけていると言って連れてきた親 ったら、 頭を抱いて、 いやや、 入ったら、 カネくれ 「うちにいなさい。ごはん、食べられへんなら、 ええお母ちゃんで…」と、 連絡してや。 また、 縁側の椅子に座って聞くともなしに聴 翌日から僕と暮らすことになった。 その子は僕の頭に石鹸をつけてくれて、 の中で子らを食べさせることもできない、そんな話ば て、 知らん人、来たはる、 ナイフ突き付けとなるわな…と泣きながらそ 俺は何でもしてやるで…」 力瘤をの子は見せながら泣くの また、 お母ちゃん、 たいてい 僕はその子と一緒 1 はらへ てい 「成生ちゃ ると、 の客は泣 ったら、 もら 兄弟 λ 11

母はけ っきょく布教使の父と同じだっ たの かも

れ! はたくさん 前回も書い ٢, 真っ黒な手を出す。 の浮浪児たちが たが 昭和二二年、 **\ て、 つかみとるやつもいた。 小学一 弁当をひらくと、 年生の長野遊園 しきりに みんな盗られまい でのこと。 そこに

自分の と 服を着てる浮浪児たちは握り飯を汚い手で受けた握り飯をほうば ゃん、あんた食べんでもええ、ここ子らにみんな上げなさい!」と言っ 逃げだす。 分まで与えていた。 ٤, 「やりや! 風呂に入らない、 やりや!」と脇にいた母が 真っ黒な顔をしてボ 、叫ぶ。 ロボ 「成生ち \mathcal{O}

えてい 僕も食べたか お母ちゃ ったが、うちのお母ちゃん、 んて、 偉い 人やが `な ::。 僕の手に したおにぎりまで与

この 日が、 ようやく僕は、 母は並のひとではない、 立派な人なんやと、

尊敬した最初の日だった。

 \mathcal{O} り社会正義に生きた人だったのだ。 母は 山賊に握り飯を与えた母の父親とそっくり、 今にして思えば、 父 の所業に怒ったけれども、 浮浪児に僕が手にする握り飯まで与えた母は、 けっきょく、 同じことをしたことになる。 父と同じく、 慈善家であ Щ

では僕は、 マリア ・テレサのような立派な人格者の血を引くの か

そうでありたいけれども、そうはいかん。

たのかも めんどくさい性格で織り上げ、 この掛け合わせで生まれてきたから、 時には国家を動かすような、 父の血が半分ある。それは例えて言えば、満州浪人に象徴され れな とんでもない血であり、 人間模様を醸す作品を平然と世に送り出 自分のとんでもない 放蕩の血でもあって、 混迷をネタに、

スメ 加担していた。矛盾だらけの自分を持て余していた母の蹉跌の一つであろ 母は、 自分も町の政治に関与したいと思っ の矢野紀美さん 0 お母様が 町会議員に出はるからと、 て か、 登美丘町時代に、 選挙運動に クラ

うが、 になっていた。 紀美さんも含め30 人ば かりが矢野邸の奥座敷で写真に納まる一 人

大将、お帰り!

わりゆ 大将、 人は家を造り、 く時代に翻弄されている人々を黙って受け入れ、 おかえ り ! 家が人を造るとはよく言っ た。 戦中戦後、 黙っ て眺めて 丈六 の家は

えた。 りあそばせと言ったとたん、 て、社員も何百となった頃だった。 があった。 もう大昔のことになったが、母が嫁いだ、 会社のものも下足番とか、 長曾根から堺に、 姑がすかさず、 堀江にと居所を変えて、本社工場もそこに建 色々出入りしていたからだ。 母は自分の旦那様に三つ指 大将、お帰り! その当時、 大阪 \mathcal{O} 堀 と言えと教 ついてお帰 江に本宅

なにせ、 具合を聞 大佐級、 当時は軍需産業は一種治外法権のようなところがあって、 今では歴史上の人物となった要人が父の会社に出入りして、 いて いやそれ以上に高くて、 1 たからだ。 憲兵でさえ、 直立不動で敬礼したとか。 社長 地位は 調達

ワイヤ ワイ もよかろうが、 もうあの時代すべてが歴史になったのだから、前述の仕事内容を話し P ワ もうちの製品だったと述懐する。帝国陸海軍の製造過程は当時の も彼 \mathcal{O} 口 工場 父の商う特殊鋼は プに最適で、 から出て いたし、 例えばゼ 一見鉄 戦艦武蔵の主砲の 口 の塊に見えて、 戦の フラップや方向舵を動か きわ 根元を補強する右 \Diamond て '硬度が 7

震え上がって、 程も順調に、 たちまち憲兵に捕まるが、「知らんのか! 信頼関係で綿密にできており、 の鉄は統制 対象になっていたから、 ものすごい 「ご苦労様です!」と、 スピードで仕上が 品質の良い 下手にトラックに載せて走っ 敬礼したそうだ。 材料さえ調達できれば、 これは特殊鋼だ!」と言うと、 って行った。 同じ鉄材でも普通 ていたら、 製造工

嫁いで来たから、 て帰ったとか。 満州の三スケと言われる大物も父の会社に出入りしてお茶漬け 父の、 はじき飛ばされるほどの熱気だ お国の為のご奉公で義理の母も鼻高々。 ったという。 そこへ母が を食 0

だが、社員にも召集令状がちょくちょく来る。

そのたびに父は盛大な壮行会をもって軍歌を歌った。

龍とい 黙々と材料調達に走ってい ュウスは大分後の話。 まだ戦艦大和も武蔵もある時代だ、 う帝国海軍の 主力空母と貴重な戦闘機パ 父にはすぐ知らされていたが、社員の誰にも言わず、 ミッドウエ 1 イで空母赤城、 口 ツ トを沢山失ったニ

決意し、 て「濱野は 東京大空襲の昭和二十年三月十日、 それでも家具の専門店の並ぶ立花通の ん うちの家具、 全部買うてや」 父は大阪も危ないと、 大手店舗 の社長から乞わ 社員 の疎開を

「よっしゃ!」

「安しとく」

「高いままでええよ。 大阪は負け \sim ん 空襲で焼けたりせえへ ん。 高射砲

で全部、叩き落したるがな」

父の、 そんな強がりも虚しく、 数日後、 大阪も猛空襲を受けて、 父の本

社社屋も倉庫も軍需工場も丸焼けに焼け落ち、 要激減となり、 休業に追い込まれた。 操業中のマンガン鉱山も需

それから間もなく敗戦。 父の手許に残っ た財産は丈六に遺した自宅と美術品ぐらいのも 会社は休業。 取引会社という会社もみな倒産。 か。

 \mathcal{O}

った。 らけの元社員が社長宅を頼って住み着いた。どこでも見られる雑居生活だ 奉公人だった。 のこる当時は、 そんな会社の社長って、 なんのことはない、復員して帰国して住む家とてない垢だ 敗軍の将でも家来は忠誠をつくし、社長宅に棲み ただのルンペンみたいな者なのだが、 封建色の つい ても

り着いた元社員が 軍需事業の破綻 \mathcal{O} 十人もごろごろしていたのである。 しわ寄せを被るのが母だっ た。丈六の家を頼っ てたど

米なし芋なし、 どないするねん…

と、ぼやく母。

は父の真意は測りようもない。 アメリカさんを沢山 てきたようだが、どれも役立たず。街は進駐軍であふれ、思い 父は焼け跡から燃え残りの帳簿やハ 呼 んでのダン スパ ン ーテ コ や証明書をあれこれ イだったの か? 0 いたの 今となって かき集め

ダンスパーティの夜

ダンス ーテ イといえば思 い出が あ

丈六の居宅では応接間にてしばしばこれを催した。

戦後、 アメリカ軍がどっと入ってきて、 日本中にあふれ出

1) んくれる。 \mathcal{O} 人を傷め GIさんは逆にチョコレート、 目に遭わされることもないし、 満州になだれ込んできたロシア兵は暴虐の つけようという心根がまるでないから、 缶詰も角砂糖もふ んだんに。 塩せ 交換条件に無理強いされる作業もない。 んべ 彼らにはロシア兵のように、 V. 限りを尽くしたが、 粉ミルク、 何をもらっても後でひど 南蛮粉をたくさ アメ 日本 ノリカ

無償の愛なのである。

今から考えれば、 かしそれにし ては、 これは手なずけ策ともい 国家ぐるみで仕掛けてくるとも思えない、 えるかもし れ な 自由

気ままな日常性をあたえてくれる。

最高の ティが来て最高に盛り上がっ た慶びで、 浴びせた奴らと同じやつらだと言われても、 ろりと背の それ それは戦時中、 父が 僕ら子供はにこにこ招かれてやって来る制服に縁なし帽子姿の ?終戦 贈り物だった。僕らはチョコレートよりも、 が 昭 警戒心も何もかもすっ飛んだことを実感としてよく覚えて 高 の翌年ごろから、丈六の家でさか 和二十年の秋 い兵士たちが差しだす手を握り返 超低空飛行してきて田圃のあぜ道にいる僕らに機銃弾を 口から続き、 た。 プレゼントは貧困生活の あ \mathcal{O} 口 んにダンスパーティをやった マンチ 信じられな して、キャンデーをもらっ 角砂糖がうれ ツ クなク か った。 打開策として IJ ス しかった。 7 スパ

母が た母を激しく打っていた父が、 八月十五日。 負けると解ってて掛か セミの鳴く炎暑のなかで天皇の詔勅を聞き、 いま、目の前で、背広着てネクタイ締めて、 って行った男は んてあほや、 その あと、 父

わす大人たちを、 にこにこ握手してい、 ただただ、 応接間が進駐軍でいっぱ 見上げて、 困惑の極致だったと思う。 いになった頃、 酒を酌み交

るとは、 が 接収逃れだったと思う。 米英殲滅 今にして思えば、 一八〇度方向転換して友好モードに切り替えた最大の理由は、 正気の沙汰ではなかったけれども、 のために、 陸海軍と結託して猛然と工場をフル稼働させてい こんなバカ騒ぎを、 食べるもの一つ碌にない 父のその決断、 つま 時代 り、 おそらく た父 鬼畜 B

大阪市内は焼け跡だらけ。

寝泊まりする場所もない。 焼け残った家は接収される。

だから父は無駄な抵抗をやって放り出されるより、友好ムードで接して、

あわよくば接収逃れに出たのでは、と思う。

それ しかし当時、進駐軍の横流し物資に手を出さずに配給を待ち続けて って、ずるいね。今でも父のやり方を見て、そう考えぬこともない いる

者など、 いな か 9 た。 役場も焼けた、 トラックもない

通知も来ない。

今でいうホ させて、 復員してくる社員も全部、 そんな状況で、 風呂に入れて、 ームレスの状態で来たら、真っ先にしてあげるのは何かを食べ 焼け出された社員やその家族が頼っ ゴ シゴシ洗ってやる、 頼ってきて、 真っ黒な顔をして、 それしか方法がな て来るし、 垢だらけで、 南方か 5

しかし次の日から、食べるものがない。

ごととか、 進駐軍に言って、 キャメルタバコやマールボロなど、 パ ーティをやるからというと、 どんどんくれた。 よろこんで、 ノヽ 7 \mathcal{O}

塩せ λ ベ いと我 々が呼んでいたのは、 クラッカ ーのことである。

員を食わすためには、 Ł 心境をもちろん、 情け な な V) 1 が品不足をカ 今書くのもはばかられるかと案ずるけれども、 居候の社員たちは察して頼もしく思っていたらし 闇屋とて辞さない覚悟だったのだろう。 バーする米軍横流し の物資がお目当てだったか 父は僕らや社 社長のその

さんが 言い続けるから、 野菜とはまるで味も異なる。 ねんに取り除いて、 呼びすてでも、 て皿の上に皮を剥き取った玉ねぎと、 「成生ちや・ 「うん、僕、 進駐軍の若者たちは、ブラウンとか、ホールとか、名前を呼んでやっ で、 当時、 コ それをやったら、 ンサイス ん、蓄音機、 やれる! 日本の玉ねぎやダイコンは大変辛い。 却って親しみを感じてくれる。 鬼のことかと思っていたら、 の辞書で調べて、 混ぜて、 きょうも、 掛けられるか?」 新聞紙をひろげ、 そのまま口に入れ 刻んでサラダにしてみたところで、 進駐軍、ぎょうさん来はったらええな」 「あ、 薄切りに やっぱりそうや、 ぢっしゅ、 傍にいた浄教寺さんの息子 オニオン、 て、 したハム 今、 ハ! スー ディッシ の脂肪部分をたん オニオ 玉ねぎのこっち ハ! 冷门 およそナ で買える と吐き出 ユと言っ と

に見立てて遊んでくれたのである。 もらっ が模型電車の それでもアメリカ兵は常時うちに来ては、 いた。 とい イガ 2 ても、 クリ坊主頭 ル 用に買ってあ そんな道具をもって来てくれたわけではなく、 の僕は、 9 僕はそれでもロビンフッドになった積 た細長い かれら 親父に持参した写真を見せた カゝ 角材を使っ 5 フ 工 ン て シン フ ル グを教え \mathcal{O} 僕 7

で食べられる代物ではなか

った。

りで、 な気分だった。 相手は青い芽の青年だったから、 自分までア X (リカ 人にな ったよう

戦争とダンスパーティのアメリカ

戦争で負けるということはどういうことか?

恐怖と必死 僕の家のダンスパーティをみても解るように、 の抵抗と阿りの毎日で、自国の文化など、 生存が危ぶまれる飢えと そっちのけになる。

伝統の堕落と見做せるわけだが、食えて生き延びるか、日本人の矜持に固

手に抗戦を開始していたら、 それこそ、 日本文化はズタズタに破壊され、

るか。そんな折に相模湾から上陸してきた完全武装の米軍を相

執して死ぬ

東京はもとより、 京都も奈良もない。 完全に蒸発していただろう。

けだが、 言う。 くない 天皇か たかと思える。 抑えて安岡共々大きな反乱もなく本土決戦を脱するには、こうしたプライ とを入れよ、この二つを絶対に失ってはならぬと、 手にわたったとき、安岡は「義命ノ存スル所」と「万世ノ為二太平ヲ拓 を保持した、 終戦の詔勅の放送まえ、原文が思想家の安岡正篤の意見を聞くべく彼の ら直 後者が採用されたが、 その対等意識は戦後の日本には色濃く残り、 \mathcal{O} 々に陸軍大臣を拝命した阿南惟幾も、 ___ 鹿鳴館での舞踏会や爵位を戴いての社交界は西洋先進国の つに、 1 い訳とも宥めとも 対等に踊るダ 日本国としては、 ンスパ つか ぬ表現が是が非でも必要だったわ ーテ イは格好 いや、 血気に逸る陸軍改革派を 時の内閣に厳談したと 首班の 隷属民族に下落 の戦略 鈴木貫太郎 ではな した

流も立派に果たし得る情念もまた維持できる民族として示すにじゅ ティで米国士官たちと和み合うのは、 貴族趣味を模倣したと一概に見做すのは悋気に過ぎる。 のある方策だ んであった。 ったご言える。 日本民族は武力だけにあらず。 理屈抜きの対等文化交流とし 戦後 か \mathcal{O} ダン か る文化交 て意義 スパ

で、 妥当だったし、 さどる人たちの為、 徹底抗戦を主張していたから、 国力を盛り立ててい ながらも、 いやと泣いても…それでも民族としての矜持を失わず、 っても、 大本営直属の若手陸軍将校は国体 存 在 生きて、 の価値はあ 新日本としての民主憲法の下、 戦後の、アプレゲールだの占領政策だのと、文句を言われ 考えて、 ひとまずは戦争を終えるべし、 った、そのプロ ったのである。 アメリカさんと笑って、 万世のため、 セスに過ぎないと思えば、 \mathcal{O} 保持を主張 連日連夜のダンスパーティであ すなわち、 してやまず、 とした判断はきわ \vdash イレに行 これを機に戦後 日本の それはそれ 先々をつ 命 って情けな \mathcal{O} 7

河内 \mathcal{O} 風土記の、 またとない 一時代であったわけだ。

うちの ぶりを描き、家を守る女たちは、さんざ悲哀を味あわされたと言わせた 世話になりながらも、 犠牲にされ 二は上田秋成の 『二十四の瞳』 堺に住 父親に似た、 W て泣 でいた女流作家の で戦争未亡人となった主人公に、 かせるけれども、もう一 『雨月物語』を題材に、 横暴で身勝手な男たちを描いたし、 アメリカに這いつくばることだけはしなか Щ 崎豊子は つ 戦に狂奔する中世の男どもの愚か 「ぼ の戦後はララ物資や んち 夫も教え子もみな戦争の Þ 『!1つ 映画監督 \mathcal{O} ユニセフ 祖国 の溝 ったジャ 口健 で、 (T)

パンの つの姿を丈六でのダン スパ ーティに見ることができる。

人公に、 男女の生きざまを闇市でのパンパンにまで堕ちたタイピ く末路を、 成瀬己喜男も林芙美子の名作 その女性 高峰秀子と森雅之に演じさせる。 のいちずな気持ちをもてあそぶかのような男との流 『浮雲』 を映画化、 戦後、 仏印か ス 1 \mathcal{O} 女性 ら戻 た

昭和二十年代、 三十年代とは、そんな状況 \mathcal{O} 時代だ 0 た。

てにい 場で毎週のように上映される特攻や応召兵の苦悩を描いた『雲ながるる果 小、 中学生時代を戦後まもなくの二十年代に過ごした僕らは、 『戦艦大和』、 『二等兵物語』などに接し、 家は家で、 母が父に 登美丘劇

Ŕ り言 「戦争でごっつう儲けはった報いやがな」と、 今は情けなや売り食い生活 \mathcal{O} 数々。 ゼ 口 戦 \mathcal{O} ラダーを動かすワイヤ ーを納入していた、 ぼそりと言うたら始まる繰 そんな父

員社員を飢え死にさせるわけにいかない」 母は、毎日のように来る古物商に売り渡す骨とう品を引き出 わずかな糧食でも半ば施しを受けるみたいなやりとりを潔 と言う。 しながら、 1

ンを踊 縞の、 だ40歳ぐらいなのに、すっ がはじまると、 \mathcal{O} にその姿はくやしか ゼン そんな思いで、 女給さんのような着物が、ときには商売女のように見えて、 てみせる。 イを回し、 父が真っ白い 母はダンスパ 若い 針を取り変える。 った。 G 戦争に負けたんや…。 Iたちから大拍手をもらっ かり禿げ上がり、テカテカしたオデコを視て、 タップダンス用の革靴を履い ーティで進駐軍と踊 フ 才 ツ クスト しみじみ思った。 口 9 7 ツ 7 いたが、 1 1 てチャ \mathcal{O} たのだろう。 軽快 その、 なリズ 蓄音機 子供 ルス ま 縦

合った。 ほんまに、 でも笑い顔は返して来ない。 戦争で、 負けたんや、と僕は思い、 目線を移してしまう。 ちらりと兄を見ると、 目が

和史の彼方に消えてしまった。 こんな時刻も刻 々と過ぎて、 何もかも、 長期吉田政権とい 9 ょ に、 昭

僕の家はしかし、火宅だった

もろくに育たない。 父は裏の畑でサツマイモ、 丈六の丸田はんは魚屋さんで、 南京豆、 白菜…見よう見真似で植えるけれど 有難か った

たんよ、 中やがな、 母の愚痴は続く…負けると解っててやりはった戦争にお父ちゃん ほんま、 特殊鋼を全国から集めてな、 男はんのやることは、 どれもこれも…あとは涙 岐阜の鉱山に御座所まで作りは は夢

れるのが常だったが、帰宅後に黙ってネクタイをほどく父には苛立ちが読 み取れた。 北野田駅に降り立った父はポケットから南京豆を出して僕ら兄弟に

母の追い打ち。 鉱 Щ \mathcal{O} 村 \mathcal{O} 人 給料やれてますのかいな、使うだけ使うといて…」 と、

「あれも、 もう… …終わりやさかい…」 父の表情が険しくなる。

そんなんで、済みますか 「雇われる側になってみなはれ。 いな」と、 家族抱えて、 母。 「沈んだ武蔵かて…若い息子さん、 もう来んでもよろ

仰山死なさはって…どない謝りはるねんな」

また、 喧嘩やがな…言わんでもええのに、 と僕。

軍が使ったイギリス製の軍艦とは大違いや。 「俺も軍には尽くした。 つペ んもあらへ な んだ」 武蔵 の主砲は立派に撃てた。 砲身がぶち割れることなんか、 日本海海戦で日本海

わいそうに 「そやけど、 ねきにいた兵隊さん、 爆風で吹き飛んで死なば 0 たがな・ か

堺出身の学徒兵やと聞いて、 お悔やみに行ったがな」

た。 が、 あほやがな」相も変わらぬ母親のぼやきは昭和三十年代ごろまで続 も沈んだやないですか、 「そんなんで親の気持ち済むて思うてなはるんか? 復員してきた社員さんが アメリカに勝てるわけな 公園の鉄の柵まで供出して…こんな小っ 同居していた頃は毎日だった。 い。せやのに、あんたら男は 結局は・ んは、 武蔵も大和 ちゃ ほ んま… 1 てい 玉

「うるさい! 店のもんに聞こえるがな!」

「かめしまへん、 なんぼでも言わして貰います!」

声をひそめていた父の感情は遂に爆発した。

え!」平手打ちが鳴った。 「…お前みたいなやつ、ソ連にでも、 またやがな、 シベリアでも、 お父ちゃん、 どこでも行ってしま 止めてや!

止めにはいる僕ら。「子供は黙ってろ!」

飛ばされ、 んさんかわ 父の腕にすがる僕らは突き飛ばされて尻もち。 泣きながら隣の部屋 いそうや…」居候の店のもんの声が聞こえる。 へ。父が母を打ち またしがみつ つづけると、 大将、 1 て、 御り 振 り

「あんたら、 知らへん、 大将はな、 祇園の芸者にな…子供まで産ませた 1

母が番頭はんに言うとる。

ごり ょ んさん、 わ いら、 その話、 前 々から知 っとります…」

「なんやて? 知 0 てはった? 毎日会うてて、 なんで言うてくれ ~ んね

ん、やっぱりほんまやったんか?」

頷く番頭は ん。 顔をあげて、 「知らんか ったのは…ごりょ んさんだけ で

おます…」

「祇園ででけた子の話なんか、 奥方に言うの は男の仁義に反しますよ 7

…」と、番頭。

「何ちゅう家や…もうい 、やや…」 脇 から兄。 「しげお、 お前みたいな子、 お

父ちゃん、祇園にも作ったちゅうことやんか」

祇園 の子は、 雪子ちゃんいうて、 私と同い年で、 たった一 度だ け、

の家に遊びに来て、 僕らは蓄音機を回して、 無心に遊んだことがある。

ものすごい、愛くるしい、 肌の色の真っ白な子だった。

子供に罪ないもんな、 Ł, たった一回だけの約束で、 祇園の二号さんに

連れられ て来たということを、 母が今わの際に言った。

当時、 母が泣 いて言うには、元社員に働き口を世話せねばとい う父 の言

うとおりにしたら、 コメも要る、電車賃も要る、 せやけどどこも焼けても

うて、 働き口ないから、 公園で弁当食うて帰るだけやったという社員に食

べさせて 1 ると、 うちで食べるものが な い。三食が二食になる、 可哀そう

なんはあ んたらやんか。 それをお父ちゃ んいうたら…

話は戦前 羽振 ŋ の良い父のご乱行 \sim と移って、 みなはうんざり。

戦後は批判的な母も、 戦前戦中は父の正妻として、二号はんらしき人に

何と置屋 そんなアンテナを働かせていたのに、まさか京都の祇園には足を延ばして は、夏冬わすれず付け届けをする大阪の風習をきちんと守ってや の娘の子までつくっているとは、 思わ んかったら って

しか、 当、作るのやめや。 会社の連中にまで裏切られた思いか、 さめざめと泣いた手掛けはんは可哀そうやない 立派なもんや」という番頭に母は、「妻という字には勝てまへんから…と、 ては、女将としての器量まで備えていたわけだが、この祇園の 「奈良から来はっても、 ないやないか…」 あほらし…今更、 大阪のごりょんさんとして、 大和に帰られへんしな…ここにおる 「…今日から、 か」と言う母は、 もう、 意地を見せたはる、 あ 一件だけ んたらの弁 当時とし

な夫婦関係は丈六の家では、 戦争が終 わ り、 濱野の軍需産業は終わっても、 昔と変わらず続いていたのである。 この、 松竹新喜 劇 \mathcal{O}

ず、 道頓堀の中座で松竹新喜劇を見たら、 る話で、 あるとき父母が割合ご機嫌さんで、 「あ いんなん、 「どや、 おもろかったやろ」と父が言うので、 なんもおもろない、 うちで毎日起こってるもん」 父が親しくしていた渋谷天外の やっぱり二号さん、三号さんともめ 坊主頭の僕はすかさ 出る

と、言うてやった。

分だったようだが、 の血が流れているからだろう。 父は幕間に森光子さん、 そんなん 森繁久彌さんと談笑し、 か \Diamond へん、 痛いとこ突いてやった。 僕も紹介して、 僕には母 VI 1

あの家、暗雲垂れ込めとった

丈六の家を 「火宅」 と捉えていたのは、 僕だけではな か

前 の昔になっ 「暗雲垂れ込めとった」と言ったの た頃、 兄がぼそりと漏らした言葉である。 は、 兄で、 もう丈六時代も半世紀も

こんなぼやきは兄には似合わない。

句の った。 自分 の母を、 つも言わなか 育て \bigcirc った兄は、 親の気持ちを大事するが 若いころからなかなか きあまり、 人間 里に \mathcal{O} 返 出来た人物だ した父に文

こんな家族関係は生涯、 修復できることでは な \ <u>`</u>

するほ 蛍の光窓の雪での読書がふつうだった。 んでいた。 文学に耽溺する僕には、 かな まだテレビ放送もない時代。 い。兄もそんな心情か、 宗教にある神さん仏さんとは違い、 中学のときからへ 停電がしょっちゅうで、 ル 7 ン 自 暗が ッセ 分で解決 を読 りで

文学に救 いがあるか? そんなもの、 ある カン い

兄は僕に ^ ル 7 ン • ^ ッセを読めとすすめたが、 僕は中学に入 って から

文庫本で漱石を読み始めた。

を紛ら 読んでも心 族や義理の それは当たり前で、 中学時代は漱石尽くめだったが、 してい は癒されない。 関係は後 たが、 期 不遇な子は僕らだけではな 漱石も幼時から里子に出されたり戻されたりで、 \mathcal{O} 『明暗』 僕は作品の主人公になりきって、 期にまで糸をひく。 暗い 心 の胎内が明るくなりようがな か 0 次 から次 苦渋を糧に心 ~とい V)

民衆史は消え去るのか

難波か ら来たら進行方向右に出てください

化遺産 がっさい、 舎も売店も、 …と言い の面影さえあ たいところだが、 と軍隊式に大声を張り上げた、 ない。 僕らが遠足でお伊勢さん 木製の改札ドアも踏切も、 駅舎は住民たちの集う場で、 った。今は、 今はない。 もう、 へ行く時に整列して、 駐車場どころか、 相互タクシーの駐車場が ホームに上がる石段も、 なにもかも、 大げさかもし な 地べたに VI <u>!</u> れないが、 あ あります 11 っさい 0 V 文

僕はここに兄とよく来た。 昭和二〇年代。 七〇年も前のことだ。

か、 とえば神田 漢書の壺中天を子供心に感じ取っていたわけだ。 なんで僕が っとその種の喪失感がひどかったろう。 の書店街で生まれようが、 野田村丈六の生まれなの い状態だと気づかねば、 自覚なければ、 それまでである。 か、 その必然性がどうも解せ どこで生まれ育っても、 満州で生まれた子なん 自分が壺の中に な 7

育てども錦を追うに留まれば、 江戸 っ子を自慢する、 ラッキ やはり壺中の天を管見するにとどまる。 ーな富籤に当たった人は 粋 \mathcal{O} 町ぎをん

大海を知らな

すも それで微笑ま みんな気が 僕らの場合、 生粋の江戸っ子、 のでござる、 いたら、 気が付いたらドジョウのいる用水と田んぼと、 1 となる。 け 生粋の浪速っ子、 れども、 狂言の出だし文句のように、この辺りに住まい それで済ませれば、 人が生まれる 生粋の \mathcal{O} に場所と時代を選べな 河内っ子を自慢して、 人生、それだけのこと。 1 つも空襲 それは から、

とした未来し を知らせるサイレ か暗示してい ン の鳴る大空だっただけに、 なかった。 壺中 から見上げる空は殺伐

わらな 壺中の天から解脱し得ていないことを目撃し、 えでは、 連が言い るに留まるな」 それ ゆえに、 \ <u>`</u> 「これは優秀な大学で教えて貰いに来た、 出 たんに河内に両親を置いてけぼりにするという、 どこにも現代の賢人と呼べる人間は した初期隆盛期に上京して慶應に学 戦後、 と悟った。 1 や昭 この自覚は東大の連中と付き合っ 和三十年にもはや 安堵もしつつ他方で落胆も んだ時、 「戦後」 1 というような安易な ない ・のだ。 どい ではな 親不孝を実践 てみても、 つもこい 1 と政治家 つも す

だから古人の書いたものと格闘するしかない。

覚えて けて袋小路に陥るに 頼れても、 で失望の 旧聖書を読 大学 1 一年生 溝を掘 る。 모 んで、 一の頃、 口 り、 どこに頼れるな不明となり、 レ ンスもフロ 近松には そんなわけで、 似た思い でやるせなく、 救われるも、 ーベ シ ルも不甲斐なく、 工 イクスピアを連読 せ 絶望して帰郷 つない ドスト 人生の御用に追われ続 エ 三島由紀夫はさら フ したことをよく て失望 スキ でやや 新

わな イメ が 界だった。 日常であることに、 美空ひばりというかわ い か ジには、 , 5 河内にい お名前とくっ 敵機来週! ても、 安堵する 1 たく ハ い子がおませな歌で登場した戦後、 というアナウンスと不気味なエンジン音を伴 7 \mathcal{O} ツ な コ カン 5 1 な ばりちゃ 少女 か った。 \mathcal{O} シ ル λ は夢芝居だ ク パ ツ 1 が 限 ったし、 揚げ雲雀 り い それ \mathcal{O}

B 2 9 の大編隊が轟轟と天空い っぱい に飛行 7 11 0 た り、 艦載機 のグ

ラマン 貝と同じだっただけに、どっちに転んでも助からない、 日の炎天下に、泥から引っ張り上げられたナマズのような気持ちだった。 でさえおれば 反転して帰って 昭和二〇年三月深夜。 が 田 んぼ 1 1 いく、そんな日々が毎晩来ると、 のあぜ道を歩く人にダダだダダ…機銃掃射をし、 わけで、 大阪府南河内郡野田村丈六。毎晩の空襲で僕は防 僕ら、生れ落ちて、 泥の中に育つ西除 泥臭い防空壕に跳 大池の底ざらえの けろりと Ш び込ん \mathcal{O}

「空襲や!」空襲や!」

空壕の土の匂いと直結する。

せよ、 念で再現してもらうしか手がない。 り時空を遡及せねば 上げた。 のなかでうごめくダブ貝と、どこがちゃうねん、おんなじやんか、である。 こ板が敷か 後年、 が要ったわけである。 お母ちゃんが走ってきて眠くてぐずる僕をガバッと抱き上げ、どどどど すのこ暮らしだった。 走り出す。 駅舎も何もかも昔の面影がな これはプル 僕はこのころの想い出を織り込んで短編 僕の 縁の下に掘られた穴倉は、元々芋穴だったか、そこにすの 眠り ーストではないが、失われた時との闘 臨場感が引き出せないのだが、 の後半はい 何度も思ったから何度でも言うが、 読者を引き込むのに、 つも泥臭い、 1 のだから、活字マジ 湿った空気を吸いなが 「河内 田 W ぼに 1945」を書き 情熱とエネル ックで読者に想 いだった。 せよ、 西除川 集落に の泥

第三章 歴史に負けない 郷里となれ

歴史に負けない郷里とは

をもつ、 ど、 河内の わ らの仲間で代々農家の友人たちは、 祖たちは偉 侍がえばり返る時代に、せっせと田んぼを耕しておられた近郷近在のご先 n 刀打ちの 利 って、 野田村は中世から集落として成長し、 北野田駅を降りたって歩く道々会う人たちはみな、 1 先祖は忍耐づよいと心から思う。 て 心から和める笑顔の仲間だったと思う。 日 心が廣かった。 1 々で、 な いと思う。 いと息子は兵隊狩りに取られる。 診方を変えれば、 さぞ堪忍のしどおしだったろう。 僕の場合、 戦い 成人してから首都圏で活字と学問の太 権勢欲も名誉欲も超越した人間味が 人々 その血をひいて、ここに住まう僕 \mathcal{O} 日 の営みもちゃんと続 Þ でめ 家ごと戦に巻き込まれる。 んどか 自己抑制 中世から ったわけだけ \mathcal{O} が いていた。 しっ 人情味

り、 で、 そもの 中学の恩師 この書は丈六に住んだ筆者の家族の話を書く気で筆をとったの 筆の先はい さらには河内丈六を中心とする風土記へと発展し始めたのである。 始まりなのだが、 西野先生のご霊前に、仲間とい つしか濱野家の敷居をまたぎ、 紀貫之や在原業平に影響されてか、 0 しょに頭を垂れ 学校や先生方の営みに広が 7) てい Þ たの 登美丘 が が縁 そも

これも去来や晶子を教えてくださっ た西野先生のお陰である。

は自分たちの手で行はなければならない」 (大一五) 文芸評論家の薄田泣菫は大正末期の浪漫後期に 「武力の戦争は軍人が してくれる。 とい ったが、 その後に来る文化 『太陽は草の香がする』 そのとおりで、 の競争

消 物 する \mathcal{O} 無情な変遷に活字で抗って書き遺さねば、 \mathcal{O} である。 河内文化の激動期は雲散霧

が聞こえて W と座ってい 現に終戦 1 から間もなく、 た。 た。 僕の母が習い 東小学校では運動会の競走楽が鳴り続け 新丈六の 、に来て、 高田良子さん 1 が くり坊主の僕はわきにちょ のおうちか てい らは、 た。 琴 \mathcal{O} 音

16のとき鳴り響いた 汽笛の湯気は今いずこ

けれども、 脇から入ると、 この、 中原中也 それがいまも心によみがえる。 1 \mathcal{O} つも雅な琴の音が 「頑是ない歌」 漏 にあるように、 れ聞こえてきた。 新丈六の、 これは七十年前だ 登美丘 劇場

高野線は難波と郷里を結ぶ

難波から来た2両か3両連結 の緑の電車が南海高野線だ った。

百舌鳥球場が空きあがるのに、 のろの ろ電車で有名で南海ホ おかまいなし。 ク スが連戦連勝の時代に難波球場は中

て、 て乗 移るために、 か 線がもどか 11 本線 2 天下茶屋駅を過ぎ、 が って \mathcal{O} 本線の急行にサーっと追い 和歌山行きよりス 1 たたけれど、 左急カーヴの坂道を上がる。 と左折する。 いっぺ しばらく和歌 んでもええから本線を追い 少年たちの 口 本線と決別して汐見橋からきた ーで、 僕は走りが遅か 抜かされ、 切なる願 山行きの本線と並行 いをかなえてくれた試 さらにのろのろ微速にな 抜いてくれよとねが 9 た こので、 して走る。 のろい ル に乗り た 高 1 野 7 0

この岸里の分岐点も、今はない。

まもなく帝塚山駅である。 そこから街中をしばらく進むと住吉東駅。

住之江の 岸による波 夜さへや

夢の通い路 人目よぐらむ

夜這い,で、 もなく電車は大和側 の連発する これは当時の貴族の通婚の歌であるが、 夜ば 「ヤバイ」 いとも読める。 の鉄橋へ。 の歌である。 優雅な恋の営みが住吉東でとは…と思う間 人目を忍んで逢いに行く。 下品に解釈すると、 ギャルたち 文字通り、

出される。 小学生だった僕はこのとき伝馬船を初めて漕いだ。 下を見ると川の流れはゆるやかで、 なんで兄が一緒でなかったか。成人してそんなことが気になる。 僕が父母と川遊びに来た 日が 思 1

川にかかる橋を小走りに駆け抜けたとか はんだった鳳 佐藤春夫が 品よう 『晶子曼荼羅』 (後の与謝野晶子) も複雑な家庭環境のなかで、 で書いているが、 駿河屋羊羹のおうちの この 大和 1 . ك

駅から東に出て三国ヶ丘高校のグランドとテニスコ 画館の常連だった僕だが、その丈六時代に重なって出る苦い思 の数奇な生涯を思い出 0 たあたりの市営住宅にいた一時期だった。 郷里に帰着するまで、高野線はわが人生と行き交う旅人か して堺東駅へ。 堺東宝、 宿院劇場、 \mathcal{O} 電気館 間を通っ \mathcal{O} 1 ような晶子 出は て行 この う映

幽谷を出でて喬木に入る

ないと詫び乍ら、 父も兄も会社 その 頃 の時間帯は負荷ではなく心の試練として良かったと述懐するが、 の立て直しに躍起にな 強烈な鶏糞の匂 1 の中で勉強 0 ており、 僕はい した。 つもすまな

こんな生活がやがて郷里を出でて東京に向かわせたのだろう。

身を立て名を上げ、やよ上げてよ…。

仰げば尊 しの歌にある立身出世を当然のこととする時代 だった。

組む。 うごめ た に帰る間だ のことば のは、 歴史の勉強をしていると、 これが いてい 三国 か にった。 りが中 る。 ケ丘高校 一生を賭けるライフワークとしよう、 東京でいちかばちか、 心で、その回転軸の周りに文化、 のグランドとテニスコートとの 出てくる事項は中央政権がどう動いたか、 文字を頼って思想や生き方と取 戦 という決意を固め出 間 (いくさ)、 の道を歩い 諸制度が て自宅 そ

三国で学ぶ有人たちはみなエ リー \vdash になるの かな。

ことか。 てい クリスマ 井基次郎 幅 友人たちがくったくなくテニスに興じる。 \mathcal{O} 戱 加わ 僕は淋し スが近づくと、 画 のように自分で見つめ である。 りたくてその勇気なし。 1 この高校 アウトサ エ IJ ´イダー。 ートのさんざめきが、 の正門の てい るのは、 アメリカ人もいて、 斜 め前には、 その姿を眺める自分の姿を梶 かなり自虐的な一 なんと華やいで見えた キリスト教会があ 英語が コ 飛び交っ マだった。 り、

みなアメリカ人。 校英文学科大学院でユ あの時が 七歳。 ユダヤ系の第四世代や日系人もいる。 その二〇年後、 ダヤ系ア メ 僕はニ IJ カ文学の ユ 日 講義をし ク州立大 僕は てい のバ ノ | 聞 ツフ マンメイ のは ア 口

ラーの文学を教える。彼もアメリカ兵の一人だ。 の若者ば 『裸者と死者』と、 かりに対し、 ビートジェネレーションの哲学について、 僕も物凄い早口英語で語り続ける。 その体験をべ 物凄い早口 スにした

さと、 す向か 世のために太平を開いたに過ぎないぞと胸を張っていた。 校ちかくの粗末な仮住まいとなり、インテリの集まるらしいクリスマス のごとく体験した僕は、父の事業の末ぼそりの果てに、この、三国ヶ丘高 口 ンパンもいた、今村昌平の ィでの洒落た会話も平気でやっていたが、アメリカでは三国ヶ丘高校 ティ 州立大の研究員時代、僕はアメリカ作家と詩の朗読もやったし、パ -でのパーティで、ようやく、俺は日本人だ、 丈六の家での、アメリカンをたくさん呼んでの、アプレゲールやパ からも、 1 の教会であった一回だけクリスマスに出た、その時の強烈な寂 気分的には弾き出された心情であったけれども、 『豚と軍艦』モードそっくりのパーティを毎夜 日本は負けていない。 バ ツ ーテ 万 は

中国の故事に習い 幽愁 の絶えることはなか 小生は幽谷を出でて喬木に入ったが、 った。 それはそれな

第 四章 壺中不見天

学不厭

受戒となって 孔子の言う いた。 「学んで厭わず」 とい う戒めは 11 0 \mathcal{O} 頃か らか、 自分の 心

訴え、 身体が弱い。小学生時代は毎日、午前中から午後にかけて強烈な「だるさ」 を嘱望してくれない疎外感が子供の頃か も長袖を着ていた。 りにつくというふうで、 が両足を悩まし、 心労苦労が多すぎる。 父と母が毎晩のようにふくらはぎをもみほぐしてくれて、 時に一晩中ふくらはぎを襲ってその 生れ落ちての義理の仲。 やせ細った両腕を友にみせるのがいやで、 ら心に張り付い 後妻の子だから誰も将来 「けだるさ」を母に て いる。 やっと眠 おまけに 真夏で

は誰もが飢えに襲われ のだるさは表面を見て判ることではないから、 涙が出て止まらない。 学校に行って木製の椅子に座っているだけで、だるさが両脚を動き回る。 おそらく栄養失調のせいだろう。 濱野君は弱虫だ、 ていたが、 農家の子は恵まれていた。 麦飯少々にダイコンの漬物だけ。 泣きべそばかりと嘲られるが、 切ないこと限りな

だけど、 理の関係でとげとげ もらった鮭の缶詰や丸ごとハムを齧ると、嘘のようにだるい 父がダンスパーティなど空元気でやると、食料が手に入る。 子供心 栄養不良のせいだと気づかな につくづく思った。 しい空気だったので、生きることはかくも辛いことか い僕は ひ弱な少年で、 家じ のが消し飛ぶ。 進駐軍か ゆうが義 5

父と兄は僕に大学教育を受けさせるために、 毎日真っ黒になって 働いて

くれた。 点取れた 立に納める部品はな、 僕が模擬試験で平均点90点を出しても、 0 てペ ケだ」 と父。 公差 0 なるほど、 01ミリ〜 僕は甘 0 03ミリだ。 「いな。 誉めては くれ 社会じゃ な \ <u>`</u> 日日 0

だるさも退いてきて、 劣等感を押 し殺して勉強し続けたら、 頑張れば父も認めるまでになった。 その 頃か ら身体も徐 Þ に強

げとげ 11 日 それでも僕は兄と父の、 Þ には超克し、 しさを脱 し、 辛い思い 堺の あば 汗まみれ では忘れずに学んで肥やしに ら家から、 の努力のお陰だと感謝 また登美丘に戻れた。 Ļ Ļ 今まで 濱野家はと \mathcal{O}

れは愚 青春時代は 今度は大美野四区に家を新築し、 か で あることは、 かなりハイソサエティ 上京し てみて \sim 僕は念願 \mathcal{O} 判 入り口かと見えたが、 った。 の慶應義塾に合格、 そんなうぬぼ 八 歳 \mathcal{O}

学校教育 俺はただの思 V 慶應 スやプラト \sim 入ろうが東大に行こうが、 エ リート ンが い上が 何 は凡人とかわるところがない。 り 人いるか。 \mathcal{O} 愚か者だと、 一人もいない。ゼロだ。それを見抜か そんな奴らは五万といる。 自分に言い聞かせた。 そのなかに、 ア その程度 リス ねば トテ \mathcal{O}

この学生とバス停前に突っ立ったときだった。 前はまだバス停が るたびに、 \mathcal{O} 沙湯。 ス タン 自分が講義する4 宿院 フ 思う。 オ \mathcal{O} ード大学 辺りにあ 浪漫主義はア ひろびろ。 か 0歳代もまた思 9 らの交換留学生を受けた大美野時代 た駿河屋さんはどう 僕の世界観がアメリカ メリカ \mathcal{O} 19世紀口 11 、出す。 空襲でまる焼け、 したろう。 7 へ大きく転換 ン主義に影響され 晶子 に堺東 \mathcal{O} した 歌 水 びた 接す \mathcal{O} \mathcal{O} 駅

ジ エ ムズ ディ ンという若い俳優の出た 『エデン の東』 Þ 『理由な

に建つ映画館で何度も観た。 き反抗』 は今見てもよく出来た話だが、 僕の青春の蹉跌を映していた。 これも電気館という、 高 野線 沿 1

ジ マだが、 前者は第 エ ームズ 僕は自分の父へ ディー 次大戦 ンの切ない気持ちばかりに共鳴していた。 \tilde{O} カリフォ の思 いが通じない、 ルニアの 人情と聖書にあるモラル すねた若者の気持ちを演じる が テ

リカ ザ IJ \mathcal{O} 講義でも言及したが、 力をも 作品は戦時下の 国内 は描きこんでい っと知りたいと、 の論乱ぶりを忠実に描き出して、僅か 人心や初期モ る。 この作品は第一次世界大戦当時の多民族国家ア 後年、 研究対象をアメリカに絞った。 僕は青学の英文学科に頼まれて映像文学で ータリゼーシ 日 の無駄もない。 ンや冷凍産業もエ そんなアメ IJ 力

志は 0 ね に大きな幸せを求め、 心は つねに小さな幸せを求

昧だ 味 ヴァ この のある作家の私的生活にふれた思いだった。 った話をされた 格言も言い -さんに会っているわけだけれども、 得て妙である。 のには、 軽い 驚きと共に、 その意味でアメリカ文学を志とし 彼の方から少年の頃は映画三 ほ っと安堵するほど、 てチ 人情

をして 通 堺東 ったのではない V) \mathcal{O} た、 映画館は、 そのはけ口だったが、 か 僕には自分の家が父の チ ヴ ア 仕事の失楽でやる瀬 さんも似た思い で映画館に \mathcal{O} な 11 思 11

なり、 像化 った。 映画館は自 \mathcal{O} 当時観た山 人生一五、六にして、 『浮雲』 分と家庭環境との などが、 本有三の 父子関係、 『波』 後年のわが人生を垣間見た感であっ 狭間を満たし とか、 混迷世相、 林芙美子の原作で成瀬己喜男 7 流浪 < れる心 人生を解するよすがと \mathcal{O} 安らぎの が 場だ

初芝駅に。 高野線に乗ってゆ ここには初商があり、 るゆる北野田方面に進むと、 兄はここの中学部から堺商に進んだ。 想 1 出に半ば沈澱 0 つ、

扇風機、 思いがする。 生涯を送り、 つた鍋、 0 て来てくれて、 初芝駅に着くとまた兄を思い出し、 頭 \mathcal{O} 1 どう あれ、 1 兄で、 凡庸な自分が大学にやらせてもらえた。 したかな? どこへ行ったのかな。 丈六の家の、 どんな大学でも簡単に行けたのに、 失われたものと一緒に想い出まで持ち去られた 暗い 台所ですき焼きをや ここで売っていた百メ百円 あのとき回していた黒い すまない、 父の っった、 仕事を手伝 あ 兄ちゃ **4**枚羽 の肉を買 のとき使 0 W 7

える。 れるが こら辺りを舞台にしている。 跡を辿ろうにも、 ころには、 中は在郷軍 直線にな 萩原天神駅を過ぎると、 今は登美丘東小学校。 野田小学校のときは生垣が破れだらけで、 0 隊伍を組んで行進する教練もやった。 たら北野 人さんたちが匍匐前進もやってい まるでない。 7田駅。 電車は大きく右に 1 ここは今、 やその前に右手に 短編 「羽ばたきの縮図」、 フ エ たし、 ン 力 野 田 スの ーヴし 今この学校からそんな足 [小学校 破れ目から入ると怒ら われわれも朝鮮戦争の 出入り自由。 て田ん 「点睛 \mathcal{O} 木造校舎が見 ぼ の壺」 \mathcal{O} 中を走る。 でも戦時 はこ

は転げ回る遊びはできない。 λ ぱくたちがあば コ 建物 れ って、 回るには、 火災には Þ 5 っぱり ょ 11 11 木製で、 と具合が 1 \mathcal{O} であろうが、 わ しなる床でなけ る \ \ \ ドタン 固 VI 木張 バ れば タン り \mathcal{O}

散る桜 のこる桜も散る桜

昭和二〇年、 知覧から飛び立っ た特攻機 の隊員も見送る隊員もいちよう

学校に当時 この世との決別に桜の散るに似た感慨を抱いたわけだが、 の桜、 あるんやろか。 植えた朝顔。 あれは? 1 ま、 東小

に、

味わった。 ないけれども、こんな、生きるか死ぬるか 通過していくという、これほど破天荒な心象風景はまず滅多に再現され得 「ふるさと寒く 戦中戦後は百人一首が盛んで、 それは日本人として誇り得る体験でもあった。 衣うつなり」などが、 「降りゆくものは 響くなか、 の生活でも万葉や古今和の歌を B29大編隊が頭上を わが身なりけ Ŋ B

野田駅で電車を降りるべく立ち上がる。 今や住人ではなく車中人となった俺は母校に注いだ目線を前に戻し、 北

野球と兄と幸ちゃんと

だが。 集散。 たが、僕もまた心象風景をきちんと維持している。この肉体が朽ちるまで、 その情景を下北写真館が捉えて、雪の北野田駅の夜景色を見事に写してい うちの暮らしがどんなだったかを書かねば、 駅に降り立った光景を書くべきだが、問わず語りに、まずは7 中学生のころ作品から覚えた言葉だが、これが北野田駅にもあった。 (笑) 駅前情念は復活しまい。 0年まえ、 離合

栄光などまるで無関係の家族だし…い いまは亡き、丈六に いた頃のうちの家族のこと、まずは語らせ いのかな、 僕独特 の価値観で。 て頂く

そう。僕以外、皆あの世に行った者たちだけれども、戦後間もなくのころ、 丈六の、 登美丘東小学校の北隣りに住 . W でいた濱野家の家族を日向に出

遺してい 国防色のぼろ服を着た群像の る。 それを隠さず語ることから、 なかで、 父、 母、 河内に広げよう。 兄は、 多くの 語りを筆者に

思えば、兄はさみしがりやだった。

なると、 違い る夕方まで野田小学校 野球が好きで、 の母と朝な夕な、 登美丘ホ 顔を突き合わせるのが (今の登美丘東小学校) ークス の名ファ ス いややった トやと自慢しとったが、 の校庭で野球をし、 んのやろ、 夕方に 父が 腹

「成生、 お父ちゃ ん 迎えに行こ…」 と自転車を引き出す。

僕とは六つ離れて昭和十年生まれだった。

れて、 野田工場や天理教や西岡 僕は彼 郵便局 の漕 の前、 ぐ自転車 桜並木沿い の荷台に乗って、 の米屋 に駅に向かうのだった。 は λ の前 を、 凸凹道を東小学校の前をとおり、 瀬野荒物店まで行き、 左に折

る。 $\mathcal{O}_{\mathbf{k}}$ あ ホ 良しだった。 って、 西岡は 東小 1 ムランをか ちば ソフトボー のpTA会長もしておられて、 W ん打ちにくい球をすくい上げでか は 大人しい性格だったが、 1 2 つもお米をきちんと精米して布袋に入れて配達 飛ばしてくれた。 ルをしていて負け気味になると、幸ちゃ バットを長めに持ち、 僕とはちがって腕 その息子さんの幸雄君は僕とは 0 飛ばす。 の力が三倍ぐら イン λ が出てきて コ して ・ス低め くれ 仲

その 頼も 7) 姿。 お父上はどれほど期待をか け ておら れ たこと

情熱をもって僕に対してくれた君よ、 事故で亡く でも、 幸ちゃ な 0 た。 んは高校生になって家の仕事でバ 僕は書か ねばならな その優しさを僕も学ばねば。 幸ちや イクに乗ってい ん 有難う。 静か 交通

やさしさは? この米屋さんは今現在も存在する。 僕 の心で長く生きている君をここに遺そう。 けれど、 幸ちや んが僕にしてくれた

兄の自転車は何度もこの米屋さんの前を僕を荷台に乗せて往来した。

僕もだ。

かうと僕らは十歳を過ぎたばかりになっている…。 父母と一緒に歩 いた道を、 今は逆転 して過去の時間 帯に 戻し 駅 \sim 向

北野田駅構内で、 なんとこんな光景が

動、 左右に揺れ 中学生 息 づ か \mathcal{O} 兄がぐ V. る のと同じだ 尻が左右に動くのを。 7) ぐい漕ぐ頼もし 1 それは桜が満開 体に、 ひ弱な僕は の枝を風に しが み 0 . 煽られ 1 て、 鼓

関係が た。 緒に寝られてよかった。 でいたか気付かなかったが、 頭で父が下りてくる た次か? 1 らだちに近い孤独感を毎日肌で感じた。 駅に着いても、 終戦当時、 け 0 そうやって何回と電車をやり過ごす。 てうまく回ってないことだけは、 兄は十歳で、 お父ちゃんの姿はなかなか見えない。 のを待っていた。 兄はどれほど淋しい思いでい 今ならよくわかる。 コメやイモの買い出してごった返し 僕は当時、 幼心にわ それが 弟の僕はお母ちゃん 兄がどんなに淋 た 次 かっ か。 1 \mathcal{O} つものことだ 電車 僕は僕で家族 て 1 て、 か? ていた駅 1 兄の 思 ま 0

真そのもの。 終戦間 もな 激烈さは毎日のように展開されていた。 いころだっ た。 北野 田駅とて、 戦後の混 乱 期の 光景は報道写

警官が絶えず担ぎ屋の背負う竹籠 の中身を出せとわめ **(**) ていた。

の摘発のためである。

「ヤミ米やないんです」

「ほたら、何や?」

「馬糞です」

「あほぬかせ! コメやろ!」

「馬糞や!」

「ほな開けてみい!」

おっちゃんは目の前で荷を下ろし、 ほんまにぶちまけまっせ…」

「かめへん、やってみい…」

どっどどどおう…中身は正真正銘 \mathcal{O} 馬糞やっ た!

本物の馬糞が駅構内に散らばり、 くっさい くっさい

おっちゃん、ようやりはった!

まわりでパチパチ! 拍手まで起こった。

その隙に、担ぎ屋のおっちゃん、おばちゃんが荷物下ろさず、逃げよる、

逃げちょる…みんなゲラゲラ大笑い。警官まで、 やられたとかなんとか、

もう、笑いだしとる。

靴磨きの少年、傷痍軍人の乞食姿。 かっぱらいや強盗もあちこち。 そん

な中で、 北野田駅前 の混乱ぶりも例外ではなかったのだ。

こともやっ 進駐軍の指導でDDTの粉を乗客にうむを言わせず頭か ていた。長い髪の女性たちはシラミだらけ。身体じゅう南京虫。 らぶ 0 カン け

むろん男たちも兵隊服姿のままで、

ノミやシラミだらけ。

界じゅ たちが 僕ら日本の軍国少年たちや勤皇少女隊たちも、 を牧草に散布 もみえる白 ると言っ それを僕らも頭からさんざ散布された。 D ?食べ T は。 うに薬害の恐ろしさを知らしめた、その最たる毒薬が た て健康被害にあり、 1 のはアメリカの 粉を浴びたわけである。 したお 人畜無害, かげで、 とい ユダヤ系作家バ 乳牛の体内からミルクへ。 うふれこみ。 レ イチ エル 無害なも ーナ • カー ユダヤ人は歴史の雪に晒され まさに歴史の ・ソンが F. \mathcal{O} マラ か、 それをア 『沈黙の 後年、 マ 雪 ツ D \mathcal{O} ド D だっ 象徴かと T だ 春 メリ この たが 毒素 った で世 カ人

父帰る

遊して ごとくひたば 思うと、 たと思う。 匹オオカミで通した私の父など、デラシネの要素は限りなく内在させて デラシネの父との相克で兄弟が苦しむ話を書いたが、男なんて、 週間ほど、 から責任感で家に戻っては来るもの そんな心境を推量して、 菊池寛は長年家を離れていた父がふらりと戻って来た、 父が80歳で没した時、 11 た、 幼い 帰郷し 家族を投げ出して放浪したのが菊池寛の主人公で、 何でも思 しった。 日 Þ から軍需で羽振り良く、 て食事や下 1 通り 死に水をとったのは僕だけだったが、その前 僕は後年、 になる時代を経て…意識の流れは垂水 の世話をしながら、 0 中編を書い ほ 商務省長官当時の岸信介氏と豪 んとうは帰りたくな おやじの た。『父の宿』 人生を そんな放蕩型 家族がある 1 である。 のでは… つく \mathcal{O} 水 づ \mathcal{O}

「お母ち Þ んとは別 に、 女の 人が いたはった話、 してや」

落ちた。 で拭 下の世話をしながら、 V ながら言ったら、痩せ衰えた父の生気の 萎えきった父の男根のあたりをウエ ない 皮膚の上に僕 ツ トテ 1 \mathcal{O} 涙が シ ユ

「お母ちゃんと言う人は、あのとおりでな…」

「そんな話、 聞きとない、 お父さんが囲うては った別 の女の ひとの話、 聞

かせてえな…」と、僕。

父の髭面がにやりと動いたが、 僕に は何もい わな 1

たせい 話題作となり、 た父の隠し宿に、 月刊誌 か、 『知識』 編集部に行くと、 伊豆の宿は賑わったが、 自分が妻がある身で愛する女と逢引をする話で、 に初出、 連載となった 実話かどうか、 その **「**父 だれ 臨場感が への宿り もが問 は、 あ 今わ ごい質す。 んまり迫真であ の際に、 これは 聞 1

父のことは、どこの息子も、 後ろ姿しか、 観てな 7)

死ぬ間際まで、 いや死んでからでさえ、 父の実像は知 5 な

また、 出てくるのを待つのである。 向田邦子さんともそんな話をしたが、北野田駅に迎えに出てい 父の実像など知る由もなく、 ただただ父が好きで好きで、 改札 た僕らも

「あ、お父ちゃんや!」

今日は僕が先に見つけた。

タイ姿だから、 スをする。 父が 駅 の改札に現れる。 別に 退いただけなのだと思うが、僕らは飛んで行って父に抱き 父の顔が知れ ソフト帽に背広姿で出てくる。 てい るからでなく、 こんな時代に背広にネク 警官は フリーパ

着いた。兄も自分も父が大好きだった。

三人で夕日の尻田池の土手を歩く。 桜、 満開や。 きれえやなあ」

この尻田 池だが、 今は、 もう、 ない。 小魚を釣っていた濁り水もどこへ

流し去ったか、 全部埋め立てられてスーパーが建っ ている。

荒物屋 織田作之助が住んでいた。 ぐひだりに4軒長屋があり寺田はんの家と呼んでいたが、 郵便局の角、あ、 \mathcal{O} 瀬野さんの角を曲が いや、この郵便局のしゃれた洋館も取り壊されたから、 ってと言ったほうが 1 い。そこを曲がるとす その隣に作家の

入 の米屋を過ぎ、 僕ら、 って、 丈六の家に帰りつくのだった。 兄と父と三人でその池と織田作さん 小西医院を過ぎ東小学校を過ぎて左に、 の家の前をとお 小川沿い ij 西岡 \mathcal{O} 小道に は W

僕らは、 何事もない、 こうして歩く、 何も起こらない行程だが、 縁(えにし)にあると。 僕らは考える、 口に出さねど、

家に来て もし兄の実母が姑さんに追い出されなかったら、 へなんだ。 僕のお母ちゃんは濱野

まれて、 の前で、 えに行っ そや、 乳首が黒くなっ もし、 ててなし子やったし、 て へん し : お母ちゃ てい んが姑はんに虐められて里帰 、るのに、 こうして兄ちゃんと毎日、 気づかなかったなら、 りし、 お父ちゃんを迎 僕は奈良で生 風呂 のあと鏡

成生は ったんや。 兄は考えてただろう、 いなか ったし、 あ のお母ちゃんとやりにくい毎日を送らんでもよか もし お母ちゃん、 里へ帰えされはれ へなんだら、

に曲が と考えると、 が非在だったわけだけれども、その想念がきちんとこの道筋に遺って 塀甥に歩いて、 を兄弟、 メルを買って、これも平等に配って、 そんな人生が、 0 平等に与え、 ても考え、 ゆかしさがこみ上げる。 野田工場を過ぎて歩く。 北野田駅からまっすぐ、瀬野金物店まで歩い その間、 郵便局の隣にあった駄菓子屋で三論がミルクキャラ お父ちゃんはオーバーのポケッ 西岡の米屋藩の前から、 なんてこともなく、 1 人生その 小西医院 から南京豆 て続き、 いる 右 $\tilde{\mathcal{O}}$ \mathcal{O}

第五章 アメリカン・ マイ

戦後は、丈六にもニューヨークにも

の日本人女性と一緒のこともあった。 てならない。 丈六の自宅でのダンスパーティ 進駐軍の連中がカップルで踊りに来ていた。 は終戦当時 \mathcal{O} 歴史の縮図 中には訳アリ のような気が

とも見える。 まったく相似していた。それは僕の人生で紡がれた奇異な出来事の連なり 話は飛ぶようだが、後年、 時空を跳ぶだけで繋が アメリカ作家の想い出を短編にした一 っているの っである。 情景と

当時は から頼まれて、 僕が後年、 ツ橋や早稲田で教えていたのだが、 小説を文芸誌にあれこれ書き出していた頃、 ニュ 日 ーク市の北、 マンハッタン島から鉄道で20分ほ 中央公論社の月刊文芸誌『海』 大学、 つま

ど北上したところにあるオシニングという郊外の町に住むジョ アさんと座談会をした時のことである。 ン ヴ

駅に着くと彼が車で迎えに来てくれた。 車に乗り込むな

「ここは典型的な郊外ですね」と言ったら、 チーヴァさんは

けれども、 「なるほど。 「…というより、 元はオランダ人の住んでいた地域で、 当時ニューヨ カントリーです」と言われた。「今は大都会の住宅街です クはニュ アムステルダムでしたからね」 私の家も当時 \mathcal{O} も の

と、僕。

程度は った。 けれども、 付けていたのをイギリス系が買い取って、 ニュ T メ ヨークは元オランダ領で、名前も首都アム これからチー 、リカ史として大学で講義し -ヴァさんとの語りは忘れ難い、 していた、 新ヨーク市としたわけで、 教科書的 ステルダ 味わ な知識 ムをその 1 深 に すぎな いものだ この まま

はない。 などか を持 端康成の に大好評で、 の家でも、 案内されたお宅は平屋建ての 0 文学は中産階級の生活を描くということでは、 なぐ 7 日 で鳴らしたバ 書である。 居間に通されて、 ** \ 噂が広まるだけで、家族も屋敷も失うという筋書きにぴったり る。 り棄てて、 サバ そ ービア \mathcal{O} 文壇ではまったく表面化しなか --- 生涯を色々失敗だらけとなり、 つが . |-(郊外族)の生態は、 壁に掛かっている色紙を見せられた。 映画になって、 ランカスター。 住宅で古民家的な柱が目立 郊外族の 彼が持ち味の拳固 なかなかに切な 初老 『ニュ ったけれども、 郊外で \mathcal{O} り男を演 ・ヨーカ \mathcal{O} つような家で プ \mathcal{O} いべ なんと川 チーヴ メージ ル ・ソス \mathcal{O} 誌

の役目で結んでいる。

弾され、 わす、 たとき、 六での戦後の進駐軍をたくさん招いてのパーティと同じ状況 にされた。 うに、その女性は丸坊主にされ、 ことにな わしなが 一つない ブ チ ル という話である。 ヴ の上にダル ちょうど中国軍がその種の女性を漢奸と呼んで公開懲罰 , c ナチス支配下、 った。 メイドにな アさんは庭で飲もうと言い その 少年時代の映画館の話や、 女性が、 なんと、 7 って、 (サントリーオ 大戦中、 彼らの要求されるままに受けた女性が なんとアメリカの郊外族のパーティの席上、 黙々と仕事をして 丸裸で街路に放り出されて皆の見せ 主人公がポーランドをナチス 出し、 ルド)が置い 郊外族のパ 芝生に出てみると、 V) る。 目 ーテ てあり、 の前で、 イの話 それ それに 解放後に糾 か の話を聞 \mathcal{O} ガーデンテ 中で、 ら解放 にしたよ を酌み交 化粧 しめ 丈

性 戦争に巻き込まれて身を売っ ンになる姿であり、 \mathcal{O} 欧州大戦でも日中戦争でも、 晩年の姿である。 その果てが、 て生き長らえる。 太平洋戦争でも、 チーヴァさんの短編に出てくる哀れな女 その最中が進駐軍 普通 の生活をする女性が \mathcal{O} パ

くる。 な顔 だ。 が、 なかに、 僕は日本女子大の英文学科のゼミでこの作品を取り上げたことが 今に この作品はそのまま、 つ そんな日もあった。 見せず受入れたし、 何人かが、 して思えば、 気の毒な女性だったわけで、 父の 丈六の家でのパーティにも生き写しだったわ 招いたア そんな女性たちがパ メリカ将校と一緒に来て踊 母はそんな女性たちを厭 テ イがなくても訪ね 9 て あ た る

ように、 猪子先生、 ンマー)から引き揚げて来られて後に登美丘高校の英語の先生になられた パーティの最中、 そのダンスパーティの光景を昨日のことのように覚えている。 兵隊から戻られた浄教寺の息子さんもおられた。 小学生の僕は蓄音機係だったが、 ピ ル 7 後にまた書く (現在 の三ヤ

大美湯と野田君のおばあちゃん

線路沿い から一本西にあたる道を北 へ難波方面に五分ほどあるくと、

「大美湯」という風呂屋があった。

売っとる店があったんやけれど…」と、 駅から歩いて二、三分の距離である。 聞いてみてください。 「そこの風呂屋のわきに焼き芋を

ちは、この焼き芋屋の味をよく知っている。 んが割烹服で旨そうなのを選んでくれる。 もはや知る人なし、 かもしれないけれど、 黒メガネを掛けたおばあちゃ 僕ら、 戦前生まれ の坊主頭た

れ 砂場でせんせが、 ていた。 お孫さんとの二人暮らしやった。その子は喧嘩大将でみんなから怖が そんな強い子と僕は東小学校の砂場で相撲をとったことがある。 誰か対戦相手、おらんかっ

うことで、 と叫ぶが、 濱野! 皆おじけついて退くばかり。 お前、 やれ そしたら先生が学級委員やとい

11 僕は負けても後味、 1 ひょろながくて気の弱い筆者。そんな奴、 \mathcal{O} 真面目に四つに組んで、 悪うない。 僕の心をちゃんと見抜いて、 ゆっくりと上手投げ。 野田君は突き飛ば 見事やった 丁寧にやっ したっても

 $\overset{\circ}{57}$

てくれたのが嬉しかった。

胃腸の た竜巻だった。 かと自分でも思っていた。そんな僕と野田君との勝負は不意に巻き起こっ 僕の 調子がたえず変調 存在は相撲に強い存在でもなければ、 していて、 このままでは二十歳前後であ 兄のような野球少年でもない。 \mathcal{O} 世行

以来、野田君とは心が通じ合った。

た。 ちょっと緊張気味で何もいわない。けれど彼の気持ちは伝わった。 がるんや、 に小声でいうと、 に…僕は悪いことしているみたいな気がして、 風呂屋 とびきり美味しそうなのを選んでくれる。 へ行ったら帰りに野田君とこで焼き芋を買うのが楽しみにな 大事にしたらなあかんがな。 かすかに首を横に振る野田君。 申し訳ないといわんばか 父がそばにい こんない い子をなんで怖 て、 野田君は おおき り 0

僕は何度も心の中でさけんだ。

俊ちゃんのボーフラ浮沈説

が λ 1 た。 すたる 午後三時に大美湯が開くと、 後ろ姿の 「海道一の親分は 厭な渡世の 粋なこと…嫁と呼ばれ 三河音頭に 本刀 早速は 男度胸の…」 いって、 てまだ三月 打ち太鼓 浪花節を語るおっちゃ ちょいと太田 惚れてくれるな の仁吉ど んが

毎日聞かされると覚えてしまう。

中村俊ちゃんも入って来た。

この子はなかな か の秀才でおまけにクラス 一の真面目さ。

浮いたり沈んだりや」 みやで。商売人はとくにそうや。お前んとこのお父ちゃんかて、ボ から、それも気に入っていたが、 ように気が合って、 僕みたいに気の多い人間とは、とうてい一緒にはできない存在だが、 いまでも親しい。 あるとき、「人生なんてボーフラの浮き沈 俊ちゃんは辛らつなことを時 ・ーフラ。 Þ う 4

ふつう、 怒るよね、 自分の父親をボ ーフラ扱 いされたら。

ところが、僕は妙に感心した。

「なるほどな、俊ちゃん、ええこと言よる」

お父ちゃんには悪いけれど、 朝鮮戦争前後に会社を再開 した父親 の浮沈

で大いに振り回された僕は、 俊ちゃ んに感心した。

歴史は酷似して再現する

歴史は繰り返す。

どんな状況下で株の大暴落になるかを予測して、その直前に全面売りに出 大から講義を頼まれ、 て大被害を回避し、 での大恐慌の時代にあてはめて株の乱高下のグラフを重ね合わせて、 11 僕はこの種 投資家のジ つが面白いと尋ねてきた男がいて、 の話をして大学の講義の場に花を添えていたが、 ヨージ・ソ 独り勝ちし ネット商売の成功談に 口 スは日本のバブル期を1930年代のアメ て何兆円という資産を逃がさずに済んだ。 この仕事をやりたいというから、 ついての本を購読 偶然、 したら、 いつ、 ゙リカ

バー F -大学へ の留学を勧めてやったら行っ てす 0 カュ り学ん で帰 0 て来

た学生がいる。彼が三木谷だった。

僕は同じ情報を持っていてもやる気もない

視る習慣が身につい てしまったからではない かと思う。

おそらく、

幼少時の心

の形成期に、

そんな立志伝中の偉人をはすか

しょせん、実業家には向いてない。

実業家だった父とは中学時代、 よく京都や奈良に文学散歩に出かけた。

気の毒に、 この父は歴史家か茂吉のような文学者になるべきだったのに

隊から出世して満州全土はもとより日中戦争まで手を出して…そんな身 時代がわるい、環境が悪い。 気が付いたら軍需産業か。 関東軍が満鉄守備

 \mathcal{O} 程知らずの 一夕会と同じく崩壊の道をたどったのだと思う。

僕はだから、 父の背中を診て、 同じ道を選ばなか いった。

これも郷土でしみじみ思ったことである。

失墜は の乱高下に似て不倫による失墜の時機が予測できる。 だが状況が相似してくると、 こい つが読めな い凡庸族は確実に沈没するしスキャンダル 次にどんな破局が待ち構えてい 財務官僚や県知事 る か、 t 株価 \mathcal{O}

マンシ

日

ック同様に痛手となる。

末を、 ない \mathcal{O} である。 僕から言わせると、 が、 もう、 まさにそんな人生の紆余曲折を学ばせてもらったおうな気がする 郷土で、 21世紀に中央で起こってい 父母 の下で、 その迷妄ぶ り を言っ る様 7 Þ な挫折事件 は 父母 に \mathcal{O} 顛

戦争とて性懲りもなく再発する。

州 からである。 これもやは ぼくがなぜ、 南京、 武漢三鎮、 り状況が戦前、 今、 警鐘作家としてしきりに新聞紙上で警告を発するか。 重慶渡洋爆撃、 つまり満州事変から上海事変へと飛び火し、 真珠湾へと続く因果関係と酷似する

作家として、 活と重ね合わせて観ていると、 僕らが生まれた前後から、 毎日のように警告記事を新聞に書くこととなったのだ。 大空襲のころまでの経緯を郷土での これはまずい ぞと予測が つく。 だ 日 から警鐘 Z \mathcal{O} 生

今の人は戦争を知らなさすぎる。

世界中がそんな世代であふれている。

だから危険で防ぎようがない。

母レキシ 11 T 自衛隊幹部もそうだろう。 メ リカ の軍当局に戦艦大和ってご存知かと訊 空母ヨークタウンって? 知っているのは戦艦大和ぐらいだ。 と聴いてごらん。 1 てみて まず知らな 11 R,

会議という代物であるから、 こんな不勉強が政治家や軍関係者を再び戦争にと駆り立てるのが、 口を噤んではおれない。 首脳

ぼくがアメリカ学で講義するのも郷土体験から

には、 皆さん 日米関係もこのところ、 認識 頼もしいお兄さんがか弱い弟を庇って、 の中で安保条約を本気で読 ルもマッカーサー時代より退化したとみなければならない。。 変わりに変わ んだかたは少ないと思うが、 った感があるが、 自分が石礫の飛び来るなか 現象面 だけ この条約

果たしてアメリカさんは応じるかな? 頼りにもならないことがよく解る。 に至る。 本人は血だらけになっ をものともせず、 1 7 な \ \ \ うそでしょ そんな頼もしい兄貴分がアメリカだ、 突進して ! て死線をさ迷う段階に初めて自分らの無知 と思う人は、 1 って日本を助けてやるよ、 だからそれなりの大改訂は必要だが 読んでごらん。 なんて思い 日米安保条約が何 とは、 込ん どこに でい を嘆く た 日 \mathcal{O}

分ら家族をどう守るかを考えて置きなさいと助言したい となると、 諸君はせめて、 空襲状態になったら、 郷土をどう守

が制圧 だよ。 備隊を蹴散らして朝鮮半島全体を掌握した。 前回、 残すは南端 したことになるまでに至ったのである。 昭和25年に朝鮮戦争が勃発したとき、 の釜山だけ。 ここを征服すれば朝鮮半島はす うそでしょ? 北朝鮮軍はア か ベ メ VI ノリカ て北朝鮮 ? 軍守 本当

と、次に攻め入るのは日本だけ。

で軍艦 はたった十歳で兵隊もどきだった。 軍事色に変貌、 このとき日本中が 7 ーチをかけ、 校庭では隊伍を組んで行進する訓練を毎日やった。 ハチ か つての帝国陸海軍の精神主義を僕らにわか の巣をつつ 1 たように右往左往、 小 中学校が急に 初年兵 蓄音機

御尻に火が点い て初めてわかる。 人間 って、 その程度な

人為的 進化 の過程は ウ イ ンの進化論に似 て遅々たる スピー F

ち出 想のもとに、 メ した。 力 8 十九世紀は経済界全体が産業化の 時間 労働界と大統領が一丸となって経済活動の進化を推進させ、 労働や週休制 の採用が財界を富ませる、 なかで人為的進化を次 という逆説的発 打

メーバー人生、 とかくにこの世は住みにくい

人間って、 やっぱり急速に進化するんだ、 要は自覚の問題だ。

正解! そのとおり。

か、 とかくにこの世は住みにくいと、 堕落することに気づき、 明治期、 知に働けば角が立つ、情に竿差せば流される、 夏目漱石は英文学の学習から人間がエゴ 人間とつは、 書き記す。 ほとほと困り果てた動物だと思った イズムだらけになって 理屈をいえば窮屈だ、

とは、 出し抜きを描く名手で、こういう輩とは絶対一緒に飲みたくないが、 が、僕はちょっとちがう。 そんな存在も一部にある。 シェイクスピアは騙しや裏切り だが、 違うぞ。 や疑 人間

と、反論している。

空ひとまたぎの戦火が見えてくる。 アメーバーから人間誕生まで、五億年もかけてプ ロセスをたどると、

と同じペーハーの羊水の中でふらふらじゃぶじゃぶ。 う間に過ぎたら、 なわけだが、男子の精子は形からして五億年前の海中動物であるアメ そっつ それを今、 ワニみたいに泳ぎ出し、 くりで、 女性の胎内でたったの十か月で作っている。 受精するとある時期、 タコみたいな頭でつかちの軟体動物になり、 母体の壁を蹴っ飛ばし始めるとパパママ 胎児はタツ ノオトシゴになる。 その過程もあ 粗製乱造 骨格が 0 つま 海中 (笑)

る。 にもら ぴょんと直立して、 身して産院 \mathcal{O} り先代のオス、 に、 しばらく 人間 もう数か月と、 った の意識の進化はそれからなのだが、 りして、 のべ は芋虫をやり、 メスはえらくよろこんで、 ッドで、こんにちわ、 十か月経ったら、 ホモサピエ 産休をもらったり、 這い ンスに。 は 1 してカメレオンになったと思ったら、 あかちゃん、 ぽ~んと、 先々代の雄雌 この水中動物が陸上に これがやたら時間を食らう。 水中から陸生生物 わたしがマ からお祝 マよ、 跳 いを早め び \sim 出す

W の手慰みで次から次 人間は イタズラ遊びの大好きな神の被造物で、 \sim と創られたわけである。 あなたも私も創造 \mathcal{O} 神さ

僕は郷里にいるころから、 こんな諦観 の中にあ 9

死ぬときゃ一緒に死のうじゃねえか

に夥し る。 年ば が、 家のどこでも展開されて を殺す近親愛など、 て存続するが、 旧 紀元前に書かれたギリシャ悲劇 この 約聖書 か ŋ く登場する 古 1 いわけだが、この頃すでに誕生後の の創世記 ラは今を去る六千年前に書かれて アイスキ \mathcal{O} 千六百年後の は、 \mathcal{O} 内容はそっ 権勢力で戦争する醜 \ \ る反目離散劇とちつ ユ ロス、 シ の作品 ソフ エ ŋ イクスピアの題材と同じで、 ユダヤ教 オクレ の多くはこんにちも文化遺産と 1 いる。 姿や母を愛するが ス、 とも変わりがな 人間の迷妄ぶりを嘆い の経典トー エウリペデス 古事記より ラ \mathcal{O} 丸写しだ あま の作品群 四千五百 現在国 7 り

生物には世代変わりがつきもの。 繁殖期がすぎると、 どんなに足掻 7

 ϕ 景だが、 さほどの進歩がないことを証明しているようなものである。 立ての霊柩車に皆が手を合わせるのは東西変わりなく見られる厳粛な光 確実に死 その後に展開される遺産相続をめぐる壮絶な喧嘩口論も、 の世界からお迎えタクシーを回してくれ、 立派な ハイ T 人間に 一仕

言おうと、 居まします。 超然たる存在は万物の創造主である神だけで、 ヘミングウエイが戦争を前面に断言しようと、 神だけはニーチ 変わることなく エ が 何と

W 体を鏡に晒して思ったのは、 込まれる。 な思 創られた人間の 1 だけだった。 僕が北野田の大美湯で、 方は金持ちも貧乏人も差別なく平等に死 郷里がこの命題の出発点だった。 いつ死ぬか、それまでに何ができるの 胃腸病で苦しむ48キ 口 \mathcal{O} \mathcal{O} 世界に送 ガ IJ ガ か、 リの そ n

浪花節だった。 のうじゃねえか」とか、 風呂屋のラヂオでは、「生まれたときは別々でも、 創造の神にはそんな人情はな 「馬鹿は死ななきや治らねえ…」と語る廣澤虎蔵 死ぬときや、 緒に 死

坊主頭の僕は中一。 あばら骨と左右とんがった肩の骨。

半を叩きつけ、長ドス片手にたすき掛け、 お母ちゃ で手傷を負って、フラフラになって帰宅する生活を選ぶのか。 人生、 荒神山です。 λ に親不孝ばっ 僕も、 かりして、 吉良の仁吉にあやかって、 ろくに孝行もでけんと… 荒神山 に行くか、 好い ま た女房に三行 お父ちゃん、 いにち会社

登美中 の国語 の先生がこんな万葉の歌を教えてくれた。

世の中に さらぬ別れも なくもがな

千代もと祈る ひとの子のため

縋 ったわけやな。 そんなん、 つ どんな好きな親でも、 て泣く業平を蹴飛ばして、 \ \ やや、 確かに当時の自分は考えていた。 薄情やんか、 死に別れる。 最愛の保護者を天高く連れ去るのである。 神さんは、 千年も万年も生きてくりゃれと取り と、 業平はダダをこねたは

だろうかと思いながら、 お借りして、 輪廻転生の理に逆らわず、 赤子として誕生する前日に、 墓参に足を向ける。 また河内の里のどこかで、 僕の骨は高松の墓に送られるの どなたか の胎 内を

ださった。それは恐れ多くも、今、葉山 業平の短歌には、 登美中で邂逅した硬骨の文人西野先生は般若心経を見事に仕上げてく こんなのもある。 の拙宅にある。我が家の宝である。

つひに行く 道とはかねて聞きしかど

きのふけふとは 思はざりしか

死はどこの家にもやってくる。

小学生や中学生だったころ、 参観日に来てくれたお母さんたちで、 いま

ご健在のかたは誰もいない。

だから、 タイム スリップし、 空間を再現せねば。

登美中の西野先生は国語の先生で…

鍛錬 ていた。 僕らは戦時中に 辺倒 \mathcal{O} 先生が怖 少年期を経た西野先生の苦難を知りもせず、 か 0 たから、 そのぶん、 反発したり混ぜつ返したり ただ厳 しい、

後年、 彼は僕に言われた、 あの時代、 生徒もみんな必死やっ たな。 吉岡

君はいい子だった、濱野、どう思う?

ても、 先生に習っ \mathcal{O} Y君とするのが穏当かもしれないけれども、 が仲間だ。 吉岡君は時代もわるい、 車で迎えにきてくれ この世で薄幸だった吉岡君のことを胸に宿らせておられた。 たことを、 君ともこの世での他生の縁だった。 僕は有難 て、 家族にも恵まれずの 真っ先に仰 いと思う。 0 しやっ ٤, それなら却って気の毒。 先生は、 西野先生は登美中を去られ 小柄な少年だった。 た \mathcal{O} は、 この 言葉だっ そんな 苗字は 僕ら

「君が在学中、君の教室に行くのが怖かった」

え!

を拝見するに、几帳面なご性格がにじみ出た書で、こんな立派なご最後を、 先生は般若心経を見事に描かれ、それを掛け軸に表装されたよし。 に富田林彼方のお宅に行かせて頂いたとき、 で告白せねばならな 頂戴した僕に、 したりしたらしい 人生を見事に送られた先生に、 僕は 仰天 した。 果たしてその資格があるのか懸念の至りだが、 後で、 から、 V) 齢七十にして、身に覚えがあろうと叱られた思い つまり西野先生が亡くなられ 僕は生前、 さんざ生意気なことを言っ 奥様からお聞きしたことに て友人たちとご焼香 文字の運び それを たり

ればビ \mathcal{O} 分厚 言わ れれ ンタが飛ぶ ば、 \mathcal{O} ひらを飛ばすことはな 確 のが平気な時代に、 か に僕は 7) けな い子だった。 か 西野先生はただの った。 だ \mathcal{O} に、 当時、 度も僕 わ の頬にあ るさをす

奥様は先生がまだ中学時代、 戦争も末期で男も女も学業どころか、 学徒

ほど、 り、 動員で工場に駆り出されていた、 たまに自宅に戻って来たら、 窶れ 切 っておられたとか。 その難儀な旋盤回しに毎日くたくたにな 親が自分の顔を見て、 君は誰だと聞

思うと、 んやない 生を困らせていたのだ。「教室に行く時、 そんな苛烈な人生を過ごされたことも知らず、 涙がこぼれた。 か ٤, 思って登美中の、 あの ター 濱野はまた、 ル臭い廊下を歩いては 不良少年の僕は教室で先 \sim んな、質問しよる ったと

何を言うたのか?

それも告白せねば、申し訳ない。

見に行ったときも、 中間試験中だったか、 先生方を困らせた。 登美丘劇場 ^ 観たらいかんと言われ それも告白せねば。 てた映画を

郷里とは、 精神風土でもある。 豊饒な沃野なはずが、 屈折感でねじ れ 7

いるようだ。

ユ 日」 クも登美丘劇場も同じやがな

りちゃ める空間だった。入江たか子と坂東好太郎の猫化け映画にアラカンとひば 映画の黄金期だった。 λ \mathcal{O} 鞍馬天狗、 三益愛子の三度泣ける母もの。 昭和二十五年頃から三十年代中頃まで最高に楽し

若尾文子の『十代の性典』もここで観た。

はスクリー 中間試験 ン の午後やった。 の間近に座って観ていたら後ろで聞きなれた声。 ヒ マやから見に行っ た。 3本立ての 先生方も大 1 本 僕

僕は首根っこをひっ捕まえられた。 テスト期間中に映画は怒られるのかな、 勢来ておられ、 僕はその一人と目が合っ た。 と直感し、 首を引っ込めた。 隠れた積りだったが、 な んとなく

西野先生だった。

「みんな勉強しなあかんときに、 お前は何をしとる」 と怒られた。

「せやかて…」と、 僕。 「せんせらかて、 来たはる…」

「濱野がそんな…そんな不良みたいなこと、 したらあか んね

わきからも一人のせんせが言わはった。

「ほな、誰やったらええんですか?」

ッドに腰かけてる、 んなもん、 ップからはじまる性 性典映画というジャンルがこの作品をきっ 僕は知る由もない。 そのポスターだけで来ただけやった。 の解放が世代的に降りてきた現象だったわけだが、 ただ主人公の女子高生がセーラー かけに生まれ、 戦後のストリ -服姿でべ

館で たわけだが、 の文芸作品を原作に わる度に見に行ってたし、 この頃の僕は映画マニアで、 出になる。 『第十七捕虜収容所』、 当時はとにかく悪いことをして、 したものまで見て、これは後年の職業選択の糧にな 登美丘劇場は大のお馴染みで、 『波止場』、 堺の東宝、電気館、 『地上より永遠に』 せんせに叱られた、 宿院劇場などなど、 隣にできた洋画 など、 アメ そんな ・リカ 0

北野田 7 ケ ツ わきの本屋さんで僕の文学が

れた。 に、 いた。 さて、 綿の打ち直しを業とする工場があり、 ほこりっぽ けれども、 地図に戻って、 今は綿捌きの気配はない。 い空気が格子からあふれる。 「大美湯」とは三つほど軒を隔てて駅に近 終日ことこと物憂い音をたてて 当たり前だ、 建物も取り壊さ いところ

が 鄙 浦安で暮らすべ 留めたのと同じである。 \mathcal{O} 日々 綿繰り工場はけっして快い環境ではなかったけれど、そこに暮らす人 びて窶れ果てた浦安の漁師町を、 \mathcal{O} 営みは確実に耳でとらえることができた。それは山本周五郎さん か舟の息づか 人にはそれぞれ生き方があって、 いに似た暮らしが確かにあった。 青べか物語で描いて、 この河内には 僕らの記憶に

泡の 場のぼるの W があ 息づ 「のらくろ」。 か った。 いといえば、大美湯から北に50メートルほどの右側に貸本屋さ 「ポスト君」、 サザ エさんの本は、ここで次々と借り出し、 返しに行って、 横山隆一 *(*) 裏口から入って驚いた。 「ふくちゃん」、「デンスケ」、 全巻読、 んだ。 田川水

カント、 この本屋さんは哲学書を読んでおられ、 キル ケゴ | ル : 山積みの図書だった。デカルト、

裏木戸から入って、僕は立ちすくんだ。

哲学っ て…ちょ っと開いて読みだしたら、 おも しろ

意味、重さを教えている。気持ちが楽になる…と、 金箔の背文字の、ずっ しりと重い哲学書の中身は意外にも生きることの ガタガタ障子が ひらき、

「ぼん、面白いか?」と、しゃがれ声。

まり笑って、 あ、 立ち読みで怒られる! 「ほしいか?」 という。 と 目を見たら、 僕、 盗むと思うてはったんか? 髭 \mathcal{O} お つちや λ に W

おっち Þ んは首を横に振って、 「ほしかったら、 もつ て

つを手に取 こんな何千円もしそうな…そんなんくれるはず、 り、 「か め へん、 かめへ ん。 こんなん売れ ない…と、 \sim ん。 置くとそい

じ屋でも見かけたな、 と坊主頭 の僕の手に握らせたのだった。 と言う。 おっちゃんは、 ぼんとは、 もみ

「もみじ屋」は、北野田で唯一も書店だった。

文学》、 誌 そこは 平凡」 『新日本文学』、『三田文学』が並べてあった。 「北野田 とか 『明星』 7 ーケットの東っぺらのぬ が 積んであり、 わきに かるみ路地に面し 『サンデー毎日』、 7 7 『早稲

この出会いがなければ、 僕は文学志向にはならなかっただろう。

伝統の文芸誌で、『早稲田文学』は早稲田出身の文人が多く、『新日本文学』 さんら、 と呼んでいたから、 はその名のとおり、 『三田文学』 文学好きの兄も口にしていた文人たちが名をつらねてい は永井荷風や谷崎潤一郎 敗戦後に立ち直ったわが国を人々はしきりと「新日本」 開い てみると、 野間宏さん、 \mathcal{O} 肝 1 りで慶應義塾から発刊された 中野重治さん、 佐多稲子

額だからそっと置い ふけった覚えがある。 11 ずれも当時 <u>一</u> て帰り、 8 0 円ぐらいだったか、 母親にねだって一冊ずつ買って帰って、 小遣い ではとうてい買えな 読み

の筋向 Ł ていたの Oなぜこんな真面目すぎて儲か と決ま 1 に出店したのだろう。 か、 0 思えば不思議だが、 て ** \ た から、 北野田商店街か 宮本衣料品店が超満員で、 りそうにない文芸誌が たぶん、 本屋の店主は本好きが経営する ら分け入 った北野 平積 同級生の宮本君 分で並 田 7

應義塾 が える結果とな んとこの 1 た \mathcal{O} の文学部をこころざしたのも、 「もみじ屋」 よく行 いった。 というのも、 つたが、 さんあっ 筋向 てのことだった。 僕が大学進学になっ 11 \mathcal{O} 遡れば 「もみじ屋」 あ の哲学書をくれた貸本屋さ さんが、 て、 迷うことなく慶 僕 \mathcal{O} 人生を変

なった 北野田 のだから、 での 『三田文学』との出会いが後に上京してまで慶應に \sim ンの力はたい したも のだ。 1

を発表 を読め、 に見せたら、 きる光明を見出す話で、このエゴに満ちた作品をアメリカ文学の大橋教授 そんな主人公が伊勢湾台風でぼろぼろになった家から女性を救い 慶應に入学して数か月、 した。 という。 恥ずかし こんな身勝手な男を書くな。 いが、僕には能力もない、 僕は、 学生だけ 書く前に \mathcal{O} 『慶應文芸』 身体は虚弱、 ^ ンリー に短編 性悪 ジ も暗い エ 出 「釈褐」 ム 生 ズ

親不孝の始まりだったが。 ら三田に だ生きて ら大橋先生には隠れ 田文学』 それまで書くな。 1 の編集部から電話をもらい、 か ょ て浅草の って講義し とさえ言われた。 て、 ス トリ 文人独特の自堕落な生活を始め て いた若き頃の、 ツ プ 小屋の でも、 編集の手伝いをさせてくれ 楽屋に入り浸り、 ディ 教授には言わなか V ツタン 岡場所 トぶりを悦ぶなど ていた。 \mathcal{O} 0 たが た。 玉 荷風はま ノ 井 だか

たし、 で、 ブ 文春や中公から声がか 談義を繰り返すうちに意気投合して、この学会の編集委員として事務 か 『新日本文学』 \mathcal{O} 名作 『真空地帯』 を毎月刊行 か を書か るころ、 してい れた野間宏さんと遭 僕は る編集部が東中野に 『三田· 文学』 には評論を い 何 度となくスト あ 0 て、 書 11 そこ 7 VI

所に足を運ぶことにもなった。

これも、皆、郷里が原点だったのだ。

北野田は浦安と同じに、 人の 心の涵養に尽くしてくれた のだ。

今の 人に、浦安ってどこや知ってる? と訊いたら、なんでそんなこと、

乗っ 訊くん 訊 1 たら、 、や ? 7) たほうが、 誰しも頷 といぶか しがられる。 < 心の風土は保たれる。 あんな人口地帯に行くより、 でも、 「ディズニーランド、 浦安時代にべか舟に 行 った?」と

開発とどこやら似ている。 町に代わ 同じ場所に代わ って ノイ つて、 エ ル • ミシシ シ ユタイン城があ ツピ • リバ ŋ 御姫様が ボ 7 があるけ るのは、 れど、 北野田再 漁師

劇映画とぼくら子供たち

な思い 池。 ちの手で消滅せしめた数々の家並み、 戦災で紅蓮の炎に巻かれて消滅した船場島之内。 先祖をうやまう日本人でも、 大店に暮らす上方文化が絶えた、 はほ かにない。 だが平和な時代に、 古にしえ を壊して平然たる態度とは この戦災という暴力。 数々の田んぼ、 心なき自分たちが進んで自分た 道修町。 畝、 あぜ道。 ことほど慚愧 新町に阿弥陀 何。

扮装の 美丘 も水墨画 仁徳さん 劇場と ひばりちゃんを抱っこ、疾風のごとく駆けて拍手喝采をもらってい \mathcal{O} な \mathcal{O} かにあ う映画館では嵐寛鞍馬天狗が白馬にうち跨り 凌ささぎ から飛来した数百羽という白鷺で野田村丈六も南 った。 この田んぼ地帯の隅 っこに遠慮がちに出来た登 角兵衛獅子 野 O田

ても、白鷺は悠然と水墨画の主役だった。

絹代と高田幸吉が主演の同名の映画が大阪の伝統的街並みを留め 『春琴抄』を読むと戦前の道修町が再現する。 昭和8年につくられた田中

 \mathcal{O} 人々の心をとらえなければ、 アマーストに住んで後世の人達に発信した詩人のように、この作が後世 古人は、 生き永らえられるはず。

第六章 登美丘に在ること

ふたたび、登美丘ってどこ?

どえらくも誇らしいことが起こった。

登美高のJKたちがNHK大ホールの舞台狭しと踊り回ったのである。

これは北見の町を一躍有名にした平昌五輪のカー娘に似ている。

ナンバーワンの登美高娘である。

けと友人たちに言うと、「登美丘ってどこ?」と聞かれる。 僕は東京の近郊、 葉山に住んで、 登美丘が いかに素晴らしい か、 見に行

を中点として、文字通り輪になって「登美丘音頭」を踊るに相応 園地区と大美野をコアとする住宅街とが合併したときの町名であり、 名に遺している程度。 なきほどに仲のよろしかった人口数万人のコミュニティであった。 なるほど。 登美丘という町名は一時期だけのもので、今は小中高の学校 でも僕らの感覚だと、 北野田、丈六、 南野 田など田

庄 あった。つまり中世以来の要所でなと、説明しているがら、皆は納得する。 小学校の校歌 ぶある。 となるから、 出だしは の結びとして、 これなら判る。 「金剛かつらぎ 「登美おうか、 野田は由緒ある地名。 遠く見て V イが あし 歴史ゆかしい野田 ここは野田城も 小学校」、 とあ

てい 彼方に二上山。 野田国民学校は北野田駅から北に歩くと、 た。 そこから東は その左は生駒山系。 田んぼば かり。 右には金剛 高野線が二両連結でごとごと走る。 田んぼの中に木造校舎を見せ 山系。

窓には新聞紙を貼って寒風を凌いでの授業だった。 戦中戦後、 野田小学校はガラスが壊れても直す予算もない。 冬など破れ

上級生の卒業の時期になると、「蛍の光」をみなが歌う。

というから、 「仰げば尊し」 夏は蛍 \mathcal{O} 明かり、 この は先生をうやまい、 一節には奮い立つ思いだった。 冬は雪明りで勉強するのが当たり前だと歌は教え 将来は都に出て身を立て名を上げ 国を動かす人間にならね のよ

ば、 という思いが極寒の教室にみなぎってい る感じだった。

間に登美丘 この 野田 町が出来た。 の庄が大草村と合併して町が出来るそうだの声で、 村か ら町 \sim 賑やかでええがな。 あ 0

喜びは僕ら少年少女の間にもあった。

され、 だったから、 生が担任になると小躍りして喜んだものだ。 もやれば、 名付け親は野田小学校の教頭木村亀次先生で、この 僕らは何の疑いもなくそれをやっていた。 か 整列 け つこも一番。 気を付け 水彩画もとびきり上手で生徒も父兄も木村先 番号 小学校は の教育は新制小学校でも続行 人物は軍隊調の教育 つい先日まで練兵場

願わくば軍隊上がりの先生方の教育を熱望していた気風があって、 て思うと、 反発もあ 俺たちは古い時代の ったかもしれない。が、敗戦後二年目に入学した僕らも両親も、 人間やったとつくづく思う。 今にし

ところが登美丘町になってからか、 徐々にこの気風は消えてい 0 た。

お互い笑顔で握手しろとどやしつけ、 野田小学校ではよく取っ組み合いの喧嘩があり、木村先生が駆けつけて、 わんぱく児童は握手。

仲良しになるか?

うん。はいと言え! はい。はい。

けんかした相手は麗しいほど仲良しになった。

そんな野田村と、 大美野という邸宅街を抱える大草村とが合併して、 登

美丘が出来た。 気風 の違いは相当なもので、そりが合うかっ

心配ない。 戦後、 日米関係がすこぶる和気あいあい。 両村の仲も、 すこ

ぶる麗しく、 それから数十年、 堺市に合併された今も続 いている。

ある。 登美丘町の名は中学と高校に残った。それは両村の仲良しの証しなので

幼児期、 丈六の田んぼで機銃掃射を受ける

時系列で書いても記憶の混乱は順序立たない。

けれども、だからこそ、過去が見える。

六年の三月。 僕の場合、 その年の十二月に真珠湾攻撃があった。戦勝気分で沸き立つ 野田村丈六つまり現在 の堺市東区丈六に生まれたの が 阳和十

湿な ころはまだ赤子で何も知らず、 コトと葬列が高松 戦を幼心に感じ出した頃には祖母が臥せりがち。 の墓地に向かってしばらくし 這い這いをしてお母ちゃんと祖母さま て、 空襲に逃げ 昭和十九年にカ 惑う日 々 \mathcal{O} 陰 \mathcal{O} タ

到来となった。

ども、 1 ら出撃するポン 放題だった。 B 2 9 この異常な終末期の光景は作品 頼み \mathcal{O} の ゼ 援護に来た米軍の戦闘機の性能は大したことはな ロ戦がもう南方戦線に出払い、 コ ツとなった特攻機だったから、 「河内1945」 残るは九州の知覧あたりか 大阪空襲はB29 という短編に書い 1 \mathcal{O} だけ 0

 \mathcal{O} 帰投する のように、 田んぼでのことだった。 グラマンは持ってきた機銃弾を使う相手もないままに、 \mathcal{O} 機銃掃射 では格好が の的にする。 0 か な 1 ので、 そのターゲットにされたのも、 地上を歩 1 てい る人をもてあそぶ そっ くり残し この 野田 7

そのときの恐ろしさは今も頭にこび ŋ 0 7) 7 1 る。

真夜中、 ぎゃああ…と叫 んでがばっと目が覚め

を上げると機影は遥か彼方。 のなかに伏せるとぷちょぷちょぷ著…と、 またグラマ ン の機銃弾が天空から降り注ぎ、 弾丸が泥 幼い僕は の中に突き刺さり、 あぜ道を掛け 泥 顔

へたくそ! へたくそ!」

\ \ 「だん 叫ぶが舞い戻っ あのまま帰りよる。 な 1 てくれとるね て来たら今度こそ頭から尻の穴まで弾が突き抜け もう、 んと、 あかんな…」 兄。 わ いら殺 したかて、 しやあな

「なにがあかんねん、兄ちゃん?」

「うん?」

「もう、日本、負けるんか?」

兄は黙っとる。父も一緒やった。

機銃掃射を受けた田んぼに、 いま、 家が建ち並ぶ。

なども入れて、 軍国少年で頑張る兄を中心に、姑と母、母と父が祇園で産ませた義理の子 絶対に勝たれ が翌朝になったら死んでる、 の小坊んちゃんがゼ 短編 書いたわけやねん。 丈六で起こってまんね 「河内1945」は、こんなまだ幼児期の主人公で蚊帳に放した蛍 へんと思いながらも近所の手前、 複雑な家庭が敗戦直前の河内で展開する話である。 ロ戦の隊員になっ そんなことに涙を流す少年と、 ん。 実話やけど、 て…読んでください、 言いなりになっている母と、 みんな消えてしもうたさか そんな日々 戦争なんか、 浄教寺

大美野と旧丈六

僕は大美野幼稚園児だった。

1 わゆる二年保育組で、 戦争中、 大池の傍を通って大美野の噴水 の脇に

ある幼稚園に通ったのである。

館も必ずあって、そんな佇まいはうちの家のある旧丈六とは異質な雰囲気 で石垣を造り、 大美野は別天地だった。 その上に生垣がぎっ 邸宅街であった。 しり植わ どこの家も大きな小豆島 っている。 冠木門が り、 \mathcal{O} 石

を醸し出していた。豪華な邸宅群が大美野。

僕の家の ある旧丈六にはこんな雰囲気はまるでなか

くれる。 植え前 お念仏を一緒に。 者だった。 お茶を出して接待する。 村民は のどぶさらえの話。 肥えをもらった返礼である。 みな農業で、うちだけが大阪市内に軍需関係の会社をもつ変わ 電話は浄教寺とうちの家だけ。 終わってお茶となり、 仏壇には浄教寺さんが毎月お参りに来てくれる。 となりの畑の次郎兵衛さんが白菜をもって来て こっちこそ汲み取りありがとう。 故人の話、 電話室には丈六の客人が来る。 丈六の盆踊り の話、 田

気には独特の良さがあった。 田舎の香水と称した糞尿の匂いはいつもだったけれども、 旧丈六の雰囲

だった。 り、 に赤い き散らし ながら凸凹道を走る、それを避けてカブ号がけたたまし まだ自動車の普及する前のこと。 たまさか丈六に来ると、 エ ンジンを付けて走り出すとうちの会社でも営業には て東小学校前の凸凹道を走る。 馬力の馬が号砲を放つがごとく糞尿をたらし 本田の それが当時ふつうに見かける風景 原付自転車カブ号が 11 エ ンジ カブ号とな 白 ン音をま 11 タン ク

立つようになった。 せるかと懸念されたとき、 毎日だったが、 は連合軍が負けに負け、この調子だと北朝鮮が釜山から日本にまで攻め寄 もう昭和二十年代も後半。 大美野には 皮肉にも軍需景気でどんぞこ景気の キャデラッ 僕らは軍事教練のため、 クやリー ちょっとは景気も上向きで、 ンカ ンなど、 日本経済は急速に上向 隊伍を作っ T メ IJ 朝鮮戦争で最初 力 \mathcal{O} 高級車が 7 行進 \mathcal{O}

道路舗装は相変わらずで、 凸凹や水溜まりだらけの道を走る高級

に冷静になっ 音開きのドアの 父の 会社 も景気が良くなり、 てい 0 る僚友の中村君は 1 て車を購入したが、 トヨペットクラウン 同じく商売で父親の景気 ・デラックスという観 \mathcal{O} 11 \mathcal{O}

ボーフラや」 「ボ ーフラやで、 はまちゃん、 ボーフラの浮き沈み、 はまちゃんとこか 7

感心してしまい、 言い得て妙である。 二人の間ではこの話、 僕はこの嫌味を真面目腐 今も時 0 々出てくる。 てい う俊ち B W \mathcal{O} 慧眼に

戦争のカオスと不似合いな環境の不条理

丈六の生活は激烈な防空壕体験で自我にめざめるところから開始する。

カブ号の前である。

ある。 5 しい ようやく と感づいたとき、自分の個人史の最初のペ に して自分はとんでもない 、状況下 に 1 やおうなく生を受けた ジを体感していたので

感がないかと自問すると、 たが、今にして思えば、場違いな思いがしないでもない。 大学で上京し、 である。 その後、 では現在、 この不条理感は父母と自分という関係性に 小中学校は生まれ故郷で過ごしたから、 日 日 郷里に帰ってもその場違いな思いは去りそうになかった。 の生活の 場所としている三浦半島の葉山の地には場違い あると答えるほかない。 馴染みの深 0 ****\ ても言えることで、 必然性がないの 1 地とな 0

何もかも置き忘れ から人は、 葉山 ところが過ごした人生はどうなるのだ。 \mathcal{O} 風景は丈六 1 つ \mathcal{O} 日にか帰らむと、 て帰って来た旅人ではない の風景以上に自分の心に照らして疎 定年退職後郷里に戻ってくる まるで旅館にスーツケー か。 外感が つよ のであろ \ <u>`</u> ス だ

関係性が認められな 実存には合理性が欠落 めるけれども、 フランスの作家で哲学者のサルトルは実存主義を唱えたが、 ったアルベ その ルル 7 ・カミュも実存主義者である。 つ一つをとってみると、 のである。 あるにはあるが、 それには因果律が 不条理で原因と結果に何 どちらも 「存在」 他方、 存在 を認 そ 5 \mathcal{O}

ある。 うようの異次元であると、 売店のないことを非在とみて、 こんなんとちゃうわ 着きがある。 くに非在化 の持ち方次第。 う大都会でさんざ体験 僕が葉山の地で落ち着いて暮らしているのはその不条理性を東京と そして自分に向か その心理状態は北野田 平然と異世界を形成しているのは、どこへ行こうとみなど 風物 V) の変貌ぶりに抗 した結果、 と心の奥底で否定して、 って言い聞かす、どこに住むとて、 自らに言い聞かすしかない 打ち 0 \mathcal{O} 0 9 かぬ疎外感に捉われるのと正反対 駅前に降り立ったとき、 てみたとて、 の悟りに至ったせ 昔馴染みの改札 諸行無常 1 か、 平穏安楽は心 存在はとっ 北野田駅 奇妙な落 \mathcal{O} 囲 で B は 11

が、 1 か 来るのである。 に重みを帯びて、 詩 とりとめもない、 \mathcal{O} 中 原 中也は十六歳のときに聴 死 そんな の床にある自分の想念にまで飛来してとり 一幅の情景がじ いた汽笛 つは家の権利証などより、 の湯気や今 1 ずこと想う へつき、 遥

人は帰郷する。 自分も幾たびとなく帰郷する旅人であ

る馬子も同じ そのつど、 旅人を愛馬の背に乗せ、馬の轡をとらえて人生い 何かを感受して帰路につく。 人生を送るに似て異なる時間世界へと通う旅人なのである。 つも同じ道を行き来す

との 里 術評論家と、 親に連れられて西野のお寺に行ったときの想い出が籠められている。 一の村落 文芸誌 心 \mathcal{O} ふれあい の西野という松林のふもとを住処としている、 『文学界』に掲載となった自分の初期の短編 その家に通いで家の雑用をしに来てくれるうら若い乙女蕗子 の話だけれども、 そこには筆者がまだ少年だったころ、 「点睛の壺」 妻に先立たれた美 は、

象あるものは、いつかは壊れる。

に遭っ かも、 る。 新たな存在を認識すると、 妻がある日 < 古陶 それに耐えて生きることの辛さ。 ろくに面倒も見てやらなかったのに、自分の心にぽっかり空洞をつ \mathcal{O} たりで無残な形相を作ってしまうなら、 今はどこにも存在しない。 織部をもら 7) 0 しょに金剛登山したときに足を滑らして亡くなっ っても仕様がない、 それが忽然と視界から消えるか、 これと同じに寂寞たる想い いっそ妻にも出会わな 1 ずれ壊れるも 1 っそ、 出会わな のに愛着をも 割 7 れ 出だけが残 のが いほうが たり事故 何も つと、

ふるさとも、思えば辛い光景なのである。

11

女の気持ち だから寺 の住職が織部をくれるのだから、 緒に貰うこともできな い男。 貰ってくれとせが む、 その 少

その寺は現存するかもしれないが、 西野の 山は もう壊れ果て、 完全に住

枝を刈 宅地に変容し り立たな り取 いころの話で、 ったことがある。 てい . る。 小学生のころに父とこの そんな想い出も壊れてしまった。 まだ正月の飾りなど、まったく商品として成 山に来て門松にな りそうな

ある辺りか 今にして思えば、 その美術評論家の住む辺りというのは、 登美丘高校 \mathcal{O}

にな うのである。 語の場所かどこかというので、 当時 ってしまったが、 『文学界』 の編集長は湯川豊さんで、 なぜかぼくの 西野の話をしたら、 「点睛の壺」 この がやけに気に入って、 人は後年東海大学 なんと見に行ったとい の教 物 授

 \mathcal{O} つぱ頭が市松人形 蕗子という少女は僕の創作上の メ ージの子が のようで。 11 た。 名は言えないが、 少女であるが、 顎のあたりが じつは中学の くびれ 同 7 1 級生にそ て お カン

という。 は書か 切っ ん :。 さい姿を変えてくさまを描き切っ 表を掻き破 れた象嵌の りとなる。 ところが作品での蕗子は何もかも壊れる。どうせ壊れ去るの て先生と私との な 作品はテ だが、 1 龍 9 から読んで頂きたいが、この乙女は自分を壺の表面 少女は焦 ても飛び出して天に昇っ のような存在となり、壺の面をだいなしにしても その思いにも主人公の評論家は耽溺できず、 レ ビにもなり、 れる。 関係も行き過ぎた仲になっ 焦れ 現実界では厳然として存在 て焦れて、 たかどうか て 1 遂に く龍 は のごとく、 てしまうほう • • · この ある したも 辺 逡巡するば が Ĭ, 7) な に埋め込ま りはここに 3,5 \mathcal{O} 1 1 からと、 は 1 思 \mathcal{O} だ 11

高野線と。 田んぼばかりの丈六ではこんな感情が

それは 郎のような作品を書けという。 んな毎日を書 な賞などどうでも 芥川賞 か \mathcal{O} ん、 審査員を長くなさっ いたが遠藤 あんなもの、 1 V. と僕に何度も言っておられた。 (遠藤周作のこと) 文学じゃない。 自分は労咳を患って生きるか死 ておられた作家の安岡章太郎 はやたら教義など持ち出す。 彼は僕に梶井基次 さん め そ

檬」 ら北 かなかったが、登美丘劇場の裏手というか、 \mathcal{O} 僕はずいぶんと安岡さん に似た想念をぎっしり詰め込んだ感がある。 昭和二十年、 へ抜けた道が田んぼに吸い込まれる、そこら辺りの稲田でカンカン照 終戦 の年の夏を描いた短編 の影響を受けた。 「河内19 高田さん 梶井流の 観念小説とまでは のお住ま 45」が梶井 1 \mathcal{O} 辺 \mathcal{O} りか 11

乗る 野線と登美丘東小学校との間の 堺の市街地や大阪に沢山落とす。そい 時は終戦 のは、 の年。 なんと丈六出身のお寺の息子。 B29の大編隊が河内の空を我が物顔で飛来して爆弾を 田んぼ の上空でのこと。 つが憎らしくて追い 今はもう住宅地と化してい かけたゼ 口 · る高

トゴ ぼばかりという情景は今では望んでも得られない。 ト走る光景も、 への家の 門口を出て小学校を右に東に向か な V) って歩くと辺り一 高野線が二両連結でゴ 田 λ

スキャ 家の真ん前に聳え立つ小学校の木造校舎もな を売りに来て いた。 夏、 鐘を鳴ら してア

北野田駅から近道して、 曲がる辺りにあ った登美丘劇場とい う映画館も

な 0 ** \ カン 5 け 抜ける、 7 ばりちゃ そんな情景は λ の杉作が いずこ。 アラカン \mathcal{O} 天狗の おじちゃ んと白馬に乗

せい で、 喪失感が で、 過去 IJ の遺物か。 ツ これほどまでに強 チに な なにもかも跡 ってよい ではな 1 \mathcal{O} 形もなく消え去っ は 1 記憶光景が カ 現実と乖 7 V) るの 離 は文明発展 しすぎだ カン 5 \mathcal{O}

なき破壊力を呪 そう自分に言 か前登志夫だ 9 0 1 た 7 聞 いた。 か、 カン せても、 \neg 山河慟哭』 文明 という詩集を出して、 \mathcal{O} 破壊力は容赦なき過酷さで 文明の ŧ あ つ容赦 た

は 留めると 代の変貌と共に武蔵野も都市化して、 派な出来とな 家をモデ 内とて、 1 武蔵野を壊 同じ 0 た住宅地になり果てると予言。 着眼による 1 僕 ル うのは、 \mathcal{O} に 書 ったが しまく した実業家が登場する。 VI た 石川達三の長編 何とも心 った鉄道会社だが、 「河内1945」 山村聰がこの 細 1 限りである。 『傷だらけ 溝 非情 だけが もうすぐ武蔵野 映画化され、 口健二が立派な映 大岡昇平の な男を演じきっ 野田村丈六辺り \mathcal{O} 山河 なかな 『武蔵野夫人』 で 0 一画にし てあ 7 は、 か 11 作品 る。 西武 \mathcal{O} 0 泂 7 鉄道 内を書き \mathcal{O} 西武鉄道 として立 1 Ŕ る。 か、 \mathcal{O} 河 لح 時

に 部木造だったが、 建 道路さえ満足に遺され つ古ぼ けた工場 今遺されてい の建物ぐ ていな 5 る校舎は \ \ \ \ 11 が 今は登美丘東小学校とな 湛 VI 一棟もない。 出 \mathcal{O} 記憶どお 敷地に隣接 り で 0 た母校 て南 は 面 全

喜蔵が てくる野田工場であっ この 野田 自 分 \mathcal{O} 工場は実は悲惨な近代史の 生命 \mathcal{O} 灯 て、 の尽きる日まで書 戦前の姿を今に晒しているが、 惨禍であ 1 た 『女工哀史』 って、 知る人ぞ知 にもち その歴史を語る Þ る細井和

は現存 か 者も今はおるまい りだろう。 してい るから、 ちなみに、 Ļ 女工哀史と言われても読みもせず生きてい 街の文化遺産として遺すことを勧め 2020東京五輪 の年でも、 この野田工場の る。 る人 々ば

旧丈六にある私の旧居は田んぼ沿いに在った。

たから、 うに続 車場でそれにむかってあぜ道は無くなり、 添寝をした空間は そこから西日さす田畑がひろがり大池の土手まであぜ道が 1 うちの家の て 1 たが、 バ あぜ道の代わりにバス道路となった。 離れ屋敷は削り取られ、 ス路になってしもうた。 喫茶店が立ってい 隣地の治郎兵衛さん 戦中、 母と乳飲み子 バス道 網 \mathcal{O} \mathcal{O} 路 \mathcal{O} 畑は駐 筆者が が 目 出来 \mathcal{O}

と言っ 式モ 池 景を知る由もない な一日糸を垂らして く沈没した…。 の愛する三羽 の中央まで進んだところで、 さらに幼稚園、 -ターボ その場所 \mathcal{O} 僕が泣くと隣に兄がい アヒ トが曲げてあった方向舵に藻がからみ、 公園、 な いた辺りで、僕がなけなしの ルが遊んだ池の のだが、 喫茶店。 いまは 徐々に入っ カン 辺り。 つて 公園で、 て、 「田池」があった位置である。 成生、 釣り人が て来た水に耐えられず、 無心に遊ぶ子たちがその情 小遣いでこしらえた電池 そんなぐらいで泣くな、 ヘラブナを求 真っ直ぐになって \otimes あえな て日 僕

粋もささくれも時と共に消えて

空間は時間 \mathcal{O} 経過のお陰で、 すっ か り様相を異にする。

済む 人新旧入れ替わり、 旧の人は誰一人残らず、 高松の墓に行ってしま

生まれ。 が流れ った。 みると、 石橋を渡 旧丈六の農家ではどこも鶏を飼っていて、 7 田 池 今は2021年だから、 0 7 1950ねんごろとして、その年に20歳だったら、 て、 の土手には小林さんという家があり、 て婚家の門に潜って入って行くのを僕は視た。 昭和25年ごろだったか、 9 1 歳。 なだ生きておられたら嬉しい。 お嫁さんが文欽高島田で来て 産み立ての卵を母はもらって そこへ行く道の下は 円台から考えて 1930年 小川

上げたから、 うちの 田 んぼも丈六に何枚もあったけれど、 貧乏になったのは地主のほうだった。 戦後はみな小作 のおうちに

きて、

僕に食べさせてくれた。

ず頭をもたげる、 丈六のうちは義理の仲で複雑に冷めていたけれども、 みょうな空気があっ た。 粋のこころは絶え

と気が変わると、 く成り立っていた。 小唄の A ードがその一つ。 田 だから姑にいじめられて涙を流 んぼに降り立つ白鷺を眺めて、 百人一首にむちゅうになるの ている母が Ŕ 当然 のごと \mathcal{O} ょ

シラサギは 小首傾げて 二の足 踏んで

ひとあし ひとあし 深くなるよ

幡の 人には 仁徳帝の陵 て、小学生の僕も田んぼで無心にどぜうを啄む白鷺を視るのである。普段、 田 想像 小節を聞かせてくちずさむ。 んぼを上空から眺めて丈六の田んぼに降り立つ。 ŧ \mathcal{O} 0 松 かな の木に巣を作り子を育てている白鷺が い幽玄の世界であった。 引かれ者の 小唄か。 はるば そんな哀れが その光景は今の住 る百舌鳥 ?漂つ

この端唄、 もちろん恋の唄なのだが、 この文句どおり、 静謐な墨絵 の世

佇まい 界がここら田園には だ ったのが、 毎日見えて、 いまや忽然と消え去っている。 この先、 百年でも五百年でも続きそうな

とい ンフ らに り、 ようがな 戦後、 黒塗り木造校舎で、 う遠隔地だからこそ彷彿と想起するけれども、 IJ 「気をつけ 間もなく僕が入学したころ、 トを描い !」「番号!」と怒鳴っていた、 た作品が 暖房一つなく、 「羽ばたきの縮図」 野田国民学校は野 兵隊帰りの だっ そのころの先生と生徒 たが、 現地に立てば思 先生方が 田村立· この情景は 相変わらず僕 一小学校 11 出 葉山 \mathcal{O} コ な

分か 良くおててをつな ナ ア ツ り良く、 メリカから進駐軍がたくさん来て、 Ŕ ハ ムを分け 明るか いで歩かされた。 て食べ ったので、 て飢え死にもならず、 僕らは軍の放出品として貰った缶詰からピ 彼ら の物腰が 好印象ばかりで、 ものすごく柔和 男女仲 で物

あ 縫室の畳は大勢が寝起きしていたため、 かん、 木造校舎は戦時中、 と言われ ていた。 兵隊さんの訓練場だ ボ 0 口 た ボ から、 口になり、 宿舎に充てられ 子供は 入っ たら た裁

き、 になっ 戦後まもなくは学校に毎晩 買うたる、 て泊まらはる。 遊びにおいで」 電話が \mathcal{O} か ように泥棒が か ってきて、 入ったの 「濱野君か? で、 男の おや 先生は ~ へ 、 おか 宿直

と誰 を囲 なぜなら、 そうや カン んで寝る。職員室でおかきを食べた後だ。真夜中、「せんせ、 が いうと、 0 戦時中、 て呼 び出されて 枕もとのバ 兵隊さんが便所で首吊りしたとか…廊下の巡回も池野 ****\ . く と、 ットを持って、 長嶋君や坂田君、 みんなで便所に 内 山君も 7 お 11 て、 つこ」 先生

だけを頼りに進む。 先生を囲んで男子生徒らが十人ほど、 コ の字型に建った長い、 真っ暗な木造校舎の中を懐中電灯 バ ツ トを持 ったりして、 先生と \mathcal{O} 明か Ŋ 9

そんな体験は木造校舎があってこそ想起されるにふさわ

正真正銘の學校の怪談である。

という月刊誌に載せたことがある。 な壊れ物に愛着をおぼえるなどしてい 僕はこの辺りを舞台に、 「羽ばたきの縮図」 前述の ない。 「点睛の壺」 とい う短編を書 と比べると、 11 7 知識 そん

校との 揆 \Diamond のような喧嘩の話なのだが、 てくれた作品で終戦直後の飢え死に寸前の 「羽ばたきの縮図」は文芸評論家の早稲田大学教授の武田 間 の休閑地も今は住宅街である。 この、 田んぼばかり 小学生だった僕らの農民一 の大池と登美丘東小学 勝彦先生が . 誉

ころみな健在で、 で杯を酌み交わす。 あのころ、僕と宿直室で池野喜和先生を囲んで雑魚寝 月に一度は飲み屋に集い、 想い出話を肴に夜の深けるま した友達は今の لح

た えることを強いられる感がある。 置き替えられているから、 現在、 \mathcal{O} は啄木 出と繋がり憎い 野田小学校は登美丘東小学校となり、 か。 そ \mathcal{O} が。 センス、 やはりちゃ 郷里に戻ると、 言い ふるさとは遠きにありて想うも 得て妙であるが、 んと遺る。 想念まで 校舎は コ コ ン コ ンクリっ ク ン IJ ク IJ て、 のとい に置き替 ト校舎に なんか

空襲で堺の町が火の海や

丈六の戦中って、どんなだったか。

僕はそれを 「河内 $\begin{array}{c} 1\\9\\4\\5 \end{array}$ という短編に書いた。 未発表であるが 東図

書館の僕の コ ーナーに収録してくれるそうである。 湯川さんもいない 文

学界』では持ち込む気にもならない。

戦中、 僕らは夜ともなると爆音恐しと電気を消して防空壕へ。 そこはジ

トジト水が湧いてくるような穴倉で、 ムカデやネズミと同居だった。

幼児期はそんなクマの子みたいな生活にも、 すぐ、 慣れる。

泥臭い空気を吸って朝まで寝る。

堺が焼けた。 ある夜のこと。 離れ座敷の窓を開いて、 大人たちが呆然と

遠方を観て いる。 空が明々。 夕焼け か? 「きれ いやな」

「空襲やがな、 何がきれいや。 あの下では何人も焼けてはる」

「空襲って、恐いん?」

父母と共に北の空を見た。

「丈六にも爆弾、落としはるで」

離れ座敷 から見た堺の空襲、 今でもよく覚えている。

幼稚園に上がる直前だった。

昭和20年、5月。

庭の ツツジがピンクの花で満開。 その脇でお父ちゃ んが土を掘り返して

はる。

「何したはるの?」

「防空壕や。家の真下やと丸焼けやもんな」

僕はその意味が解らず、父が備中鍬を振りかざして掘る土を見てい たら、

成生、 ツツジの花、 吸うたら甘いで…と教えてくれた。

なるほど、蜜の味がかすかに。

それを知るのは十数年のちのことだった。 街戦でひめゆり部隊の女子高生が毎日逃げ惑い、 何回か、 そんな日々を過ごしたのだが、この頃、オキナワでは強烈な市 次々死んでいるわけだが、

まっ えられず、 さすっている姿があった。 抱して、その後、ずっと胸が痛いと言って苦しむ母を、すまん、すまんと 日の僕は父が母を激しく打って、母が倒れて起き上がれなくなり、 しばらくして、真夏となり、 ていた。 庭を飛び出し、 終戦の当日、 小川の土手を駆けて逃げ、 天皇の詔勅がラジオに流れた訳だが、 父母の諍いを目のあたりにして耐 田んぼ の中でうずく 父が介 その

そのときの情景を詠んだ歌が、これである。

戦敗れ 父母泣き 稚児の 稲田里

いま他所人の 我勝ちに住む

ちゅう、 ならんで…これは墓碑に刻むことになるやもしれぬ。 この短歌は僕が70歳になって作った。 旧丈六の家並みが目立たず、 むしろ田んぼだった地に家々が建ち 詠んだのは高松の墓に向 かうと

「こんな戦争、 負け るの最初から解っ てたやん か」とお母 ちゃ

言わんでもええのに、 玉音放送の直後に言ったものだから、 父は激怒し

て激しく打ったのだ。

幼児期って、 そんなわけで、 1 7) 想い 出は全くな

は兄が 丈六 孤独 の家は暗雲垂れ込め で義母とそりが合わ て 1 なか たと言ったの 0 たこともある。 は 腹違い \mathcal{O} 兄だ 0 た が、

 \mathcal{O} 家の 奥座敷はだか らい つも寒々 してい た。

た。 に W 灯明にいたずらして遊んでいたらエプ き込んできた。 か なん、 あ った。 終戦 木正成 った茶瓶 枚板 \mathcal{O} 腹をすかして八畳間に寝ていると、 なった」と燃え続ける身体を見せたら、 年の冬は大勢飢え死に の上に蓄音機が置いてあ の掛け軸が の水をぶっ 夏はそ 掛 \mathcal{O} か 隙間 か けて消 0 てい か しはっ ら西日が差 した。 る一間床の った。 たが、 口 ンに火が移り、 さらに仏壇もあって、 し込み、 柱と土壁の間から隙間風が吹 うちも食べるものがろく つづきは踏込床にな 母はび 蓄音機に当 つく 「お母ちゃん、 、り仰天、 0 僕はその 0 1 て そば な 7)

たか、 も縫っ 脂綿で抑えて、 庭に 面 よく覚えていな たこともある。 した縁側でスリ 必死に医者へ 靴下が滑ったのだ。その時の 1 が、 ッププ 僕を小脇に抱え、 と駆けたという。 してガラス戸の ガラスに頭を突っ 血が噴き出す幼子の頭を脱 おふくろはどんなだ 込み、 七針 0

た。 気だった。 母親とは有り難 お父さんはもうやめときと叱ったが、 葡萄 の房を好きなだけ 食べさせてお腹を壊 けちで言うたはると思え ても平

十八歳 だのに別居するのは、 大学では関西 僕は 12 父も母も自分に愛情を注 て上京 の大学は Ļ 父母と別居状態になった。 最大の親不孝だったのだが、 一つも受験せず、 1 で育て 滑 て くれた り止めまで東京 父母と同居して当た \mathcal{O} それに気づかぬエゴが を知 0 の大学にして、 7 1 た り前。 せに、

あった。

し訳ない。 父母と一緒に暮らしてやるべきだった。

この 年齢 になると、 その悔悟の念に何度となく囚われ る。

慶應に現役合格して意気揚々だったけれども、 心の奥底では東京に来て

から自分は親不孝していると責める気持ちが毎日続いた。

性を求めて夢中になって努力していたのに、 どの親不孝はない。 に顔を見せに帰った。 だから罪滅ぼしをするかのように、 今思い出 一緒に住んだのは自分が老境になってか しても、 学生時代は何十回となく郷里 なんでそれをやったか。 自分のことばかりやっていた。 東京で可能 50 これほ \mathcal{O} 大阪

話を終戦前に戻そう。

そんな時間が、

今は悔やまれてならない

僕はこの時期のことを短篇に書いた。

仏壇に入れておいた。

どこかに発表することは考えていない。

東京の人間に見せたくない。

河内の生活がわかるはずがないからだ。

ない う。 位置にある。 てくれた。 戦争が終わる直前 丈六から大美野まで、 国中 今、 が餓死寸前の食糧事情 11 0 階 の真ん中あたりに、 か翌年か、 ょ に住んでくれて、 母は毎日送り迎えしてくれた。 大美野幼稚園に入園した。 のなかで、 葬式用の和服で、 あり うがとう。 おふくろはせ 二年間 食べ物もろくに 僕の っせとよく 目線と同じ いたと思

小学校一年生の担任は桂愛子先生

また時間を跳んで戻って、 僕は野田小学校の一年生。窓ガラスは割れた

まま。早すぎたら誰も来てない木造校舎。

寒くてお尻が痛くて。

でも我慢してきちんと座っていた僕。あほみたいやった。

担任の先生は忘れもしない桂愛子先生と言って、まだ二十四五のうりざ

ね顔の先生だった。とても可愛がってくれたのに、僕は運動会の かけ

でベッタになるのがたまらなく厭で、学校を休んだ。すると桂先生が迎え

威勢の に来てくれたのだ。 いい音楽がしきりと鳴る中で、僕を連れて行くという。「いやや、行 家は小学校の真裏だったから、かけっこのとき鳴らす

きたない!」

ごてる僕に母は怒って、 バン!てピストル鳴る、 その直前に走ったらえ

え、なあ先生、そうやなあー

むちゃくちゃである。

が、愛子先生は体育の先生に耳打ちして先に走らせてくれた。

必死に駆けた。

あ の屈辱 の数秒間は 1 まだに記憶に残っ 7 1

結局、4着だった。

らい走ったやんか。 嬉しか った。 ッタやな V , 3着やったら景品もらえた。 それと同じぐ

えだから、 その後何度も思ったが、今現在、 \mathcal{O} 11 人一倍すごかった。 ひらの温もりを今でも覚えている。 かと思う。 勝手なものである。 もう96歳である。 桂愛子先生が手を引いて学校へ連れて行ってくれた、 後年、 僕は運動神経がからきしない 僕はこの負けん気だけで頑張りぬ もし生きておられても、 ありがとう、またお会いしたい のに、 負け 20歳はとしう 11 たので ん気だけ のて はな は

が赤化 先生が何人か らう傾向が強くなったことを懸念してのパージである。 こんな師 てい 弟愛の話とは別に、 いた。 て、 職場の仲間に革命思想を吹き込み、 占領軍司令官の 戦後、 7 ツ V 力 ツド ーサ ・ パ · 元 帥 が ージに遭っ アメ ソ連から ノリカの て追放された 政策に逆 の復員兵

象にした覚えがある。 僕らは 「あい つは赤や」と、 何も知らないくせにそう言っ て 1 8 対

さで、 また、「言葉カ 標準語をつかえという指導のために、 ード」というのを先生が造った。 生徒全員に配る。 それは花札ぐら 1 \mathcal{O} 大き

大阪弁を つかうと、 「言葉力 ード」を一枚取られた。

現在、 大阪弁は親しみやすいから、 圏外の人でもつか

ために同じ言葉を使って差別感情を少しでも和らげようとする意図があ この変遷は 日本人として方言を無くして全国まとまり、 本国 \mathcal{O} 再建 \mathcal{O}

するには大切な文化となっている。 ったからだが、 もうそんな危惧がな い現在、 地方言葉は各地の良さを強調

小学四年生のころ、家庭環境で悩む

な。 んなの、 取りゲ は子供心に心配した。 これが問題や。 四年生だ 面白くない。 ムに夢中だった。 9 たか、 そんなん、 スター 級友たちはそんなのお構いなしにドッジボ やっても無駄。 ほっといて、 僕もやったけれど、 リンが死 んで、これ 大事なのは日ソ関係がどうなる ドッジボー やっていて白けていた。 からソ連がどうなると、 ルしてる場合やないが ールと宝 僕

っていた。 なんて考える、 僕は今も昔も、 みょうに冷えて世の中を見る、 しにくい子だったのである。 生意気でおませな子にな

軍需で大儲けしていた頃につくった二号はんに三号はんと、うちの Þ んとの それは多分、幼い頃から戦争で心がゆがんでいたし、お父ちゃ "女の戦 (いくさ) // が延々と続いていたからでもある。 んが お母ち

た。 か。 ちゃんにイケズしはって、母が離れ座敷で僕をかき抱いて涙にくれていた おじやをジュウジュウかき混ぜながら、 か、學校から昼ご飯を食べに帰ってきたら、お母ちゃんは火鉢に鍋をか その話だとか、 もううんざり。 な想い出も冷めな 戦争中に亡くならはったお祖母ちゃ 気持ちの上では、 1 のに、 僕が小学校 小学生なのに心だけは大人になって 飽きもせず毎日繰り言を聞かされ の四年ぐらいとときだった んが、どれだけお母

る、そんな自分だった。

思う。 だが実母 \mathcal{O} 11 な い兄の心境を思えば僕 の悩みなど、 はるかに楽だったと

なったから、 せたことがある。 今から 0 7) 廃止するさいに続き柄を証明する書類が必要になったからだ 一か月ほど前、 それは兄名義の電話回線を僕が使っ 偶然、 兄の戸籍謄本が必要になっ ていて、 もう不要に て、 取 り寄

本には父母 その経緯を遂に僕には知らせずに他界した。 を貰って成長した。 兄は横一つまり数字の の名前もあると思い、 生まれて間もなく実母は追い出されたとか。 一だけを書い 内心 期待したが、 て、 「はじめ」 でももしかして、 なか と呼ばせる変な名前 0 た! 兄の戸籍謄 父定雄は

に そんな複雑な家族関係は戦時中、 一も入籍されていた。 定雄と秋野が結婚して、 つまり母は一も成生も同じく秋野だったのである。 秋野を濱野の嫁として正式に たえずしこりになっ てい 入籍した、 その

てい 布団をがば 声をひそめて泣い く時は親が 僕は男の子やけれども、 ると、 僕は 死 つと開き、 んだときだけや!」 孤 ていた。 独に座敷に敷かれた冷たい布団 「成生、 やたら神経質になっていて、 お父ちゃんが入って来て、 お前、 なんで泣いとる、男は泣くな、 の中で独り潜り込ん それに気づき、 父母がまた喧嘩 男が泣 では

そんな男の子だったが、 時代が時代や。 軍国少年でもあっ

太平洋戦争は大負けに負けた、 か つこわ る 11 戦 いだ った。

自分から仕掛けといたアメリカに返り討ちされ、 何もかも焼け

た。 それでたい 7 1 の日本人は日本嫌 1 にな 0 た。

波蹴 け出せず、 と撃ってP38を叩き落すゼロ戦が誇りだった。 ンの背後に たり、 でも、 0 て驀進する戦艦大和が どんな負け方でも、 小学校の運動場で飛ばして遊んだ。。 ゴ つき、 ム動力の戦艦やゼ 7・7ミリ機銃 僕らは帝国陸海軍の菊のご紋章を先頭に、 誇りだったし、 口 戦をい の弾丸を猛回転するペラの < つも作っては庭にある池に浮か 軽 々と宙返りを打 僕はその固定観念から抜 間 か ってグラ らダダダ 白 7

ゼロは空母から何機でも飛び立つ。

それがもはやまぼろしなのに、小学時代は何時でも再来する思いが こび

りついていた。

桂愛子先生。 軍艦 7 チ、 うりざね顔のおなごせんせ 掛け て! ٢, 僕。 掛けたらあ いが振り か 向い λ ね てに ん よ つこり。 ハ 7 لح

体育の時間、 その音盤があるのに、 掛けんと、 「鐘の鳴る丘」 だった。

になって校庭に響き渡ると、 ミド リの丘の赤い屋根…。 僕たちは歩調を取るのだった。 その、哀しい親なし っこの話が軽快なリズ

列になると、「番号!」と次の動作に移る。 せやのに、 四…」と声を掛け、もたついたら「声が小さい!」 ぐらつ 兵隊帰りの木村先生は いたりもたついたりすると、 「整列!」と声をかけ、 間髪を入れず、 ビンタが飛んだ。 と来た。 何秒とか 大声で 「気を で横

戦争で死んだらし それが その 年、 朝鮮戦争の勃発でますます強烈になり、 ア メリカ軍の兵隊さんたちの姿は消えて、 いで。 父母たちは噂した。 軍艦マ ーチが かわ いそうに朝鮮 日 カン 0

ホ あ \mathcal{O} ル 優し もどうしたんやろ。 V. ひょろ高い 背の みんな死んだんか? ブラウン は フェ ン シ ングを教えてくれた。

進駐軍のお兄さんがうちに来ていた

記憶はその数年前に。

電信柱みた いな進駐軍が日本人の女と歩い てる。

うちでは父親が米軍将校をたくさん招いて連日、 ダンスパ ーテ イ に 明け

暮れていた。

接間に移して、 の家の応接室は洋間でソフ 田んぼの中の木造校舎。 ブ がは 1 0 っていた。 ジャズを掛けたのだ。 蓄音機は母屋 これが野田小学校で、 アがあり、 の奥座敷の床の間にあっ 飾 ŋ 棚は大理石で、 その北側に隣接するうち 暖炉 たの に は電気 を、 応 ス

戻して、 1 やちがう、 そい つを掛けるのが僕 応接間にあ ったのを戦時中、 の役目だった。 奥座敷に移し、 また応接間に

テル 僕はカフ た。お母ちゃ 広を何着となく持っていて、 父はジャズ時代 ・グラスをかざして、 エ の女給さんみたいやと、 んはドレ のモダンボ スのときもあったが、 何やら英語で言うと、 チョッキのぽっけに左手を入れ、 イだったから、 いやな気持になった。 縦縞のキモ 腰の パーティが始まるのだっ 辺りを絞っ ノで現れた時には、 右手にカク た小粋な背

塚が大好きだったから、 でも進駐軍は キモ ノ姿が好きで母にダンスを申 進駐軍の手を取って踊り出す。 し込む。 益々いややった。 お母ちゃ

戦争、やっぱり負けたんや。

僕が心底思ったのはこのときだった。

な、臭い身体で言うから、 その 少し前、 南方へ兵隊で送られていた社員さんが復員してきて、 負けたんやろ。 せやけど、実感がなか った。 みん

「お父ちゃん、アメリカとのせんそ、どないなったん? 負けたんて、 ウ

ソやろ。本真か?」

や 今でも覚えている。 「負けたがな、せやから仲良うせんとな…」半分、 ::あ、 これ、 掛けて」 父の目はレコ ードに。「タップダンス、 笑いかけた父 やって見せるん の表情を

殺し合いとちゃうんか?」 ド針を換えながら、「せやかて、 僕は蓄音機係りだったから、 なんで、こんなに仲ええんや? またフォックストロ ットを掛ける。 戦争て、 コ

見はった。 は真顔になり、 「平和になったんや、 「ほんまやな、 握手して仲ようして当たり前や…」 お前の気持ち、 ようわかる…」て、 て言い 僕の目え かけ て父

日本が戦争に負けた。

世間では誰もがそう言っていたが、 僕には実感がなか った。

抱かれて踊 しかし自宅の応接間でダンスパーティをしていると、 る母の着物姿を見ていて、ほんまや、日本、戦争に負けたんや、 背の高い進駐軍に

と、子供心に実感した。

出した この 想い 『現代アメリカ作家群像』 出を後年、 アメリカ文学批評をコ にまとめたとき、 レ クシ 彐 その「まえがき」 ンとし て研究社 に書 カ 5

いた、 ひやか 京女子大教授の今村楯夫君は ただそれだけなのに、 し気味に言った。 東大の大橋健三郎先生がこれに気が付き、 「濱野さんはお金持ちだったんだなあ」 と、

終戦直後の丈六の家の一ページが東京で話題になるとは意外だ にった。

登美丘高校 の初代英語教諭の猪子先生はうちに同居

母屋へ通じるドアが開いた。

る、 になりは きな先生だった。 に参加されたのである。 かえり!」と応える。 ないからと、うちの離れ座敷を貸してあげて、そこに仮住まいしておられ っていた。 「あっ、 その先生がコンサイスの英和辞典を片手に、 只今帰りました!」の掛け声で帰って来られ、こっちも間髪を入れず「お お化粧ひとつされな 猪子先生や!」と、 った。 のちに猪子先生は登美丘高校ができたとき、 当時はまだ引揚者で…毎日、 英語は小学校に2年生から、 そんな日々がやたら明るく、 1 ハキハキと物を言うこの女の先生は、 僕。 ビル マから引き揚げてこられて住むとこ 外出先からお帰りになると、 応接間でのダンスパ このビルマ帰りの先生に習 知的で、 最初の英語の先生 楽 僕の大好 か ーティ った。

猪子先生は新時代のホープだった

うちの家には暗雲垂れ込めていた。

また想い出した、この言葉。

後年、そう言った兄の実の母親が姑さんに虐められ、 追い出されはって、

り 後妻として奈良から濱野家に嫁に来た僕の母も、 0 1 、込んで、 ていたのだ の兄とわざわざし 兄に暗い過去を押 つくりい し付け、 かないように、 その空気がこの家には 兄に母との義理 姑さんに虐め 1 \mathcal{O} 仲 5 つもたゆた の話を刷 腹違

猪子先生は明るい未来を持っ て続行中だ 日本の家制度の にったか 治暗闇は、 5 丈六の家は暗かったし、 戦争が終ろうがアメちゃんが来ようが、 て来てると、 子供なりに直感していた。 知的な気風もなかったが 頑とし

ども、 学者だし、 えた影響は実におおきかった。 小学校時代の隊伍を組んで行進する、 猪子先生や進駐軍がたくさん来た想い出の日々は僕の未来形成に与 猪子先生のような気品のある毎日を送ろうとし 現にいま、 その訓練を、 僕はアメリカ研究を専門とする 毎日受けていたけれ ている。

らだろう。 りてもらうなど、 葉山では、 ヨコ 抵抗感なくやれているのも、 スカに家を持ち、 基地の GIご夫婦に貸家として一 こんな幼児期の生活体験 軒借

状況下に、 せたのだろうと思う。 定まってい ンこと吉田先生ほ やがて中学に入 家庭内の人間関係がからんで、 くのだが、 つて、 か、 戦時体験と戦後の混乱期とが綯 名物先生と次々とお会い 数学の大野先生、 僕をおのずから文学へと傾斜さ 国語 の西野先生、 僕の 1) 交ぜになっ 未来 英語 \mathcal{O} 人生設 て ウ る

空襲!! 防空壕 **~** 電話が掛か ってきて

も う 一 0 の原因は父母の永遠とつづく心の 齟齬とい うか、 葛藤 の連続か

らも来ていると思う。

たとえばこうだ。

ら、 生の幼い 今は誰も知らへん。 の土臭い ると、B29の豚みたいな白い腹にむけて高射砲を撃っとったが、それも、 戦争末期、丈六の田んぼの中に探照灯のにわか陣地ができて、 そこが防空壕になっていた。そこに出たりはい 命など、今の子は想像もできないだろう。 匂 いがないと、 丈六の家には、 熟睡できない赤ちゃん返りをしていた。 台所の沓脱 のイタ床を引っ張り上げた . ったり、 そのうち、 こんな野 夜ともな あ

空襲の 想い出は今でもトラウマだから何度でも話すぞ。

夜中、 ドタドタと母 の足音でああ、 またかと思うと「しんぎょちゃ

空襲や!空襲や!」

る。 た僕は二度目の眠りに就くのだった。 がほぼ毎晩だった。 き起し、 の床をがばっと引っ張り上げて、 母は寝間着姿の幼い僕に覆いかぶさり、 泥臭い だだだ~っと走り出す。 土臭い、 入ったら地べたに座布団を敷いて、 ヘビ来る。 地下壕へ 台所の板 いややムカデもくるで。 背中に両腕を回して、 の石段を四人して降りる。 の間 へ降りると、 その上に寝かされ 想いながら、 父が沓脱の下 グイと抱 ま

そんな日 々が、 あるとき終わ った。 まるで夕立がやんだみた

アメリカと日本、戦争、やんぴしやったんかっ

真昼やった。蝉が鳴いていた。

ラジオがなんや放送している。終わってしばらくしたら、 「負けるの、 最

やん。 初からわか 言わ んでもええのに父と大喧嘩になったがその話はもう書いた。 ってたのに、 お父ちゃん、 なんで悔しがるね んな」と、 お母ち

残してい て電話室に駆け込み、 しゃろ?」と言ったら、どんでもない話を聞いたことは、 だけど、 ない。 空襲のさなか、 「どなたはんです? 電話がかかってきて、 今夜は大阪市内、 お母ちゃんが防空壕を出 まだここに書き 火の海で 0

「濱野はんでっしゃろ?」

「はあ…どちらはんで?」

「そんなんどうでもよろし。 ただ、 言うといてや、 母と息子、 二人とも無

事で逃げたて」

「お名前聞かせておくれやす」

「それだけあ んたの旦那に言うといて。 それでみな分かるさか

ガチャン!

父ちゃんに誰やねん、 電話が切れた。 お母ちゃんは あの女、 かん 息子と一 かんになって防空壕に戻っ 緒に無事に逃げたて…そんな女、 てきて、 お

防空壕の中で痴話喧嘩である。

子供まで…い

ったい

誰やね

 λ

お父ちゃんは戦後、 二号さん、三号さんらと解散式をやったとか。

られて、 に歩いたが、 戦後 この丈六の家は僕が高一 \mathcal{O} 何もかもなくなり、 平和産業やと馬草をすくい上げるフォ フォークはすぐに折れるのでクレ の途中、 家財道具の大半は西岡はんに買ってもらい、 お父ちゃ んが事業に失敗して担保に取 ークを作っ 4 の連続。苦労しはつ て農家に売 り

11 1 ものだけをもって、 堺の みすぼらしい市営住宅に移 った。

息を痩せこけた喉を鳴らしてしてから、 月三十日、 度は盛り返して大美野に立派な家も建てたが、 しとしと梅雨 \mathcal{O} 降り続くお昼頃、 天に召された。 僕に看取られ 結局はこの て苦 住宅で、 しい最期 六

た異母兄弟 母はあれから十数年して亡くなった。 の兄も、 僕には会わずに、 死んだ。 兄も、 後年、 か くも仲良 しにな 0

仁徳さん 途中にあるのだが、 る。空襲の当時にあった治郎兵衛はんの田 濱野家の墓は駅から歩いてこの家の前を通り、 とっ くの の白鷺を受ける佇まいではな むかし、 周りの 人手に渡った 田んぼは全部、 「丈六の家」 11 んぼも、 もの の見事に住宅街になっ てくてく歩い \mathcal{O} 小川も、 周りは田んぼだらけで 大池 て墓参に行く の土手も て

隣接 家四人が堺の大空襲を遠望した、 れ込めた旧宅 の脇に建 「裏の してい 畑 つ白壁土蔵だ。 る と呼んでいた畑はぶった切られて、 から、 の象徴的建物であるが、 めちゃめちゃ雰囲気が吹き飛 僕はここに、 あの離れ座敷もない。 田んぼ 何度か母に閉じ込められた。 の脇ではなく、 幅広い車道になり、 んでい る。 あるといえば、 貸し駐車場と 暗雲垂 濱野 そ

イウエ イが田んぼ の上に直線で走り、 便利、 便利。

笑える。 乱開発が暴力的に、 悲劇を吹き飛ばしたのだ。

文明と経済力は戦争よりも故郷 の様相を変えてしまった

で静止した映画 幼児期 終戦 \mathcal{O} 詔 の原風景は 勅 父母 \mathcal{O} __ コ \mathcal{O} 父母の存在もろとも、総崩れになってしもた、 猛烈なケンカも、 マだった。それが昭和五十年代あたり 家を出て田んぼ 1 の都市計画で た僕 まる

吹き飛んでしまったのである。

渡る 進中!」というJ 1 までも、 「空襲警報! 葉山にいて、 Ŏ 空襲警報 BKの声がよみがえる。 河内の 田んぼを彷彿すれば、 敵B29大編隊、 紀伊半島南方洋上を北 眼前 の稲 田に響き

炎天下、 入道雲を仰ぎ見て耳をすませは、 ウオン、 ウオン、 ウオン…と

爆撃機のエンジン音。

せな という気持ちだけが湧き上がった。 で、自然で、 がらに戦争 戦争は負けで終わった。 僕らは戦争 永遠だった。 か知らない世代。 の申し子で、 戦争が忽然と消え去ったとき、僕には騙された! それは歴然たる事実だが、 戦争が当たり前に日々存在 戦い この空虚感は今も続いてい を糧にして生きる難民の子だった。 僕ら幼児は生ま それが る。 もう消 日課 れ な

いま、盆踊りの季節になると丈六を思い出す。

みいなあさあまに たのうみましょ やれこらせ どっこい せえ

名調子が青竹を叩く音と耳に鳴る。

三重連の大太鼓。 河内音頭は 僕の逃げ出 したくなる軍鼓 \mathcal{O} 響きであ ŋ

駆け込みたくなる、村祭りの人いきれである。

ええがな、ここでええがな。

1 やや、 こんなとこ。 なんでこんなとこに生まれたんや。

忌まわ い濱野家。 絶えない家族 \mathcal{O} いさか それも河内 やつ

くなっ 田工場もあるし。 想い 出すとい て喫茶店や つも気の毒なお父ちゃ だから今年も吸い寄せられて戻り石碑に手を合わせて涙 ハ イウエ イに化けて ŧ ん 彼らの魂はた お母ちゃん。 河内 にゆたっ \mathcal{O} 田 て んぼが 1 な

代は、 を流し友と酒酌み交わし、 まだ、 この旧丈六の家で暮らしていたのである。 とめどなく語らうの であるが、 次の章、 中学時

終章 後日談

人の運命はおよそ意想外

進駐軍が高野線に仰山乗って来はって…ダンス・ スパ ーティ。

河内人間は会うはずもない GI と会って、 にこにこ笑顔。 おろかな日々

の時系列である。

摺られたような人生に伴う不安感がいつも同居していた。 野と言う、 俳句式にいえば、 畑ばっかりの大地に立った新しい学校に通う。 そんな状況下で、 僕は田んぼの畦道をあるい なんだか、 て、 引き 大美

それが「登美丘中学」だった。

美中の のとき、 り、 させる、 業したら行く学校。だが、 新制中学とは、 後は東工大、一橋大、 いように、 そんな学校では、 よく解った。そうやって歩むべき道が決まっ 将来何になるか、 エリート養成みたいな旧制とは違い、 後年、筆者は一時期、 通う方が目標を一生、見損ない 早稲田、 さっぱり教えてくれない 慶應に全員入るという高校の英語教師 毎年50人が東大に上が て 誰でも小学校を卒 1 かねな から るから親が入学 のだと

思う。

せい ないまま、 現に僕 勉強どころか、 の場合は勉強もしな 受験となった。 ぐれない か 0 たし、 のが不思議なくらい 父親と母親との絶え間なき確 で、 行き場の 分か 執 5 \mathcal{O}

勉強のでける子は三国へ行く、 あ λ たも受けたらどうや、

嫌やと言えば、 丁稚奉公。 自転車使って部品運び。

一日なんぼの世界、いやや。

で、 いややな。 ということで、上宮へ。大阪市内の学校 そんならい 勉強に本腰を入れるしかないな。 先生方が坊さんで、言わはること、 っそ、坊さんになりや。 知恩院さんの偉 へ毎日通う。 何一つ納得できななったの 1 坊さんになる 人 知 0 てる から。

行けという。 坊さん 1 やや、 その 外国語やりたい、 の教会からアメリカへ行けるかも。 とな らったら、 天理大学の 外国語学部

僕は逃げ出す気で東京の大学ばかりを受験した。

慶應と学習院である。

店の が れは来たのだの が 並 ん 受験科目が少な が棚にも、 でい 『文学界』と並んで『文藝首都』、 7 7 ケッ Ļ 慶應には トどおりにある、 『三田文学』 「もみじや」 『早稲田文学』、『三田文学』 という雑誌が出 とい 5 5 1 そ

仁徳さんの森から飛来してきた白鷺が田んぼの中に降り立ってドジ 所は大阪は河内、 \mathcal{O} は戦後間もな 大草村とが合併 か 1 の河内音頭で有名な南河内 頃。 な て登美丘 つか \mathcal{O} 町 昭和三十年代にもならな が 誕生。 そこに中学も誕生。 \mathcal{O} 田 んぼだらけ 1 \mathcal{O} 昭 まだまだ 野田村と 和 2 ョウ 8

をつい ば む、 それが当たり前の風景だった頃の話である。

たって白鷺をながめ、「白鷺は小首かしげて二の足踏んで くなるよ」 うちの母親は、 と節をつけて唄う。 登美丘東小学校の北側に隣接する平屋の座敷で火鉢にあ 足、 足、

「それって、恋の唄んであげるやね」

るが、 の心が詠めたからこの 中 郷里の の男の子の 旧丈六の田んぼは南画の墨絵のように美しかった。 くせに、 時代の河内風景をかなりあざとく診て 僕はとんでもない 恋の手練手管を心得て、 いた感があ 小 唄

帳が 凍えるような月光が校舎に降り注いだ。 穂も豊かに日差しを受けて、 夕暮れは田んぼの向こうに竹藪が見え、その左手には大池の土手が 降りるとヤン マたちが無数に飛び交い、 木造の東小学校のガラス窓はきらめき、 彼らが葉裏の枝に休むころ、 夜の 薄 \mathcal{O}

ば、バンパイアーが月に向かって吼える、 先生たちで、 していた裁縫室の畳はぼろぼろ。職員室は復員してきた兵隊さん上がりの 木造板張り。 僕がこの校舎に上がったのは戦後1年後のことで、兵隊さん 戦前から田んぼの中にあった野田小学校 タールを塗って、二階建ての 毎日、 校庭に出ては整列の訓練をさせられ あの慄然たる光景を醸していた。 コ (現登美丘東小学校) の字型の校舎は夕方ともなれ の寝泊まり の建物は

「気を付け!」

「番号!」

1 2 3 4 5 :: 直立不動 の姿勢で大声で叫 λ いた。

身体がふらつくと、 つか つかっと走ってきた先生がビンタが飛ばした。

顔を赤くはらして帰ったら、 で先生に礼をいう、 そんな時代だった。 母親がようまあ鍛えてくれはったと、 父母会

らわせた。 じもじしていると、 ある者は とは何ぞや。 教室を借りてはじまった新生中学だった。 庭に男の子とブル 登美丘中学校の前身は軍国色の消えやらぬ 「男女七歳にして席を同じゅうすべし」 砂場で男女に相撲を取らせた先生もいた。 先生方はご自身でもお解り頂けてるのか、 ーマ姿の女子とを並べて手をつながせ、それがいやでも 「貴様 民主主義を解っておらん!」と、 民主主義教育とは何ぞや、 野田と大草 が民主主義だと言い、 そうでないの \bigcirc 小学校の ビンタをく 自由 空き 校

行進させられる訓練も繰り返し行われた。 争だと、 は小学校 銃剣道や匍匐前進の教練こそなかったが、 蓄音機を校庭に持ち出し の卒業する日まで続き、朝鮮戦争勃 「軍艦マ チ 発の 直立不動の をかけて、 昭和25年か 「気を付け」 隊伍を組 らはまた戦 んで

き 僕らはその初使い モル 時代だった。 W 教室をやっ か その頃、 タ 1 1 匂 ル平屋建て校舎と運動場が出現した。 を放ち、 教室が足りずに木製のデスクと椅子を運動場に持ち と思 ていた中学生たちはなんだか寂し気な感じで、 2 7 か二年目で、 いたら、 それを嫌だと思ってもそこで勉強させられる、 大美野八区 入学したら、 の畑に 床のオイルステンがむやみに これが現在の登美中であ 「白亜の殿堂」 僕らもああなる と呼ば 出 そんな 青空 れ ŋ

私立のような登美中

悠 、校舎が2棟ずつ2列に並んで建っ Þ 登美丘中学校は木造平屋建て 周 2 0 0 メー \vdash ル の運動場があり、 の新築。 てい た。 干 それに面し ルタル仕上げである。 て電車みた 1 に長細 西面に

げで、 と制服 較にならぬ程生徒との心の結びつきが強かったから、 30代、 社会は森先生(ナポレオン)、田中先生、美術の植田先生、校長は武井先生。 忠治先生、 上先生、 は教生で来てそのまま専任になった中務先生、 矢野先生、 11 1) つまり、 う不安もなく、 テンがそれを遮り、 職員室が西に位置して、 も共に過ごすというふうであった。 西向き座ると、 \mathcal{O} 体育は、 男女が木製のデスクに向か 4 英語は吉田市郎先生(ウータン)、 書道は書家の坂部先生、 0代の熱血教師ばかりで、 学校生活だけでなく、 心 優 登美丘 南面の窓から陽が差し込んで、 11 国語は西野先生、 池田先生、 中学はさながら私立の 始まりの鐘がじゃらん、 生徒の生活その 音楽は馬庭先生、 3 5 0 0 9 て座る。 いまどきの公立高校の先生方とは比 森井先生、 メー 佐々木先生、 軍隊で北支から帰国した川 椅子も木製。 気風に満ち満ちて ものと密接に繋がって、 じゃらんと鳴らされる ルばか 数学は大野早苗先生、 転勤で動 職業科は中地先生 厚ぼったい 和知先生、 りやらせる坪井 全部 白地 て当然と ニス仕上 理科 m

1学年5クラス。 1クラ ス45名前 後。 男女比はほぼ 半

文明はようやくラジオからテレビに移行。

9 て 14万円になったころ、 白黒テ ビは当初ろくに映らず、 私が中二の時か、 1 4 インチが 父がそれを買っ 2 0 万円。 たら町中 徐 Þ \mathcal{O} が

紅白歌合戦を見るなか、 見て帰っ 話題を呼び、 ことを覚えている。 た。そんな時期は一年と続かず、 見学に来たお客様が20人もいて、 「火の用心!」 カチカチ…と、 あちこちでテレビを買い出して、 栃錦と若乃花の名勝負を 丈六の家々を回った

盲 なればこそ見える心の突

眼に映る景色は実物であっても、 本物ではな 11

騙されてい るわけでなくとも、 実物は自分の思い とは別に勝手に改変さ

れ、壊され、消滅する。

がすべての 郷土の風物が自分の思い 人々 \mathcal{O} 脳裏からも消滅していることに気づかねばならない。 とは無関係にどんどん変わ り果てると、 実在感

象づい の段階で故 したのと無関係ではない。家無き子で堺市内の市営住宅に行った僕は、 思えば自分の幼年時代も盲 て な 郷からむごくも出ねばならぬ運命と思い知らされた。 い。それは多分、 高校一年生の六月に父が丈六の生家を売却 同然で、 環境を視て いるようでさっぱ り印

どうせ放浪 \mathcal{O} 一生か。 ならば生涯、 文など綴りて。

体質から来る死 \mathcal{O} 中也が書い 西行法師 \bigcirc た詩そのものだった。その身は犀星か表棹影か。 心境を一六の少年が思い の忍 び寄りにおびえながら模索するしかな 、知る。 「思えば遠く かっ 来たもんだ」 不安と虚弱

11 だから てい 谷崎 潤一郎 る 『春琴抄』 『春琴抄』 は 『細雪』で生粋の大阪人でもかけない との出会いは自分自身の問題でもあった。 では道修町の商 人の 心が 僧 1 ほど露わ Щ の手の暮らしを描

描 琴と彼女を恋 1 不慮 \mathcal{O} $\overline{\mathcal{O}}$ 事故 は 心 \mathcal{O} 7) か 奥底に秘めた生きざまにほかならない 慕い 故意の仕業か。 てやまぬ佐助の奇妙な主従関係。 不幸にして幼少のみぎりに盲人とな これを句読点なしで 0 た春

出る。 る記号だが 文字作品でも、 この筆力はだたものではない。 谷崎自身、 行間から管絃の音が漏れ 1 くぶん、 もどかしか 文字はイマジネー て止まない ったか 0 春琴の シ 彐 ン 情 を掻き立て 念も溢 ħ

家族は言うが、 言葉を控えるけれども、 な映像作品を世に送り出してい 物たる春琴は濃厚だ。 で夢中だったという。 京マ チ子主演で映画化がきまったとき、 それはどうだか。 こんなこと、 その表出をこよな 文学の世界では放免だ。 る。 川端の松子よりもイマジネーシ 言っても く願っ 谷崎 7) て、 は彼女の妖艶さに 11 春琴にモデルは かと迷ったが、 谷崎は生涯2度、 常 惚 ヨン いな れ 人なら 立派 込ん \mathcal{O} 1 産 لح

チ子を春琴に、 ち込んだ谷崎 昭和 一桁代。 の内奥にこびり 大阪道修町 若き田中絹代と高田幸吉 の我儘娘を描ききった作品。 つい て離れ め \mathcal{O} のは、 『春琴と佐助』 何 ? そ と、 \mathcal{O} 制作に心底打 戦 後、 京 7

それ ゆえに生じた、 連綿たる家族の桎梏は ?

うちにもあ ったこの種の桎梏。 やはり、 確か 8 た 11 家族に。

文学』 会い 系のお孫さん そんな思いで、 1 ままで窺うこともしなか を通じて長年の知 百百子さんとは慶應義塾が にもあ 百百子さん、 たり、 ŋ 長年伏せておられたお気持ちを語 合いだが、 ったのは、 つまり、 谷崎 谷崎 谷崎潤 心の痛手は問うてはならぬという や荷風を中 佐藤 郎 (佐藤春夫) のお孫さんに、 心 に創刊し 0 てもらえた。 \mathcal{O} 両方 た 昨 · 日 お

語ったからかもしれない。 とや言わ 私の気持ちゆえに他ならないが、 ん縁とや言わん、 そんな因縁浅からぬ言い伝えを自分の 私の方から、 我が累代の父祖が背負う業 口から

文学を語る人間は受け継いだ血縁のおぞましさを語る。

やシエイクスピアでさえ、 漱石も、 太宰も、 一見家族ヒストリーとは無関係なフィッ 色濃く、 その陰を盛り込む。 ツジェラルド

川端の の絡まりと決別したくてできず、心の痛手を歌に託す。 家族にとっては心穏やかならぬ問い 『伊豆の踊子』など、 その典型だ。 かけを、 歌人の晶子も登美子もその 自らを苦しめて吐露する。 出自

た、 族の心 かも。 その一 合う。 あ 言われ、それでも遺された家族の心については、包み隠さず語ってくれた。 0 谷崎さんのお孫さんとは、浅草の、 その作品を紐解 つ一つをここで書いたら、私立探偵のごとき研究家は喜んでくれる 手柄にもされよう。 私も覚悟して行ったけれども、 の奥底にあったもの。 れば、 我ら いて頂くほかない。 \mathcal{O} 世代の生きる縁。 だが闇は闇だからこそ情感をもつ。 それは奇しくも、 百百子さんは何も語る者がないとも 外人客で賑わうとあるすし屋で語 谷崎や近松が浪速人を描き遺し 私の出自とも繋がるもので 遺された家 n

あとがき

人間とは、 1 びつな歴史の流れに翻弄される、 きわめて脆弱な浮遊物で

は、 あ 大事にとっておきたい存在である。 り、 だから余計に不憫になる、 人生は浮き草同然にとりとめがな 見捨て難 だから僕はたくさん短編を書い いけれども、 V) 7) Þ 見捨てる奴が憎い 壊れ物としての 人生

芥川賞 ない、 は訳がある。 1) 恋物語である短編 郷里 寂 の最短コー \mathcal{O} 町 い男女の姿があったからであろう。 野田村に たぶん、 スとい 住む陶芸評論家と寺で育てられた孤児の 「点睛の壺」はそんな形で雑誌に出た。 海外文学思潮のはんらんする誌面にはおよそ似合わ われる 『文学界』という月刊文芸誌に載せた 文藝春秋社が 少女との 淡

その愛のかたちは僕の心の余韻となって、 今も忘れが た 1

て、 ない やかな気づか 夕餉時 P 家で昼間だけ 登場人物が今日もこのちいさな、 の手仕事をして畳の上に丸テー いをしながら食べるのである。 一緒に居て庭木の手入れをし 台所と二間 ブ ルを広げ、 て 1 た の畳の間と書斎し \mathcal{O} 淋 に、 この 1 け れども細 日 限 カン 0

えない。 語らい やぶ台を挟 この二人は夫婦でもない、 はとぎれとぎれに続くのである。 それ で貧し に気づきながら娘はまだ愛してはるね い食事をする。 11 や妻とするには若すぎる娘と初老 山で亡くした妻のことが男の んねとぼそりという。 心 \mathcal{O} から消 男が 5

うところを視たくてと、 編集部のYさんはこの作品がよほど心を捉えたか、 わざわざ見に行ったという。 どうし ても丈六とい

僕の河内とは、そんな世界である。

ブ 田 ん ながら走ると、 ぼ \mathcal{O} うち続く南海電車高野線が萩原天神駅を過ぎて 右手にその丈六の家並があり、 小学校の校舎が視界 ゆ 0

僕を含めた典型的な河内人の世界に入ってもらえます。 スが に入る直前 4 5 鳴 0 1 7 う中編 駅に滑り込む。 に僕の生家もチラリと見えて、 \mathcal{O} 舞台にしたところで、 ここが登美丘の入り やが そこから歩き出 Í, て 北野 この 辺りは 田!」とアナ てもらうと、 「河内19

婦善哉』 も流行 りで野 から、 吉が言う名セリフ、 わ 話焼き女房を淡島千景さんが演じた みな大阪弁をあや かつて、 りの方で、 物語全般がうちの中 0 田村丈六は描い た。 で、 この街に短期間ではあるが借家していた織田作之助さん 森繁さんは満州帰り 雪の降る法善寺横丁を相合傘で歩きながら、 柳吉蝶子 0 「おばは る森繁久彌さんにぐうたら男維康柳吉を演じさせ、 の葛藤を飽きもせず描いたが、 てくれなか の出来事だった。 ん 頼り っった。 で森光子さんらとうちにも遊びに来てた にし 『めおと善哉』 それでも監督 てまっ せ は \mathcal{O} の豊田 舞台は大阪 はやって、 言は僕ら中学生で 親不孝もん 四郎さんが 映画 \mathcal{O} 街ば は \mathcal{O} \mathcal{O} 『夫 終 世 柳 巧 カン

苗先生から英語も習い てい 歌うと、 東京人たちは誰も 大野正雄さんが、 まさにそ 涙が流れ 正雄さん の頃、 「こいさんのラブコール」を出し 丈六の僕の家の応接間に短期間 知 て仕方がない。 のお兄さんは登美中 らない。 して、 今、 そこがええ 僕がなぜ涙を流 カラオケで の数学の先生で、 んです。 「こいさん 1 て、 5 て歌うの フラン 0 ぼくはこ のラブコ B ク永井が か。 0 た作曲 \mathcal{O} 同席 大野早 ル をを 歌 家 した \mathcal{O} 0

家と過ごした丈六の家には、 の情景が家庭的な複雑さと綯い交ぜになって浮かび上がるから、 \mathcal{O} 歌がテレ ビで歌わ れ登美丘 父も母も兄も元気に暮ら \mathcal{O} 町 \mathcal{O} 人も歌 0 てい 、 た 頃、 L てい 大野 先生ご一 涙が流れ そ \mathcal{O} 日

見做せば、 てやまぬのである。 わが家族の沿革はいかに表出すべきか。 大野先生ご一家はきわめて洗練されたモダニズ ムだと

家族の ヒス トリー は血脈だ、 ねじれだ、 俗界の在り処の 0 か

日 々は、 思えば大野先生ご一家が家を再築するまでと同居なさった中学時代の まだ終戦の詔勅を聞いた日から十年と経っていない頃だった。

見送り、 ٢, かけていく。お父上は奥座敷で日本画の製作に夢中。正雄さんの後ろ姿を るい歌が聞こえる。 夏。庭の松の木で油蝉が鳴く。 何度も報じた同じ3球ラジオから、 画作に見入る中学生の僕…。 紅白歌合戦も始まっていた。 B29大編隊、紀伊半島東方洋上北進中 こいさ~ん、 正雄さんは朝日放送へ出 こいさ~ん、 とけな

あれからさらに半世紀以上が経ったある日、 僕は、 このまえがきを書く。

ぼくのモーターボート

夏の日、もう昔日となった丈六で、

終戦の詔勅が油蝉の鳴き声といっしょ。

どうせ負ける戦争や なんでやりはった

父母の言い争いも「蝉の声の中。

父の怒号に母の泣く声 蝉も泣く。

稚児の僕は いたたまれず庭を出でて隣 \mathcal{O} 田圃 のあぜ道

あれから半世紀。

その田圃は埋められてコンクリ面の駐車場に。

幼い僕が閉じ込められた丈六の家の、 白壁土蔵

今は駐車場に隣接。 威厳も気味悪さも悲壮感も消え失せ、

その悄然たる光景を、僕は駐車場を挟んで立つ

カフェからぼんやり眺める。

中也でも幸太郎でもないが、

父母の声いずこ。兄の姿いずこ。

住人で残るは僕だけ。 五歳の幼児が今や八十。 近々屍と化す、 か:

カフェ の近く、 高松の墓地への道すがら公園がある。

ここいらは元、 田池だった…そうだセメダインと板切れで作った僕の

模型の モーター ボ ートが藻にスクリュ ーをひ 0 かけてぶくぶくと…

救いにも行けず泥中に…その泥の上にどっさり、 どっさり

土を盛られて、今は公園。ブランコの辺り。

あのモーターボート、 呻いているのか、 公園の奥底で。

二〇二〇年一一月一六日

警鐘作家

濱野成秋

午譜

昭和一六年 一九四一年

三月二五日、 本名濱野成生。 に秋を付け、 成秋とした。 大阪府南河内郡野田村丈六 父濱野定雄、 父は特殊鋼を扱う会社を経営、 母濱野秋野。 ゆえに筆名は 二四五番地にて出生。 岐阜に 成の下

出身。 会の布教使宅に転居。 居していた 藩校学頭。 マンガ 高取藩家老職役宅に住む。 ン鉱 士族か Ш 一族は天理教に帰依。 \mathcal{O} 採掘権を得て鉱 否か は記録な 初代説教師石井元吉は母の く不詳。 山業を経営。 奈良県久米町 石井家三女にて、 明治維新後、 母は奈良県高 の天理教土佐 父なり。 母 家老宅に の曽祖 取 父は 町 同 \mathcal{O}

勤務。 主濱野清太郎 妻の娘初枝 斐郡大野村 母秋野は長じ 数年後、 の大地主所弥太郎 の案にて七歳にして大阪府南河内郡中百舌鳥の大地 の養子に出される。 て薬剤師となり高取町 大阪の会社社長と見合い結婚。 の長男として出生。 の元御殿医の 夫定雄は岐阜県揖 後妻の 石川 子ゆえ先 医院」

の義理 宝多 気苦労 定雄は清太郎 濱野家は長曾根に在して彦根 々。 \mathcal{O} \mathcal{O} 跡取りを得て安泰と見えたが親戚筋がこの案を不服とし 堪えぬ状態が続 関係が生じ、 の後妻しげの下で育てられる。 成生が誕生して後も、 いた。 \mathcal{O} 井伊家の 脈流。 複雑な家族関係に ここに養父・養母と 家紋 入 り 重箱等家 7

母とは は義母 な が げに折檻を受けて離縁され、 が妊娠に気づき復帰、 入籍された。 兄 離反状態とな \mathcal{O} \mathcal{O} (はじめ) 指示 を見た姑が実 \mathcal{O} 下、 居宅は当時、 は昭和・ 義理 0 成生を産む。 た。 \mathcal{O} 母でない 十年三月十九 の子を我が子と思 秋野は姑の 兄がまだ嬰児 まだ本社至近の大阪市内堀江。 事実を面前で告げ、 この年、 日 折檻を受け続け、 に 誕生。 の頃に後妻とし 0 すでに丈六の地 て育てるが 兄 \mathcal{O} 実母 以来、 里に帰る て秋 は あ に 兄と ま 姑 秋 別 野 野 V)

宅として白壁土蔵 の家を購入。 真珠湾攻擊勃発。

乳もままならず虚弱に育つ。 事業は大 定雄は軍需特殊鋼専門の商社を経営、岸信介商務庁長官と親友。 7 に栄えたが成生はその恩恵に十分浴することなく授

昭和十九年 一九四四年

三裁

乏して暮らし楽ならず。 というが、 姑しげ、 病没。 秋野と兄一との関係は修復されず。 享年六十四歳。 秋野の手を取 り和解 世間は益 々物資欠 て果てた

昭和二〇年 一九四五年

四歳

出され丈六の自宅台所下防空壕にて療養。空襲中に父の妾宅焼失 機銃掃射を受け頭部二か所に裂傷、 よる機銃掃射の被害を受ける。成生、大美野幼稚園入園。 総てを焼失。家族は連日B29爆撃機による空襲や護衛戦闘機に 三月より、 その乱行判明。 米軍の空襲しばしば受く。父定雄の社屋、 八月、 敗戦。 土佐堀河畔にて瀕死状態。 本社工場 成生、

昭和二一年 一九四六年

五歳

来た高校教師猪子静子先生より英語の指導を受く。 て生死の境をさまよう。 家族関係険 市内空襲以来、 元社員の復員多し。 成生、 身体虚弱にて胃腸障害に ビルマより引揚げて

昭和二二年 一九四七年

六歳

子先生。 野田小学校 成績は全優。 (後の登美丘東小学校) 六年間優等賞を得て卒業。 に入学。 担任は新任 桂先生は体育に

弱 1 成生が運動会に欠席したのを心配して迎えに来てくれる。 そ

の愛忘れ難い。

昭和二四年 一九四九年

八 歳

する。 掛け そこから便所へ逃げて首を吊った新兵がいたとか。 真夜中、 ンタ型の木村教頭を評価して陰口。池野先生は宿直の時、電話を 担任池野喜和先生 て来て、 戦時中、 校舎内 一緒に寝てくれと言う。 兵舎に充てられていた裁縫室の畳は破れて汚れ、 の警備にバットを持って巡回。 軍隊経験なしでビン 長島君や安本君が一緒で、 タなし。 学校の幽霊を実感 母親たち、 ピ

昭和二五年 一九五〇年

九歳

下辰夫、 西田毅、 朝鮮戦争勃発。 中林義男、 林文也、 内山孝治、 東小学校で軍事教練を受く。 諏訪明子、 中村俊一、 小池清子がいる。 長島国男、 友人に安本郁夫、 上口宗弘、

昭和二六年 一九五一年

一 〇 歳

この頃、 人の世の無常とはかな ひと夏、 母方祖父母、 奈良県久米、岡村に預けられる。 母方長男、 い死去を思い知らされる。 岡村の伯母 の死に遭い、 明日香川で溺れる。

久米元 出されずに済んだか。『少年倶楽部』掲載の横溝正史の推理小説 泣き叫びて父を呼 父と岐阜へ。 の冒険 揖斐郡小島村の父の実家に。 小説に夢中。 び救出される。 作文らしきもの この出来事ゆえ 小川の毒虫 しきりに書く。 に岐阜 に里子に に刺され

昭和二八年 一九五三年 一二歳

寺、 か、 興味を持ち、 は大野早苗先生。 内山孝治、 登美丘中学に入学。 新古今和歌集、 龍田川、 置田恵子、 竜安寺を探訪、 京都嵯峨にある 堺出身の与謝野晶子、 俳 同級に林文也、 大亦郁子、 人の松尾芭蕉、 物語を書き始める。 「落柿舎」を父と探訪。 矢野紀美、 松岡恒雄、 向井去来などの足跡探訪 丈六居住の織 小林恵が 石倉、 写真に興味。 政田良一、 同じく法隆 田 作之助 る。 担任 力 12 ほ

映画に夢中。 登美丘劇場、 堺電気館、 宿院劇場に通う。 メラ作りや現像焼付に夢中。

昭和二九年 一九五四年 一三歳

門前 える。 ださり、 奥座敷をお貸しして製作ぶりを知る。 応接間をお貸しする。 ク永井の 担任の大野早苗先生の家が火事で焼失。 再建までの \mathcal{O} 早苗先生の父大野桂遷先生は日本画の巨匠。 小僧で覚える。 教師としての心の立派さに感動。 「こいさんのラブコ 早苗先生の弟大野正雄氏は作曲家。 早苗先生は写真の焼付機を手製で作 ル は大ヒッ 桂遷氏より小唄を数十曲、 将来自分も教職をと考 <u>۱</u> 丈六の実家の 間、丈六の フラン

昭和三〇年 一九五五年

四歳

を読み始める。 夏目漱石に傾倒し、 『硝子戸の中』 『三四郎』、『それから』、 もこの 頃か。 『行 の三部作

昭和三一年 九五六年 一五歳

事長小林大厳権大僧正との約束。六月、丈六の生家を橋下氏に売 浄土宗知恩院直属上宮高校に入学。 父は僧侶にする積 ŋ

却。 営住宅に転居。 宮高校に 家具の大半を西岡圭一郎氏宅に預け、 ご通う。 父より出家を示唆されるが言葉を濁 英語教師富山善三郎先生のもと 堺市榎元 へ英語 〔 町五丁〕 して応じず上 \mathcal{O} 勉強に通 目 \mathcal{O} 市

昭和三三年 一九五八年 一七歳

なる。 源治鶏太 読み短編 お陰で父の仕事が順調。 漱 父、 石の 大学受験は三田文学会に進むべく、慶應義塾の文科を志望。 大美野四区に住宅を建築、高校三年生の春に転居。 『三等重役』 『夢 『明暗』、 O国』を『高一コ 『こころ』**、** \mathcal{O} 小津安二郎の映像作品『彼岸花』を母と、 映画化が大当たりで、 『彼岸過ぎまで』、 ス 懸賞小説に応募し、 父と登美丘劇場 『虞美人草』など 兄一の 佳作と

昭和三四年 一九五九年 一八歳

2回も見に行く。

ジェラルド、 周作、 子 論)、 属し、 刺激を受く。 慶應義塾大学文学部に入学、 (読売新聞パリ支局長) 三島由紀夫、 井上輝夫 安岡章太郎、 吉増剛造 サ その年、 トル、 川端康成、 (詩人)、 シ カミユ 谷崎潤 エー ーヨーク学院長)、 文学書ほぼ四百冊読破。 植田秋声、 ク 合田千恵子 らと同期 スピア、 郎、 ヘミングウ 任意学生団体 与謝 F 近松門左衛門、 (括弧内は卒後) (詩人)、 野晶子、 ストエ Щ 工 口佳巳 イ、 「文学研究会」 尚 干 大江健三郎、 |田隆彦 スキ 1 **(詩** 干 ア L 人 にて大 1 ン・ スキ フ (美術 ラデ Щ に所 遠藤 口 口昌 ツ ユ ツ 12 口

出入り。 北谷 ミネの指導を受く。 導を受け、 之輔教授 編集部永井亘氏から依頼を受け編集部の雑用を引受ける。大橋吉 ス、 のキャバ 斯 2 映像文学も多数。 エウリピデス、 短編 から、 9 武蔵関 「釈褐」 シ 神 田 アンダスン、 日 の自宅訪問。 ーボー ソ の古本屋街、 を同人誌『慶應文芸』 自由が丘2323番地に下宿。 フ 才 ク ヘンリー レ にて歌手のア 授業欠席多し。 ス、 白井浩二仏文助教授 デカ ジェームズを読めと ルト、 に発表。 ル 本代枯渇して新橋 カント、 『三田文学』 後 の研究室に デ に渋谷区 ーテな の指

昭和三五年 一九六〇年

九歳

隊伍をつくり、 六十年安保 ヒコ ルが日本中に。 の年。 国会議事堂へでも行進。 学園、 六月一五日、 どことも同盟休校。 国会乱入。 「岸を倒せ!」 成生、 警官に拘束され 清水 \mathcal{O} ユ プ

断交数か月。 警視庁長官室で説諭を受け下宿先に送還。 のち和解。 文学書三昧。 父の指図と判明。

父と

昭和三八年 一九六三年

二二歳

陰か。 出され反対論。 英語教諭として奉職。 慶應義塾大学英文学科卒業。東京国立市にある桐朋高校男子校 で撤回さる。 その後、 宮林は現在も存続。 職員全員に指示され校舎模型の建設案は 児玉校長とは終生、 初日、 校舎増築で 人情味溢れる児玉実雄校長 良き交流を続ける。 「宮林」を伐採する案が \mathcal{O} のお

昭和四一年 一九六六年 二五歳

務英語に修練。 アメリカ留学の に及び、 留学できず慶應外語に通う。 ため、 退職。 ベトナム反戦学園紛争ア オランダ系商社に就職、 メリカ全土

昭和四二年 一九六七年 二六歳

は縁遠くなる不安が募る。 訓を受ける。 佼成学園女子高 人間的 \mathcal{O} 非常勤講師。 に立派な先生方が多か 創作 雨宮校長、 文学研究続行。 江角教頭より人生の特 ったが、 永遠に学問と

昭和四四年 一九六九年 二八歳

女子美術大付属高校英語科主任、学年主任、 副教務主任。 校務忙

昭和四七年 一九七二年 三一歳

殺狀態。

この頃から文芸誌に作品掲載。

作家論。 文学会にて、 鶴見大学文学部専任講師。 ・ベロー 『三田文学』九月号に評論「ある状況の譚(はなし)」 アップダイク、 の場合=、 T 『早稲田文学』、 ベロー、 メリカ文学講義。 マラマッドなど、 海 この頃、 (中央公論社)、 アメリカ ユダヤ系

論、 ヴォネガッ ト論など。 東京大学、 立教大学、 慶応大学等で講

『文学界』(文藝春秋社)

にて発表。

チー

- ヴァ

論、

セルミ

演やシンポジウムに参加。短編も発表。

昭和四九年 一九七四年 三三歳

『三田文学』 月号に エ ツ セイ 光 のえん す 発表。

昭和五〇年 一九七五年 三四

東北大学教養部専任講師

昭和五二年 一九七七年 三六歳

メリカ小説に現れた意識 『早稲田文学』五月号に評論 \mathcal{O} 塵芥 「断片時代 ア イデス考現学」

昭和五三年 一九七八年 三七歳

談集を出す。 立大学バ 公論社の月刊文芸誌『海』からの依頼でポストモダン作家との とポストモダンアメリカ文学論を毎週一 イスカッションを研究社 ACLS特別研究員の選考試験を受けて合格し、 ツ フ 取材した作家はヴォネガット、 ア 口 ー校に赴く。 \mathcal{O} 『英語青年』 レスリー に連載。 回行い、 A フ ・フ 工 その そ ダ = \mathcal{O} ユ 7 英語で 一方、 F ラ 日 まる 中央 教 ク州 対

昭和五四年 一九七九年 三八歳

ンピ ずして大い 弓書房より大学用テキス で早稲田と一橋で使用。 『海』に。 ユ ータの出現で大変革 批評家クリンコウィ に影響與う。 教え子に橋下徹、三木谷浩二がお アメリカ作家バ の到来を予言する書。後に非常勤講 After Civilization, What? ツツ論も 海 ーセルミー に。 を刊行。 との対談を り期せ 師 コ

昭和五六年 一九八一年 四〇歳

四四〇頁 文芸雑誌 は孤独な旅 発刊。 『海』 企画執筆編集の中心。 (中央公論社) に収録)。 金星堂より共編著 二月号に、 東北大教授ほか計 短編 闇 『概説ア 河 (後に、

昭和五八年 一九八三年 四二歳

博士課程前後期 東京日野にある の丸合教授資格で東北大から移籍。 明星大学人文学部英語英文学科に大学院を創設。

始。 勉強法を付記、 『合格ライ 当参考書にて合格した学生より慕われる。 ンの英単語』 ミリオンセラーとなる。 (研究社) 刊。 早稲田大政経学部講師 大学受験用参考書なるも

平成七年 一九九五年 五五歳

リカ論。 抗文化』(大阪教育図書) 日本マラマッド協会会長に就任。 大いに人口に膾炙する。 九六〇年代ベトナム反戦当時 初仕事は共編著『ア メ IJ \mathcal{O} 力 T \mathcal{O} 対

平成一〇年 一九九八年 五八歳

顧問。 会長として監修。 に見る少数民族』を大阪教育図書から刊行。 『映像文学に見るアメリカ』を紀伊国屋書店か 日本マラマ ッド協会会長として。 編著 日本マラマ アア ら刊行。 メリカ 統括編集 映 ツ ド協会 像文学

平成一二年 二○○○年 六○歳

二ユ メリカン 日 ・ライフ』を発刊。 ク・ジュウと日系ア アメリカ移民史。 メリカ人の比較論 \neg ユダヤ

平成一三年 二〇〇一年 六一歳

短編集か中編。 日本優良図書出版会より下記の文芸五巻本の刊行を行う。 『別れる季節』 (短編集。 第一巻中編単行本『父の宿』 春の巻・奈良三輪山 (初出月刊『 「杉の舞」初出 知識』)、 すべて 「知

学 <mark>
、</mark> 野の 識 『三田文学』)『心は孤独な旅人』(短編集。 かまぐれ』 雪」 『海』など)。 夏の巻・ 初出 (書き下ろし)、 『知識』、冬の巻・杜 河内の里 「点睛の壺」 『若者よ明日香の · の 都 初出『文学界』、 「野鶲」 初出 国は 初出『三田文学』、 『知識』、 (中編。 秋 の巻・「曠 『三田文 初出

平成一四年 二〇〇二年 六二歳

セラー 七月、 ずにおれな 著者は自ら以外19名。 像文学は戦争をどう見たか』を金星堂より出版。 日本優良図書出版会より『日米映像文学に見る家族』 著書 になる。 い戦争」とした。 『日本語朗読 主要収録作家25名。 サブタイトルに「若者たちのために書か の楽 み』をグラフ社より刊行。 橋大学名誉教授斎藤忠利氏監修。 企画編集長に لح \neg ベスト 日米映

平成十六年 二〇〇四年 六四歳

学で学部を横断 犯罪を裁くに法の番人たる主人公の弁護士が復讐権なき被害者 四月一日、 の立場で苦悩する。 『愚劣少年法』を刊行。 実用英語の慣用句を網羅。 『声出し実用英会話』 して採用多々。七月、 少年法不備なるがゆえに多々起こる少年 好評にて、 初版。 中央公論新社よ 翌月2刷。 碧山学院、 学校では教えな はじめ、 り長編

平成十七年

二〇〇五年

六五歳

この年、 警告する長編 『日朝、 『日本の、 もし戦えば』 次の戦争』を執筆。 に 引き続き、 日本の戦争誘導被害を

平成十八

二〇〇六年

六六

公の 右記執筆の長編 公として、 より刊行。 で受けるプロ 『日朝、 外国の戦争勃発団体による誘発された日本が核攻撃ま これはモデルを小泉内閣として内閣法制局長官を主人 もし戦えば』を文庫化。 セスを仮装して描く。 『日本の、 次の戦争』を八月十日、 九月十日、 上下巻。 ゴ 十月十六日3刷。 マブックス、 ゴ 7 ブ ツク 中 ス

平成十九年 二〇〇七年 六七歳

母校、上宮高校に新設したパワーコース専用として大阪教育図書 より刊行。 四月十五日、研究社の『合格ラインの英単語』の版権を取得 発行は上宮学術文化振興会より。

二〇〇八年 六八歳

を全く無視した結果、 集担当者はじめ、社内の気風が慶應卒を排する傾向 説諭すべきと存じて書いた物。 れは当節、 の生活を大事にするあまり、 十二月二十日、『結婚ライセンス』 人生を視野に入れない風潮を戒めたく、自らの反省も籠め 男女の結婚年齢が30代にまで伸び、それも自分本位 市場性に乏しかった。 親の心配を気にせず、後継者や次世 内田常務が好意的であ 初版、世界文化社よ にあ り刊行。 0 ý, たが 販売 ک 7

平成二十一年

二〇〇九年

夫して時間を稼ぎ独学して成功を修めたか、これを事例集と共に 一月一日、 に移民して来た東欧系およびロ グラフ社より 『ユダヤ人に学ぶ速学術』 シア系ユ ダ ヤが 刊行。 何 ユ

る。 ので、 3 刷 引例 じているから、 期に自ら工夫をして学んだ成果をもって他山の石とすべ 末代にいたるまで、 がベストセラー な りまで。 しか ユダヤ人に学ぶとタイト 0 葉山の書庫にはカートン入りの同著が今もって何十冊とあ た。 自らの体験も交えて勉強法を説 し後世 グラフ社はこの頃から財政的に失敗を続け、 倒産後は返品された原著を印税代わりに送っ の諸君、 習われたい。 で売れ行き好調であるにも拘らず倒産し、 この著書に親しんで、 私の血を受けて ルにあるが、 いたも DNA を継承 実際には私自身 成功者とな \mathcal{O}_{\circ} ベ ス って頂きた した諸君 \vdash てきた 印税は の著書 の修養 しと論 セラ

三月二十日、 生教授退職記念号」を出してくれた。 勤務先の日本女子大文学部英文学研究科は 濱 野 成

生の れた。 誉教授が 理事長の臨席で執り行われ、母校慶應義塾と早稲田大学からも名 れとして、大学当局は創立者の記念講堂を単独で提供され、学長・ \mathcal{O} 同年度、 称号付与の対象にならなかったため、 最後を飾る締め括りとなっ 私 臨席されて祝辞を述べられた。 の在職年数が規定より1年足りなか 私の最終講義は 「日本女子大成瀬記念講堂」 た。 私 以上のことは私 への信頼度と栄誉の表 0 たため、 に 名誉教授 て挙行さ の教授人

平成二十二年

二〇一〇年

七〇歳

京都外国語大学大学院専任教授に就任。 り新幹線を用いて毎週通勤する形態をもって文学研究科の 京都外大には平成 元

俸1200万も何故払うなどという誹謗がネットに出るなど、排 教授を務めたが、月収は7万円程度。 友愛なる。 終わった。 にもかかわらず、 除運動が絶えなかった。誠意を酌まない当局はかかる輩に陥落せ しめられた感あり。英語学科の院生を長年にわたって支えてきた 理事長はしかし客員教授の扱いをしてくれた。 教授会からの感謝会一つなく平成二七年、 かかる努力も報われず、 温かき 総て 年

るが、 ◎その後の活躍は、 多岐におよぶので総て割愛する。 新聞、 テレ Ľ, 雑誌等、 他分野での活躍があ